
魔法日和

たび岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法日和

【Nコード】

N5724M

【作者名】

たぴ岡

【あらすじ】

帝国の女王に生け捕りにされた魔術師のマウは、魔霊と呼ばれる異形たちが暮らす国で働くことを余儀なくされる。人類の天敵たる彼らとの共同生活を送るうちに、やがて国際指名手配されたマウの転落人生に先はあるのか。

魔法使いがお伽話の住人とされる世界を舞台に、社会から落伍した魔術師の日常を綴った冒険しないファンタジー。

現在の進行度：帝国軍元帥が新規装備をお求め中…

第一話、將軍少女（前書き）

楽しんで頂けましたら幸いです。

第一話、將軍少女

四季の移り変わりが激しく、気まぐれな天候に年中悩まされる帝国領にも、降水確率0%の日くらいはある。

雲一つない青空を眺めて、さも満足げに頷いたのは、うら若き一人の少女であった。

年の頃は十五、六といったところか。波打つ金髪は肩に掛かる程度の長さで、毛先が軽く跳ねている。

黒で統一された軽装の皮鎧から覗く肌が、はつとするほど白い。伸びやかな四肢を覆い隠すように羽織っているマントはやはり黒一色で、肩口の留め具に刻まれている紋章は、紛うことなく帝国のそれである。

將軍。それが彼女の名であり、また課せられた義務でもあった。

ここ帝国では個人としての名称が意味をなさない。

唯一の例外を挙げるとすれば、帝国を統べる女王が遠征の帰りに拾ったという得体の知れない人物、魔術師くらいだ。

彼に関してはのちに語るとしよう。

本日の將軍は、朝から上機嫌であった。

彼女の趣味は部下の黒騎士たちを鍛えることであり、中でも天候に恵まれた休日の特訓はとりわけ素晴らしいと常日頃から思っている。

昨夜など、興奮と期待のあまり、なかなか寝付けなかった程だ。その点に関してだけは、あの胡散くさい魔術師に感謝してもいいだ

ろう。

彼の天気予報はよく当たる。

そして現在、時刻は朝の六時。王宮の中庭に集合するよう号令を掛けて、わずか五分で勢揃いした帝国名物の物言わぬ鎧たちは、一様にどんよりした雰囲気をもっている。

休日返上だ。將軍の口元が自然と綻ぶ。

居並ぶは、王城の地下深くで培養された鋼の戦士たち。

君主に身命を賭し、御恩に報いる。機会は存分に。

それは、とても幸せなことだ。

たとえ、どれほどの屍を踏み越えようとも。

幾千、幾万の犠牲を払おうとも。

將軍は、そう信じて疑わない。

びくつく黒騎士たちに、さあ命令を下そうと一歩踏み出した、まさにそのとき。

「おお…」

奇怪な悲鳴を上げて落とし穴にはまった將軍に、木陰で様子を窺っていた魔術師は感動すら覚えた。

奇縁により帝国で職を得た黒髪黒目の少年。名を、マウという。

世にも珍しい「魔力」を使える人間だ。

第一王女の監修のもと、昨夜の内に仕込んでおいた將軍用の罾は、期待以上の働きをしてくれた。

ちなみに、將軍を陥れたことにさしたる理由はない。

しいて言うなら暇だったから。

しかし今ならはっきりと言える。

自分は、黒騎士たちの貴重な休日を守るために立ち上がったのだ…

私利私欲ではない…

第二話、帝国の魔術師

「……」

無言で落とし穴から這い上がってくる將軍を、黒騎士に混ざって見物していると、不意に顔を上げた彼女と目が合った。

先程までの上機嫌が嘘のような無表情である。

日の光を浴びて輝く髪が砂まみれになっていて、マウは訳もなく残念に思った。

そんな彼に、將軍はおもむろに背を向けて、マントを外す。

取り外したマントを掌で叩くと、土ぼこりが舞った。

作業を続けながら、彼女は言う。

「言い訳があるなら聞く」

何の証拠もなく実行犯であると決め付けられて、マウは納得が行かなかった。

たまたまこの場に居合わせただけという発想はないのだろうか。

確かに自分が計画し実行に移したことは事実だが、それは結果論に過ぎない。

その旨を告げると、將軍は「そうか」と一つ頷き、

「では認めるのだな」

そう言われて初めて、マウは己の不覚を悟った。

「…誘導尋問という訳か」

さすがは帝国軍を率いる将だ。

マウは彼女に対する認識を改めた。そして同時に、思ったよりも自分は賢い人間ではないらしいことを、このわずかな遣り取りで自覚した。

この経験は無駄にはならないだろう。

しかし今、状況は自分にとって圧倒的に不利だ。

胸中で舌打ちした少年だったが、

(…いや)

この際、誰がやったかなどどうでもいいのだと思い直す。

もつと重要なことだ。

これだけは言っておきたい。

「おれは完璧な仕事をした」

穴の深さ、角度は元より、日程の調整、カモフラージュの稚拙さに至るまで全てが綿密な計算に基づいたものであることを伝える。

將軍をこうしてからかうために、自分が並々ならぬ情熱を以って取り組んだこと、その熱意の前では如何なる障害も無力であったことを、技術的な見地を交えて長々と語った。

「……」

それを、將軍は黙って聞く。

振り返ると共にマントを優雅に翻して羽織り、肩口の固定具で留め

たとき、既に彼女は剣の柄に手を掛けていた。

「…言い遺すことはそれだけか？」

聴衆と化していた黒騎士たちが息を呑む。

彼らは、自分たちの指揮を執る少女がろくに剣を扱えないことを熟知していた。

彼女に求められるのは戦術指揮官としての能力であり、そこに個体としての戦力は含まれないからだ。

慣れない刃物など振り回して、怪我でもしたらどうするのか。

周辺の国々から悪鬼と恐れられる魔霊兵士たちが上官に向ける眼差しは、厳しくも生暖かい。

すると…黒騎士たちの動揺を敏感に察知した魔術師が、不敵に笑った。

「無駄だ」

「何っ…」

將軍は我が目を疑った。

今しがた「ぼくの落とし穴」を熱く語っていた少年の姿が、忽然と消失したのだ。

誰にも気取られることなく將軍の背後に回った魔術師が、彼女の髪に掛かっている砂を指先でそつと払う。

將軍は驚き飛び退くのがやっとだった。

「魔術：か！」

実在すら定かでないと言われる怪しの技。

まさか、こんな下らないことで目にしようとは夢にも思わなかった。

しかし魔術師は「違う」と首を振る。

「魔力だよ。それと…僕を甘く見たね」

傲然と言い放ち、將軍の足元を指差す。

彼女の体重を支えた地面が、不吉な陥没を見せた。

マウは言う。

「落とし穴は一つじゃない。二つだ」

本日、二度目の悲鳴が王宮に響いた。それはどこか間が抜けていて哀れみを誘うものだったという。

自らの理論の正しさを証明したマウは、満足そうに幾度か頷くと、一転して脱兎の如く逃げ出した。

彼のあとを追い、怒りの形相で城内に駆け込んでいく將軍を、黒騎士たちはその場に佇み見送るのであった。

第三話、人間二人

「それ禁止。それ禁止！」

？

苦勞して行き止まりに追い込んでも、次の瞬間には姿を消して、はつと振り返れば廊下の曲がり角からこちらを呆れ顔で眺めている…似たような事を三回ほど繰り返して、ようやく將軍は無駄な努力であることを認める気になったらしい。

？

「瞬間移動は反則だろ、常識的に考えて！」

？

金切り声を上げて地団駄を踏む少女を、マウは半ば無視する形で、誰もいない城壁に話し掛けている。

？

「…うん、解散していいよ。彼女には僕から言っておく」

？

その声が思いの外、温かみに満ちていて、より一層に將軍の疎外感が煽られるのだ。

？

「無視するな！」

？

柳眉を逆立てて怒鳴る少女に、魔術師は困ったように眉尻を下げる。絵本の中に出てくる「悪い魔法使い」が身に付けているのは、ねじれた杖に黒いローブと相場が決まっているのだが、彼の場合はその限りではないようだった。

清潔感のあるカッターシャツは丈が合っていないのか、しきりに腕まくりをしている。いかにも少年らしい筋張った細腕が露わになっ
ていて、思わず直視してしまった將軍は、自分が赤面していないか不安になった。

散々走り回った所為で、呼吸も乱れている。いったん冷静になつてしまつと、部下の前で醜態を演じさせられた怒りを持続することは難しい。

？

「…お前は、どうしてそう、いちいち、わたしに構う」

？

この魔術師が帝都に来てからというもの、將軍には心が休まる日がない。

？

帝国は魔霊が住まう地だから、人間たちと敵対している。外部の人間という時点で警戒するべき対象なのに、怪しの技まで使うという女王が連れて来たのだから信用してもいい筈なのに、將軍は同じ人間だから…人間同士が仲良くしている姿を、あまり周囲に見せたくはないのだ。

？

「……」

？

だが、黒騎士たちの考えは異なるようだった。廊下の曲がり角で、二人の遣り取りをおろおろと眺めていた黒騎士たちが、顔を見合わせる。

？

將軍は知る由もないが、古く力ある者は太古より魔術師たちを重宝してきた。

？

魔力を使える人間は、希少で便利なのだ。

？

この二人には、是非とも仲良くして頂きたい…

？

結束した黒騎士たちが、少年魔術師の背を押し出す。

？

「ちよつ、何？」

？
振り返ったマウが目にしたのは、いつの間にか集まっていた黒騎士たちの、文字通り「鉄壁」であった。
退路を断たれたマウは、内心で焦る。

？
物理的にどうにもならないものを、魔力でどうにかすることはできない。

？
先程の「影踏み」一つ取ってもそう。將軍は「瞬間移動」などと評したが、実際は違う。簡単に言えば、あれは幻術の一種に過ぎない。

？
「待て、お前ら。それはあんまりだろ。このっ」

？
掴み掛かる魔術師の腕は細く、貧弱だ。たちまち黒騎士に取り押さえられる。

？
將軍の前に突き出されたとき、彼は罪人よろしく両腕を黒騎士によつて拘束されていた。

？
「くっ…お前らあとで覚えてろよ」

？
肩越しに呪詛を吐く少年を、黒騎士たちは意に介さない。

？
「あとで…か。そんな機会があればいいが」

？
今や立場は逆転した。腕を組んで立っている將軍が、愉悦に目を細める。

？
「…女の子が仁王立ちするのは、どうかと…」

せめてもの抵抗にと苦言を呈す少年に、將軍はにこりと微笑する。
いつも無然としている少女の、それはとても魅力的な笑顔だったと
いう。

？

「連行しろ」

？

自分たちが望んだ結果とは違うが、將軍が嬉しそうなので別にいい
かと…黒騎士たちは少年の小柄な身体を引きずる。

第四話、第一王女

「おやおや？　そこにいるのはひょっとして將軍じゃないか！」

午前九時。足取りも軽やかに食堂に現れたのは、帝国の第一王位継承者たる姫君であつた。

ここ帝国には、宝石のように美しいと評判の、二人姉妹の王女がいる。

今、遅めの朝食を摂っていた將軍にわざとらしく声を掛けてきたのは、姉妹の姉の方で、「姉姫」と呼ばれることが多い。

女王譲りの長くきめ細やかな銀髪を、今日は頭の後ろで一括りにしていた。

將軍は口の中のものをむぐむぐと飲み下してから、咎めるような目で第一王女を見る。

「姫様、またそのような格好で……」

純白のドレスは装飾過多ということもなく、それでいて王族としての品位を損なわない清楚なものだ。

しかし随分と裾が足りていない。

すらりとした脚が露出しているだけでなく、彼女が歩くだけで下着が見えてしまうのではないかと將軍ははらはらする。

「いいじゃん。別に誰が見る訳でもないし」

何より一番の問題は、このヒメ君が自分の美しさを自覚していない、あるいは無頓着であることだった。

「駄目です！ この城には今、その…あの男がいるでしょう？」

黒騎士たちに囲まれて育った將軍だが、人間の男が女性に対して何かとんでもない野心を秘めているらしいことは一般教養として知っている。

「そ、そ、そんな破廉恥な…わたしは許しませんよ！」

何やら一人で盛り上がっている將軍に、姉姫が向ける視線は冷やかだ。

「…それを言うなら、お前さんだって太もも丸出しじゃないのさ」
そう反撃すると、決まって將軍はしれっとした顔でこう言い返すのである。

「わたしはいいんです。わたしは、女である以前に戦士ですから」

「馬鹿やろー！？」

「何を唐突にキレてんですか！」

この二人は幼馴染みであるため、仲が良い。

第五話、第二王女

王城で寝泊まりしている者の中で、厳密に食事を必要とするのは、将軍と魔術師の二人だけだ。

黒騎士に至っては睡眠すら不要だし（ただし彼らは休暇を寝て過ごすことが多い）、特殊体質の王族はこの世から戦争がなくならない限りは、まず飢えることがない。

ましてや現在は戦乱の世…

畢竟、つい先日まで食堂の利用者は将軍のみであり、あとはごく稀に他国の大使がやって来て最後の晚餐をささやかに楽しむ程度であった。

そこに新たに女王直属の魔術師が加わるようになったのは、割と最近の出来事である。

帝都で暮らす変わり種の間人二人。

彼らの食事を作るのは、城内の雑務がほとんど全てそうであるように、黒騎士の仕事だ。

手入れの行き届いた厨房で、リズムカルに包丁を動かしていた黒騎士の手が、ふと止まる。

麗しい少女たちが囲っている食卓は賑やかで、そこだけがまるで別世界のような華やかさだ。

小鳥がさええるような、と形容するにはいささか姦しい食事風景を眺める黒騎士。

黒光りする鉄兜の奥で瞬く双眸が、一際鈍く輝いた…

これがのちに、とある少年を嬉し恥ずかしい悲劇へと誘うことになるうとは、このときはまだ誰も知る由がなかったのである…

それはもちろん、君主と仰ぐ女帝の長子にボディブローを叩き込んだ將軍として例外ではない。

「ぐふうっ」

身体をくの字に曲げた姉姫が、その場に崩れ落ちる。

帝国の正当たる継承者をノックアウトした將軍は、耳まで真っ赤にして息を荒げている。

「こ、このセクハラ王女は…」

何かと過剰なスキンシップを図ってくる姉姫は、將軍の幼馴染みである。

年齢が近く、また同性であることを理由に、折りを見ては將軍の発育具合を確かめようとしてくるのだ。

同年代の少女と比べて、やや細身なことを自覚している將軍は、その度に実力を以って姉姫を諫めるのであった。

善き臣下とは、主を立てるばかりではない。時として過ちを正し導くものだ。

だが、主従揃っておかしい場合はどうすればいいのか。

呆れて眺めるより他あるまい。

結局この美しい幼馴染みに甘い將軍が、いつまでも死んだふりを続ける姉姫の頭を撫でていると、不意に第三者の視線を感じた。

「…何してんの、女同士で気持ち悪い」

冷たい光をたたえる翠玉の双眸が、姉姫と將軍を冷酷に見下ろしていた。

まだ幼い、十にも満たないであろう童女である。

戦場に身を置く者としては異例な程、將軍は周囲の気配に鈍感だ。それはひとえに、あらゆる困難から彼女を守護してきた黒騎士たちの優秀さを物語っている。

しかしそれを差し引いても、この幼い姫君の隠行は、

（只事ではない…）

となる。

言葉も忘れて見入る將軍に、件の童女は一層呆れて嘆息する。

「そついうのいいから。あなた將軍でしょ。そういう仕事じゃないのに、何で年々芸達者になってくの…」

どこで育て方を間違えたかしら…と呟く彼女は、当然ながら將軍より年下である。

血を連想させる色鮮やかな真紅のドレスが、とてもよく似合っている。

気を取り直した將軍が、先の遣り取りをなかったことにして臣下の礼を取る。

「これは姫様、本日もご壮健で何より」

片膝を折って跪く將軍の立ち居振る舞いは、帝国軍將に相応しいものをとあつらえた竜皮の黒鎧にも決して見劣りしないだけの覇氣が見て取れる。

「…本当にあなた、はつたりに命懸けてるわね」

いつそ清々しいまでに己の職務に忠実で、それ以外はてんで駄目な將軍を、帝国の重鎮たちは殊更に気に入っている。

こんな將軍、他にはいない。

いたら、普通はクビになるからだ。

妹姫とて、そんな將軍が嫌いではない。

大人びた苦笑を漏らす第二王女に、將軍は無念を禁じ得ない。

「殿下も昔は、姫様のように可愛らしかったのに…」

「その言い方だと、まるで今のわたしが可愛くないと言っているように聞こえるから不思議だ」

復活した姉姫が、自分は庶民派なのだと主張した。

第六話、夢と現の狭間で

「く、クラウザアアッ！」

中庭に打ち捨てられていた魔術師が、血を吐くような絶叫と共に跳ね起きたのは、時刻も昼に差し掛かるうかという頃合であった。

別れを余儀なくされ、再会を誓った戦友の悲壮な最期に、手の震えが止まらない。

何より残念に思えたのが、夢に見た脆くも美しい過去を自分がついぞ持ち合わせていないことだった。

誰なの、クラウザー…

「くそ、一体どうなってんだよ、おれの深層心理は…」

魔術師には変人が多い。

何故なら彼らは、通常と異なる視点で物事を捉えるよう訓練された人間だからだ。

これまで「魔術師にしてはマトモな方」と冷静に自己評価していたマウは、自分自身に裏切られたような気持ちで一杯だった。

「ショックだ…立ち直れないかも」

両手で顔を覆って嘆く。

「…暑いし」

汗で張り付いた前髪をかき上げた頃には、しっかりと立ち直った。

彼にはそういう、刹那的な一面がある。

（ここは…中庭か？）

何故、自分がこんなところで寝ていたのかは…この際だ、きっぱりと忘れることにして、マウはぼんやりと辺りを見渡した。

緑の調和が美しい、見事な庭園だ。

絶妙なバランスで保たれた動植物の連鎖は、完璧過ぎるが故に不自然で、特に如雨露を片手に水を撒いている黒騎士が自然界の仲間入りをしているのが奇妙に映える。

木々を分け入った先では、また別の黒騎士が、庭園を闊歩する人面樹と互いの信念を懸けて激突しているようだった。

「クラウドとか…ないわ」

しゃがみ込んでこちらを眺めている姉姪に、貴様に僕の何が分かるのかと問い掛けたい。

「急に叫ぶな。びつくりしただろ」

そして將軍に怒られた。

責任の幾ばくかは貴様にあるんだとは言えない自分が愛しい。

「…日差しが眩しいな」

マウは抜けるような青空を仰ぎ見て、穴があつたら入りたいとはこ

ういづことを指すのかと…静かに納得した。

第七話、遠い彼

はつきり言って、姉姉妹は仲が悪い。

女王の「力」をより色濃く受け継いだのが、年少の妹姫だったからだ。

建国から一貫して弱肉強食の理念を掲げている帝国。本来ならその時点で王位継承権の逆転が起こるのだが、実際にはそうっていない。

しかし、將軍には何となく分かる気がした。

目に見える力だけが全てではないのだと。

より本質的なものを受け継いでいるのは、むしろ姉姫の方かもしれない…

例えば、微妙なお年頃の妹の頬を無造作に摘んで引っ張ると…
血も涙もない残虐非道な振る舞いに、將軍は時として戦慄を覚えるのだ。

「…姉様、いい加減にしないと本気で怒りますよ」

年長者を立てる良識に恵まれた妹姫は、こんなときですら冷静だ。

しかし姉姫はこのとき、静粛に、そして真実、怒り狂っていたのである。

「妹よ、お前は最近…調子に乗っている」

同時に彼女は、血を分けた実の妹の神をも恐れぬ行いに、深く嘆き、また苦しんでいた。

「何故、わたしと一緒に風呂に入らない」

「馬鹿な…！」

二人の遣り取りを固唾を吞んで見守っていた將軍が、驚きのあまり椅子を蹴倒して立ち上がった。

彼女は信じられないという目で妹姫を見詰め、震える口元を片手で覆った。

「嘘だと言って下さい、殿下…そんなことがまさか…」

許されて良い筈がない…

姉姫の激昂も理解できようというものだ。

衝撃に慄く將軍を、妹姫は白けた目で見る。

「そのコンビ芸を即刻やめろ」

その軽蔑しきつた眼差しに、將軍は素早く掌を返した。

「はあ…しかしお一人だと、何かと大変でしょう？」

この姉妹は、二人とも髪が長い。幼な心に母親である女王の長髪を真似たものであることは想像に難くない。

かく言う將軍も女王に憧れて髪を伸ばした口であるが、さすがに腰まで届く長さを維持しようとは思わない。

動きの邪魔になるし、手入れが大変そうだからだ。

將軍は、憮然としている妹姫の艶やかな銀髪を眺める。

実際これだけ長いと、洗うのも一苦勞ではないのか。

將軍の意見に賛同した姉姫が、小刻みに頷いて実妹の華奢な肩に腕を回す。

「何だ？ お姉ちゃんと一緒にお風呂に入るのが恥ずかしいのか？
ん？」

その手を払い除けて、妹姫が端的に言う。

「いちいち、うっとうしい」

彼女は、過保護に扱われるのが我慢ならないようだった。

ふと、会話にまったく加わってくる様子がない魔術師を不審に思い、目線を振る。

二人揃うと悪さばかりする実姉と忠臣を叱ってもらおうと呼び出したのに、使えない男だという意味を込めての視線だった。

すると、どうだ。

つい先程まで別のテーブルでちびちびと水を飲んでいた少年が、自分たちに何の断りなく食堂を出て行くとしていないか。

そのあまりにも自然な所作に、妹姫は驚きを通り越してびびった。

「ちょっと！ 勝手にどこ行くの」

自分でも驚くほどの剣幕だったが、魔術師の反応は鈍かった。

食堂から廊下へと続く扉に手を掛けた姿勢で一時停止し、何事か物思いに耽ることしばし。

「んー…まあいいか」と独りごち、結局そのまま退室するべく扉を閉めようとした拍子に、姉姫と目が合って、そこでようやく、

「え、おれ？」

と？気に眩いた。

魔術で消えないだけましであると將軍は思ったが、姉姫はそう捉えなかったようである。

「どうしたお前！ 無関心にも程があるだろ！」

腑抜けきつた対応に業を煮やし、ばんばんとテーブルを叩く。
姉姫もそれに追隨する。

「どしたん、マウ？」

この姉妹の温度差は、やはり彼と接してきた時間の差から来るものなのだろう。

女王直属の帝国魔術師という大層な身分のマウだが、世間一般では魔術師の実在そのものが危ぶまれている昨今、具体的な仕事があると言って特にない。

同じく暇を持て余している第一王女と行動を共にする機会が多くな

るのは、ごく自然なことだった。

しかしこの王女、随分と気さくである。

図らずも無視する形になってしまったことを察して、マウは「めんごめんご」と非礼を詫びた。

「ちゃんと謝りなさい！」

とうとう女兒に叱られる始末である。

「まず座る！」と手近な椅子をばんばん叩く彼女に、マウはあえて逆らう愚を冒さなかった。

しかし反省の色はない。

人の話をきちんと聞けというのは、魔術師をやめると言うに等しいからだ。

社会に溶け込めない彼らは、それ故に歴史の表舞台から姿を消したのである。

魔術師としては希有なほど常識的な観点を併せ持つマウだからこそ、上辺だけでも詫びることができたのだ。

「ホントにごめんね。ほら、おれ、たまにその辺をさまよってる変なのと交信してて二重音声状態だからさ」

そしてこれ、実に危ないひとの発言である。？

第八話、使い魔

そうだねえ、使い魔と話してることが多いかなあ…

きっかけは魔術師のそんな一言であつたと、將軍は記憶している。

使い魔。

その単語に姉姉妹が著しく興味を惹かれたのは、無理からぬことであつた。

彼女たち「王族」は、一定以上の学習能力を有する生物にひどく恐れられる。

体長が小さなものほど、その反応は顕著で、特に哺乳類の子供などは目が合っただけで恐慌状態に陥り、我先にと逃げ出してしまう。

しかし王族とて、子猫を見て可愛いと感じる感性がない訳ではないのだ。

あのもこもこした毛玉みたいな生き物は、触ってみたらどんな手触りなのだろうか…

柔らかいのだろうか…

きつと温かいのだろうか…

そんなことを夢想して過ごした一日が、必ずと言っていいほどある筈だ。

しかし、その夢が実現することはない。

何故なら彼女たちは王族で、小動物を愛でる心の豊かさを持っているけれど、それでも子猫は逃げるし、花は枯れる。

そんな彼女たちに、魔術師はこう言ったのだ。

「別に逃げやしないよ。野良猫じゃないんだから」

「……」

沈黙。

姉姫と妹姫は、無言で顔を見合わせた。

魔法使いの使い魔と言えば、黒猫である。にゃあと鳴く、魅惑の生き物だ。

使い魔というくらいだから、ひょっとしたら言葉を喋るのかもしれない。

「ああ、でも」

とマウが思い出したかのように付け加える。

ぱつと顔を上げて傾聴する姉妹に少し気圧されながら、彼はちらりと將軍に一瞥をくれる。

「……いや、たぶん將軍には見えないだろうなと思って」

その言い回しに、將軍は首を傾げる。

「わたし……には？ 何でだ？ わたしだけ仲間外れか」

寂しそうに目を伏せる彼女に、それが演技だと見抜けない魔術師は慌てる。

「あ、いや、そうじゃなくて。魔術師でもないのに見える方がおかしいの。君が普通」

説明すると長くなるので省いたが、マウが言う使い魔というのは、絵本に出てくるようなそれとはまったく異なる。

魔術師にとっての「使い魔」とは、自らの分身であり、魔力を補助する役割を与えられた仮想の人格である。

姿形は人によって様々だが、独立して動けるように設定するため、イメージしやすいよう動物をモチーフにする魔術師がほとんどだ。

制御が難しい高度な魔力を用いる際、魔術師は使い魔に負担の一部を預けることができる。

この世に完璧な人間などいないように、己の魔力を完全に律することが出来る魔術師もいないから、もっと単純に…魔力を強化してくれる存在と言っても差し支えないだろう。

つまるところ想像の産物なので、マウの言う通り、見える方がおかしいのだ。

正直、姉妹に…というより王族には見えるというのも憶測で、断言はできない。

だが、王族が魔霊を生み出し支配する存在だというなら、可能性は高いと踏んでいた。

そこには、きつとマウなりの願いが込められていて、彼が魔術師の社会で生きることをやめた理由の一つが関わっている。

彼のそういう部分が、將軍からすると付け入る隙になるのだから、人生は難しい。

彼女は、マウにこう言ったのだ。

「やだ」

「やだじゃない」

マウは脱力して言い返したものの、「ええ、面倒くせえなあ…」とぼやくばかりで、無理だとは言わなかった。

自分に見えるものが他人に見えない道理はない。それが魔力の基礎的な理屈だからだ。

彼は視線を宙にさまよわせたあと、全責任を彼女本人に押し付けることにした。

「最初に言つとくけど、返品は利かないぜ？」

「どんと来い」

將軍は安請け合いました。

もちろん後日、後悔することになる。

このときはただ、無理難題を言った手前、引つ込みがつかなかったのだ。

マウもきちんと説明すればいいのに、その労力を惜しむから、余計にあとで面倒くさいことになる。

ここで妹姫が、マウの袖をくいくいと引っ張った。

大きな瞳が期待に輝いている。

「何するの？」

思えば、彼女が魔力を見るのはこれが初めての経験である。

無邪気な目を向けられて良心の呵責が痛むのは、きっとマウが給料泥棒だからだ。

さしもの彼も、このときばかりは魔術師としての職分を果たそうとした。

小さな子供にも分かるよう言葉を選び、

「將軍だけ仲間外れで可哀想だから、何とかしてあげようね」

結果として無いも同然の説明で終わる。

彼は妹姫の頭を撫でながら、將軍の額に人差し指を当てる。

今、彼がやろうとしているのは、將軍の認識の壁を取り払い、彼女の世界に変革をもたらそうという劇的リフォームであった。

そしてそれは、マウにとって、さして難しいことではない。

魔力の制御という点では、彼の右に出る者はそうそういない。

それは言い換えれば、彼の使い魔が極めて優秀であることの裏返しであつた。

「そんなに難しい術じゃないんだけど…丁度いい。おれの使い魔を紹介するよ」

姉姉妹が息を呑んだ。

年長者としての矜持がそうさせたのか、こほんと咳払いを一つして発言権を主張したのは姉姉である。

「あー…マウ？ その使い魔とやらは…」

さもどうでもよさそうな態度を装っているが、落ち着きなく揺れる瞳は潤み、白磁のようにきめ細やかな肌は微かに紅潮している。

彼女は繰り返し手元でそわそわと指を組み直しながら、意を決して尋ねた。

「か、可愛いのか？」

愚問だ。マウは…將軍の淡い瞳をひたと見据えたまま「もちろん」と頷いた。

「当然さ。世界で最高の、僕の相棒だ」

そう断じた少年の声色には、普段の彼にはない絶対の自信が満ち満ちていた。

その声を起点とし、突如として姉姉の視界にノイズが走った。

それは、魔術師が自らの内面に住まわせている使い魔を発現させる
ときの前兆だ。

歪んだ空間に、小さな輪郭が浮かび上がる。

不思議な現象だった。

マウの肩の上に何かが乗っているという理解は、あとから遅れてや
って来たのだ。

少年がその名を囁いたのはいつだったか、明確な記憶はなかった。

「おいで、アプリカ」

第九話、アプリカ

でかい。

魔術師の肩に現れたものに対する、將軍の第一印象である。

小鳥くらいの大きさはある。

猫としてはむしろ小柄で、にも拘らず將軍が大きいと感じたのは、つまりそいつが猫ではなかったからである。

哺乳類で知らない。

（これは…）

將軍は、魔術師自慢の使い魔を、改めてまじまじと観察した。

つぶらな目をしている。

体重を支える後脚は思いのほか遅しく、グリーンのボディが鮮やかだ。

触角の角度が気になるようで、しきりに前脚で調整している。残る前脚と中脚で器用に抱えているバイオリンが特徴的だった。

（…これは、虫というやつなのでは…）

図鑑で見たことがある。一部の地方に生息し、夏から秋にかけてぎゅちゅんぎゅちゅん鳴くという…キリギリスだ。

可愛いかと問われると、いささか答えに窮するが…
ぴかぴかのバイオリンを大事そうに抱えている姿には、どこか愛嬌がある。

使い魔の正体が昆虫だと知っても、將軍は落胆しなかった。そもそも彼女は動物全般に対して特別な思い入れを持たないからである。

黒騎士たちの方がよほど可愛いと感じる。

こうして使い魔が見えているからには、どうやら魔術は成功したらしい。

なるほど、見える筈のないものが見えているというのは奇妙な感覚だ。

將軍の視線の直線上には、壁に固定された燭台がある。

位置関係から、本来なら手前側のバツタ（スズメ大）に隠れている筈の燭台が、彼女にははつきりと見えていた。

それは使い魔が半透明だからという訳ではなく、どちらも見えているという結果だけが残っているのだ。

あまり深く考えると混乱しそうなので、將軍はありのままを受け入れることにした。

將軍の反応をつぶさに観察していたマウは、考えることを放棄してぼうつとしている彼女に一つ頷き、

「うん、成功したみたいだね」

と微笑む。

安堵の気持ちは特に湧かなかった。

アプリカ…彼の使い魔の名前だ…が発現した状態での魔力は、まず失敗した試しがない。

仮に無茶な条件で挑んだとしても、事前にアプリカが魔力の破綻を

報せてくれるから安心だ。

我に返った将軍が、感想を述べる。

「心なし世界が瑞々しく見えるような…」

「うん、それは気の所為だね」

口からでまかせを言う将軍に、マウは笑顔できっぱりと告げた。

彼は肩にとまっている使い魔に、簡単に事情を説明した。

「アプリカ、この子は将軍。僕の同僚だよ」

すると使い魔は、尾部をぴんと立てて、身体をやや前傾した。
お辞儀しているように…見えなくもない。

むう…と将軍はうなった。

最初はたかが虫と侮ったが、この知性溢れる佇まいはどうだ。
得意げにこちらを見ている魔術師などより、よほど紳士的で賢そうではないか。

将軍は自らの思い違いを悟り、頭を下げた。

「貴君を侮っていたことを詫びさせて欲しい」

帝国には握手の習慣がない。

敵意がないことを示すために、彼女は腰元の剣を鞘ごと引き下げた。

「帝国軍元帥黒騎士団団長だ。他に名を持たぬ故、将軍とだけ」

將軍は魔術師を同僚とは認めていなかったが、この場では彼を立てた。

「使い魔は喋らないよ」

それなのに要らない茶々を入れてくるから、將軍はアプリカに一言「失礼」と断って、彼の主人に関節技を仕掛けねばならなかった。

「お前は礼儀というものを知らんのか」

「痛い、痛い」

引き倒されて腕ひしぎ十字固めを極められたマウが、切なく喘いだ。

透き通った翅を広げて舞い上がったアプリカを、帝国の王女らは…言葉もなく見詰めていた…

「っ…姉様！」

その場でがくりと膝を付いた姉姫に、妹姫が寄り添う。

床に突っ伏した姉姫は、胸に去来する虚しさと戦っているようだった。

「もふもふ違う。それ、もふもふと違う…」

彼女は、ただ悔しかったのだ。

巨大な昆虫を可愛いと言い張るマウの美的感覚が残念でならなかった。

たし、何よりそんな彼の言葉に胸をときめかせた自分が無様で…彼女が嗚咽を漏らした。

「虫じゃん…」

虫じゃん。

その独白に秘められた思いの深さを知って、今更ながら妹姫は愕然とした。

妹姫は、今年で七歳になる。

姉姫は將軍より一つ年下の十四歳だ。

実に倍近い歳月を、姉は歩んできた計算になる。

自分の身に置き換えてみれば、これまで過ごしてきた月日とほぼ同じだけの期間を猫に焦がれて生きていくのだと想像し、妹姫はぞつとした。

とても耐えきれない。

夢も希望も打ち砕かれた姉姫の落胆や如何なるものか。

妹姫は、姉を刺激しないよう慎重に励ましの言葉を口にする。

「…ですが姉様、あれはあれで愛嬌があると妹は思います」

「おちび…」

妹の愛称を呟き、姉姫が顔を上げた。

妹姫が微笑み、手を差し伸べる。

「さ、姉様。お立ちになって」

手と手を取り合う姉妹。

王位継承権を巡って骨肉の争いを繰り広げる二人が、今このときは争いを忘れた…

面白くないのはマウだ。

「何だか納得いかねえ…」

呼び出されておいて怒られるし、喚べと言うから喚んだのに、この扱いである。

同郷の魔術師たちにも甚だ不評だったから、今更どころ言われても気にならないが、それにしたってあんまりだ。

「こんなに可愛いのに」

再びマウの肩に降り立った使い魔が、手にした弓で弦を弾く。

優秀なアプリカ。

趣味は音楽鑑賞で、自分自身もバイオリンを弾く。

穏和で礼儀正しいこの使い魔は、マウのちょっとした自慢だ。

第十話、分岐点

午後。騒動もひと段落し、四人はいったん解散することに。

とはいえ、マウにはやることがない。

さてどうしたものかと思案していると、両手を突き出して伸びをした將軍が声を掛けてくる。

「わたしは城内の見回りに行くが、お前はどつする？」

マントを摘み上げて、身体を左右にひねりながら身だしなみをチェックする所作が、いかにも女の子らしくて微笑ましい。

だから、暗に「この只飯喰らいが…」と罵られているような気がする。たのは、きつとマウの被害妄想に過ぎないのだろう。

それすらも、器用に片足立ちをして具足を整える將軍の白い太ももの前では霞んで見えるから現金なものだ。

女体の神秘に感じ入って小刻みに頷いているマウの不埒な目線に氣付いて、將軍がさつと赤面した。

「…やっぱり駄目だ。お前は部屋で大人しくしてろ」

それも退屈な話ではある。

そそくさとマントで四肢を覆い隠した彼女から視線を外して、マウは姉妹に目を向ける。

「二人はどうする？」

姉妹の午後の過ごし方は実に対象的なものだった。

「わたしはお昼寝の時間だ」

「図書室で授業の続き」

「…そう」と頷くマウに、姉妹が聞いてもいないのに言い訳をした。その気持ちが、マウにはよく分かる。

「おちびはまだ幼いからね。わたしには授業なんて必要ないけど」

言い訳めいてはいたものの、それは事実の一端でもあったから、將軍は口出ししない。

この姉妹が女王から受け継いだものは、力や容姿だけではない。高い知能もその一つだった。

まだ幼い頃、妹姫が生まれてさえいなかった時分の姉姫（当時は「姫」とだけ呼ばれていた）は、非常に勤勉で物静かな美少女であった。

あの頃が懐かしい。

美しく成長した姫君の頭の中身が多少愉快なことになっていようと、將軍の忠義を揺るがない。

それは、現在進行形で可愛い妹姫が、これから数年で前例を辿り悲しい進化を遂げたとしても同じことだ。

燃え立つ使命感を新たにする將軍の横では、マウが最近では癖になつている腕まくりをしながら、

「…授業かあ。面白そうだね」

「一緒に来る？」

妹姫は、この年上の少年に少なからぬ興味を抱いている。

魔術：正しくは魔力か…に対する知的好奇心もあつたし、何より尊敬する母がわざわざ連れてきた人間だ。

自分が生まれる前からずっと帝国に仕えてくれている將軍は別として、王族を恐れない人間というのは…ひどく珍しい。

將軍には軽んじられているようだが、公の場で実在を確認された魔術師の噂は、近隣の国々に多大なる影響を及ぼしつつある。

人は、未知のものを恐れるものだ。

そう遠くない未来、帝国魔術師として国際指名手配されるのは、まず動かない事実だろう。

彼の関心を買っておくのは、将来的に決してマイナスにはなるまい…

「先生は誰なの？」

「それは行つてみてのお楽しみね」

マウの問い掛けに、彼女は自分が主導権を握れるよう巧みに受け答

えする。

「わたしが魔力に詳しくないように、あなたは魔霊のことをあまり知らないみたいだから。きっと驚くわ」

「それは楽しみですね、姫」

妹姫の誘いに、ほいほいといつて行こうとするマウに、将軍が声を荒げた。

「駄目だ！ やっぱりお前は、わたしと一緒に来い。姫様と二人きりなど…天が許してもわたしが許さん」

そう言われては、妹姫も殊更には反論できない。

魔術師は確かに貴重な存在だが、女王より直々に黒騎士の指揮権を賜っている将軍は、この世で唯一の存在だからだ。

「ええ…」と見るからに乗り気でない様子のマウに、妹姫はいったん満足することにした。

「城内の案内なら、図書室に立ち寄ることもあるでしょ。またあとでね、マウ」

第十一話、將軍とマウ

姉姫に手を引かれて食堂を退室していく妹姫を、將軍は「むむむ……」
とうなつて見送る。

完全に見透かされている。

未恐ろしい姫君だ。

確かに：見回りというのは方便で、將軍はマウに城内を案内する腹積もりであつた。

それは、わずかではあるが彼女なりの歩み寄りである。

彼女の心境を変化させたのは何か。

それは使い魔であつた。

黒騎士を召喚し使役できる將軍は、心のどこかで魔術師を格下と見ていたのだろつ。

生まれて間もなく女王に拾われ帝国で育てられた將軍は、戦士を尊び軟弱者を嫌う傾向が強い。

ぽつと出で女王直属に躍り出た魔術師への嫉妬心も、なかつたと言えは嘘になる。

しかし一連の騒ぎを通して、彼女は考えを改めざるを得なかつた。

この世は、広い。

魔術：あれは自分がこれまで信じてきた強さとはまったく別種のものだ。

そしてそれを振るう人間たちの実在が証明された以上、自分は更にその先を考えねばならない。

そのためには、まずこの胡散くさい魔術師との信頼関係を築き上げるからこそ急務であった。

うんうんと頷いた將軍は、ぎこちない笑顔でマウに振り返る。

「ときに、術士」

「…何？」

目の奥がまったく笑っていない彼女に、マウは警戒心を露わにする。

その態度にかちんと来ながらも、將軍は空中でバイオリンの調律をしているアプリカを指差した。

「使い魔とは出しっ放しのままで良いものなのか？」

何の前触れなく魔力に興味を示し始めた將軍に、マウは一層怪訝な顔をする。

しかし隠していても仕方のないことではあった。

「良くはないよ」

使い魔が発現した状態と、そうでない状態とでは、魔力の精度に大きな隔たりがある。

仮にデメリットがないなら、わざわざ普段、内面に落とし込んでいく意味がない。

確かに：使い魔は独立した意識を持っている。

が、その意識は魔術師本体の肉体を基盤としたものだ。

要は二人分の思考をマウの脳がばらばらに処理しているようなもので、これはなかなか疲れる。

脳に掛かる負担としては、ひたすら計算式を解いている状態と言えば通りはいいだろうか。

そうした事情を省いて、マウは端的に言う。

「まあ、疲れる」

「そ、そうか…」

一瞬で終わってしまった会話に、將軍は気落ちする。

しかしここで終わらないのが、マウという魔術師の特殊性だった。

「君は、もしかして魔術を使うのに魔力を消費すると思ってるよね？」

その声が、先の遣り取りとは違って変わって穏やかだ。

この少年は、驚くべきことに：それは本当に稀有なことである……空気を読める魔術師なのだ。

ぱつと顔を上げた將軍が、調子を取り戻して泰然と頷いた。

「うん。…違うのか？」

「もちろん違う」

マウは、幼い頃に受けた講義を思い出して、諳んじる。

「人間の身体のどこを探したって、魔力なんてものはないんだ」

ないものは作るしかない。おそらく最初の魔術師はそう考えたのだろう。

最初から存在しないものを頼っても、それは無いものねだりではない。

「魔術」の出発点は、まず「魔力」を否定したことから始まったのだ。

「だから僕たちは、自分たちの力を魔術とは呼ばない。魔力を制御するのは理論で、それは術と呼ばれるものだけど、魔力と理論は常に二つで一つだからね」

魔術師でも何でも無い將軍には、この男が何を言っているのかさっぱり分からなかったが、さしあたって気まずい雰囲気は払拭されたのを喜んだ。

「そうか。魔術師というのは頭がおかしいのだな」

とりあえずこう言っておけば間違いないと思っだし、それは違えようもなく核心を突いていたから、マウの頬を引きつらせたものは、きつとこの世の真理というやつだった。

「…っ！」

將軍の言う「ちょっと残念な人々」に分類されるマウは、否定の言葉欲して己の分身に視線を走らせるも、

「っ…」

アプリカは気まずそうに視線を逸らし、そして何か急用を思い出したかのように慌てて姿を消した。

「ちよっ…！」

自分に似て逃げ足が早い使い魔を、このときばかりはマウも責められかったという。

そんな主従の心暖まるエピソードを尻目に、將軍は浮き浮きとした様子で懷から羊皮紙を取り出す。

「では、今度はわたしの番だな」

そう言ってテーブルの上に広げたのは、城内の見取り図であった。仮に彼女がどこぞの英傑に倒されたときには、王城攻略の鍵ともなり得るこのアイテムが人間側に転がり込む寸法である。

…という訳ではもちろんなく、毎年お城の中で迷子になる黒騎士がいるため、常に持ち歩いているのだ。

傍らに立って見取り図を覗き込むマウに、彼女は言った。

「よし、見たな。今から三十秒で頭に叩き込め」

「え、無理……」

「二秒無駄にしたぞ」

ファンタスティックな午後になりそうな予感がした。

第十二話、胸高鳴る城内案内

魔術師の学校には転入生が多い。

魔力に覚醒する年齢は、必ずしも平等ではないからだ。

ただし、ある一定の条件を満たした人間がある日突然、魔力に目覚めることはないとされている。

その「条件」とは、意外なところで「身長」である。

おそらく脳の発育が関わっているとされているが、定かではない。

必然的に魔術師の雛は子供であり、それを察知した人材開発担当の魔術師が可及的速やかに現地に飛び、保護する手筈となっている。

そこで面談を実施し、魔術師として生きるか、あるいは記憶と魔力を封印するかの一択を迫る訳だ。

知らないおじさんについて行ってはいけないという真っ当な教育を受けた子供は、たいてい後者を選ぶ。

そして何かしらの事情があつて前者を選択した子供は、法的に問題がありそうな手法で社会からのドロップアウトを果たし、「学校」に放り込まれる。

これまでの人生観が砕け散り、訳が分からないものを見たり聞いたりのした拳句に見知らぬ土地に連れて来られた転入生は、そのほとんどが不安に怯えている。

そこで優しい同級生が登場し、「学校を案内してあげる」と言葉巧みに近付き恩を売るのだ。

特にその転入生が将来有望なイケメンだった日には、年端も行かぬ魔女たちの苛烈な生存競争が幕を開けることになる。

自分には、とんと縁のないイベントだと他人事のように眺めていた幼き日のマウだったが、よもや…

「遅い！ 駆け足！」

…よもや、これほどまでにハードなイベントだったとは、夢にも思わなかった。

將軍主催の城内探索ツアーは、序盤にして早くも佳境に差し掛かっている。

とにかくこの王城、廊下が長い。

長いだけでなく、幅が広い上に天井も高い。

普通にボールを持ってきて遊べるレベルだ。

さもあらん。

おそらく巨大な魔霊が通れるよう設計されているのだから。

しかし、だからといって…

マウは息も絶え絶えに、

「なんで、いちいち、走っ…るんだ」

「甘ったれるなあ！」

「ええ…」

一喝されて自分を奮い立たせることができるほど、マウは血を熱く滾らせていなかったし、将軍が吠えても可愛らしいばかりで一向に危機感が煽られない。

「これしきで音を上げるなど、男として恥ずかしくないのか！ 気持ちの問題だ。やればできる。がんばれがんばれ、諦めるな！」

バテるバテないよりもまず先に、イケメンは滅ぶべきというマウの信念がへし折れそうだった。

付け加えて言うなら、隣で熱心に精神論を提唱している彼女にはドーピングの疑いがある。

同じだけの距離を走っているのに、こうまで差が出るのはおかしい。

何かある。

そう、仮に自分なら…

マウは、疑惑の視線を少女の憤ましい膨らみに向けた。

「その鎧…」

「ぎくっつっ」

「ぎくっつった！ あ、こいつ、ずっけえ！ 鎧に何か細工してあるな？」

「…さて、到着したぞ。ここが第一チェックポイントのスライムの間だ」

マウの弾効をもともせず、彼女はきりりとした表情で大きな扉の前に立った。

もしも懲りずに走ろうとしたら脱がす。誰が何を言おうと、脱がす。そう決意しながら、マウも將軍のあとに続く。

見れば、扉の横にはこれまた大きな表札が掛かっていて、そこには幼い筆致で「すらいむ」とある。

大丈夫なのかこの国はと、他人事ながら心配になるマウだった。

第十三話、スライム

遠い遠い遥かな昔。

数千年、あるいはもっと以前から、人類と魔霊は互いの存亡を賭けて争ってきた。

魔霊。すなわち「女王の眷族」である彼らは、原則として一種一体のみの存在であり、とりわけ強力な個体ともなれば単独で一国を滅ぼし得るという。

この重厚な扉を開けた先で眠っているのは、そうした魔霊の中でも最古の存在だと言われている。

固唾を吞んで見守るマウの前で、不敵な笑みを浮かべた將軍が扉に両手を付き…

「…くぬっ」

「開かねえし」

テイクツー。体勢を変えて、もう一度。

「…おりゃっ！」

でも駄目。

將軍のショートコントを見ているも仕方ないので、マウは扉をコンコンとノックする。

直後、ぎいと内側から扉が開き、中から黒騎士が不審そうに顔を出した。

「ふあう！」

勢い余った将軍が、奇怪な悲鳴を上げてすってんころりと室内に転がり込む。

（身体を張ってるなあ…）

と半ば感心しながら、マウも将軍のあとに続く。

「おおっ」

そこで目にしたものに、思わず彼は感嘆の声を上げた。

将軍が舞った…！

顔から着地しそうなイメージがある彼女をさり気なく魔力で吊ってあげたところ、室内で待機していた黒騎士の神懸かり的な反応速度が奇跡を呼んだのだ。

まず、反射的に両腕を突き出した将軍の手が、黒騎士の肩に接触。主人の身を案じた黒騎士が、衝突を避けるべく急速に旋回。

しかるのち、魔力による浮遊が将軍に働きかけ、自身も転倒を避けようとしたのだろう、彼女の身体は黒騎士を支点に宙を舞い、空中で一転、二転し、魔力の補助を交えながら華麗に着地を決めたのである。

これぞ、まさしく三位一体の絶妙なコラボレーションであった。

自分の身に何が起こったのか理解していないのだろう。
將軍は涙目で硬直している。

主人の近年稀なアクロバットに、黒騎士たちも目から鱗である。
互いの健闘を称え合い、興奮冷めやらぬ様子でがしと箆手をぶつけ合う。

まあ、それはともかくとして……とマウは室内を見渡す。

やはり広大な空間であった。

カーテンを閉め切った室内は薄暗く、廊下から差し込んでいる明かりを除けば、燭台に灯された鬼火だけが唯一の光源になっている。

燭台とやや距離を置いて壁面に所狭しと並べられた勲章には、部屋の主のささやかな誇りと謙虚さ、あるいは実直さが見て取れた。

床一面は飾り気のない石畳で、部屋の中央に置かれた巨大な水槽が異様な雰囲気醸し出している。

人が五、六人入っても、まだ余裕がありそうな特注品である。

その水槽の中でぎっしりと詰まってくつろいでいるのが、この世で最古の魔霊であり、黒騎士が生まれる以前より王城の守護を担ってきた大御所である。

不死と言っても差し支えない生命力と再生力を備え持ち、あらゆるものを溶かしてしまう溶解液で構成されるその巨体は、いったん攻

めに転じれば籠城崩しの名手と化するという…スライムだ。

魔霊の大半が発声器官を有さないように、彼もまた音声による意思疎通の手段を持たない。

だから精神の再構築を果たした將軍は、張り切って大御所の紹介に乗り出したのだが…

「術士。こちらが何を隠そう、」

「…ああ、その件はもう少し待ってくださいか？ 今日とは別件です。素材が集まり次第…いえ、それには及びません。こちらの準備もあるので」

何やら会話らしきものを交わしている魔術師に、度肝を抜かれたのである。

しかも知り合い同士のような…何だそれ。

「まあ、遅くとも一週間以内には。その節には…はい、ご面倒をお掛けします」

だんだん商談めていく内容に、將軍は何から尋ねて良いものかと悩み、

「何だそれ」

結局そう言った。

すると、マウは切なそうに眉間を寄せて、こう言った。

「だっておれ、別に今日からここにいる訳じゃないし」

それは…

將軍は、ここ数日の出来事を思い返し、ぼんと手を打つ。

「…それは盲点だったな」

水槽の中でスライムが、ぷるるんと震えた。

第十四話、対話

そうなるよう訓練された人間だから、魔術師たちの世界へのアプローチの仕方は、常人とは異なる。

魔霊に意識があり、その方向が世界に向いているなら、彼らのメッセージを拾い上げるのは、そう難しくない。

それは見方を変えれば、人間が光を頼りに物を見て、音を頼りに物を聞くことと本質的に同じことだからだ。

「何でもありか」

と投げ遣りに吐き捨てた將軍は、もちろんそんな変態的な知覚力なと持ち合わせていない。

魔霊の始祖たる女王ですら同じことだろう。

要はこちらの意図を理解できるだけの知能さえあれば作戦には事欠かないし、最悪筆記という手もある。

ちょうど、こんな具合に。

『元帥どの』

身体の一部を伸ばして、空中で無数に分裂した己が身で文字を再現していた。

『ご機嫌麗しゅう』

精緻なコントロールを要求される匠の技に、スライムの身体を張った「手文字」が、ふるふると小刻みに震えていた。

「む、無理をしなくていいんだぞ…？」

死んでしまうのではないのかと將軍は心配になる。

確かに魔術師とばかり話していて面白くないと感じていたが…しかもあんな画数の多い文字を…

王族以外で、他に魔霊を指揮する権限を持つ者はいないから「將軍」と呼ばれているが、彼女の公式な位階は「元帥」である。

古い魔霊ほど人間を高く評価する傾向が強いから、この人間の少女は帝国の怪物たちにおおむね好意的に受け入れられている。

それは、宿命の好敵手が味方に回ったような心強さと…歴史と共に駆け抜けた数多の戦場で育まれた奇妙な愛着によるものだった。

「尊敬されてるんだな」

と、いたく感心した様子のマウに、將軍の自尊心がくすぐられる。

「いや…なに、長い付き合いだからな」

そう言って彼女は謙遜するものの、ふんふんと鼻息を荒げて実に誇らしげである。

「たとえば言葉が通じなくとも、心と心でだな！」

対抗意識を剥き出しにしたその言葉がなければ、もっと尊敬できた

のに。

言葉というものは便利な反面、容易に心の在り方を映し出してしま
う。

だからおれたちは便利屋か何かと勘違いされるんだよなあ…という
のはマウの言である。

第十五話、戦い

長老に挨拶を済ませたら、次は…

頭の中で予定を組みながら、將軍はマウを連れて廊下を歩く。

スライムの間を出てから何かあったのか、鎧を脱いだ身軽な姿だ。いつも鎧の下に着込んでいる黒い肌着は飾り気に欠けるものだったが、十代の少女の繊細な身体のラインがはつきりと浮かび上がっていて、ガラス細工のような儚さがある。

その後ろに続くマウの頬には、色鮮やかな紅葉が咲いている。

彼には、一度決意したことを曲げない心の強さがあつたし、それを実行に移すだけの決断力が備わっていた。

しばらくそのまま無言で歩いていると、やがて二人は、なだらかな階段に行き当たった。

マウの記憶にある限りでは、城門から真っ直ぐ伸びる通路の先には階段があり、それを登りきると今度は謁見の間へと続く扉がある筈だ。

他国の城内部の構造をマウは知らないが、城門を突破して通路をひた走ったその先に謁見の間があるという造りは、女王の美意識によるものだろう。

謁見の間には玉座があり、帝国の元首たる女王が悠々と腰掛けている…という構図が、王城の日常的な光景である。

その女王が、しかし本日は留守なので、將軍は鬼の居ぬ間に案内してくれるつもりなのだろうか。

忠義心の篤い彼女のことで、てつきり女王不在の間は謁見の間には何人たりとて立ち入らせないとかい出し出すと想像していたので、意外ではあった。

まさか無計画のままここまで連れてこられたとは思ってもよらないマウである。

戦闘を想定されて作られた階段は、急ではないとはいえ長大で、これからここを登るのかと憂鬱になる。

一段目に足を掛けた將軍が、「ん」と手を差し出してきた。

「転んだら危ないからな」

「…ありがとう」

マウは素直に礼を言い、彼女の手を握った。

「いや…」

將軍は少し思案したあと、マウを引き寄せて、彼の腕に身体を密着させる。

女性特有の柔らかな感触がした。

「この方が安全だ」

頬を赤らめた将軍が、そう言うてはにかむ。

マウも微笑みを返し、

「そうだね。でも、少し残念かな」

絡ませた腕とは別の方の手を、胸の高さまで引き上げて、その指を微かに蠢かせた。

「おれにその手のまやかしは通用しないぜ、女王の眷族」

直後、「ちっ」と舌打ちして飛び退いた「将軍」を、不可視の力が拘束した。魔力だ。

「本物の彼女をどうした」

両腕を軋ませて束縛に抗おうとする女に、双眸に冷たい光を宿したマウがにじり寄る。

女は、がらりと口調を変えてせせら笑った。

「へえ…本当に魔術師なんだ」

マウは答えず、更に拘束を強めた。

「言え」

肉が食い込むほどの負荷にも、女は顔色一つ変えない。

「ぬるいね、人間。この程度であたしを呪縛したつもり？」

「そうか。なら…」

マウは、掲げた腕をゆっくりと前方に突き出す。

「アプリカ」

空間を裂いて発現した使い魔が、マウの肩にとまる。

マウ自身は決して天才的な魔術師ではなかったが、極めて優秀な使い魔を連れていることで、彼は有名だった。

魔霊に使い魔を感知する術はない。

しかし魔術師を知る者なら、使い魔の存在を知っていてもおかしくはなかった。

事実、女はマウが発した言葉の意味を正確に理解していた。

「それがあんたの使い魔の名前？」

「そうだ。知っているなら話は早いな。最後通牒だ…將軍をどこへやった！」

激昂するマウに、將軍の姿をした怪物が哄笑を上げた。

使い魔の存在を知っていて、なお笑うことのできる存在に、魔術師は絶対に勝てない。

何故なら、魔術師にとっての最後の切り札が使い魔だからだ。

魔霊は人間ではないから、優に人間の限界を越える。

魔術師は…魔力は…

「知ってるよ。もちろん知ってる。物理的に不可能なことは魔力で再現できない。あたしクラスの魔霊に、人間はどうやっても勝てない！」

「！ エメスか！」

女の正体に辿り着いたマウが、最悪の事態に歯噛みした。

「もーっ！」

マウの後ろで猿轡を噛まされて転がされていた将軍が、悲壮な声で叫んだ。

その声に振り返ったマウが、爽やかに微笑んだ。

「ああ、何だ。そんなところにいたの、将軍。気付かなかったなあ…」

「これからいいところだったのに…」

エメスは残念そうである。

つまり、そういうことだった。

第十六話、エメス

「人間如きが、このわたしにどうして勝てるものか！」

呪縛が…破られようとしている！

マウは目を見張った。

魔力の呪縛とは、実は物理的な拘束力によるものではない。

心身の正常な連動を妨げ、手足を萎えさせる秘術だ。

それを打ち破りつつあるということは、彼女の臂力が人間のそれを逸脱したものであることを意味していた。

しかし、それでもだ。それでも人間は…今ある手持ちの札で戦っていくしかない。

たとえ配られたカードに絶望的な格差があろうと、挑むことをやめたなら、もう二度と立ち上がれないと知っているからだ。

それは、神秘を使うとされる魔術師にとっても変わらない。

彼らもまた、どうしようもなく人間で、「諦めない」という特権は彼ら人間のためにあるようなものだと思付いていたから、それを手放すほど賢くもなれない。

生きるということは、そういうことだ。

他から見れば泥臭い生き様だろうと、譲れないものがあるのなら。

「アプリカ！」

使い魔を発現したマウが、人差し指と中指を立てた刀印をエメスに叩き付ける。

これまでとは比較にならないほどの魔力が放たれ、エメスの四肢が砕け散った。

極めて強力な暗示は、現実にも迫ることができる。

アプリカという非凡な使い魔には、それが可能だった。

…それでも現実には常に残酷で、いつだって人間は試されている。

半ばからへし折れたエメスの手足から、さらさらと砂が零れ落ちていた。

「弱いなあ、人間は。どうしてそんなに…」

弱いの、という言葉は崩れて消えた。

エメスの全身が頭から順に風化し、足元に降り積もった砂が体積を増すごとに、彼女は本来の姿を取り戻しつつあった。

いつしか視界を埋め尽くしていた砂塵が、やがて巨人の輪郭を描ききったとき、彼女は魔神の咆哮を上げた。

「…馬鹿な…」

天井すれすれまで届く巨大な体躯を見上げて、マウが呆然と呟く。

彼の四方を固める黒騎士が、緊張に震える腕で一斉に抜剣した…

「馬鹿はお前だ！」

もちろん將軍に怒られたのは言うまでもない。

「何事もなかったように続行するな！ お前らまで一緒になって何だ！」

マウの頭をぽかりとやった彼女は、続けて友情出演の黒騎士たちをガミガミと叱る。

叱られつつも、どこか満足げな彼らの言い分を、マウが通訳する。

「楽しそうだったから、つい…」と

「むむ…」

将軍がうなる。

彼女は、忠実な兵士であり、最若年の魔霊でもある黒騎士に対して、甘さを捨てきれない部分がある。

屈強な魔霊たちに囲まれて育った弊害か、他者に厳しく自分に甘い将軍は、自らの半身とも言える黒騎士たちに強く出れないのだ。

だから彼女は、矛先を別に向けることにした。

「エメス！ エメス！」

声を張り上げて呼ばわると、砂の魔神エメスはどろりと呆気なく崩壊し、舞い上がった砂埃の中から性懲りもなく将軍の姿で現れた。

「ちいーっす」

気だるそうに片手を上げる「自分」に、将軍が掴み掛かる。

いくら自分に甘いといっても、こればかりは別らしい。

「エメス！ またお前はそうやって勝手に人の姿を…！」

胸ぐらを掴まれてがくがくと揺すられながらも、エメスは堪えた様子もなく、へらへらしている。

彼女は將軍の頬に片手を添えると、吐息の掛かる距離でこう囁いた。

「だって、あんた人間にしちゃ綺麗なもの」

エメスは砂を司どる魔霊だ。

その本性は女王が作り上げた泥人形であり、美しいものを好む。

魔霊の中でも一、二を争う変身能力を有する彼女は、言葉を話せる数少ない魔霊の一人だった。

真正面から綺麗だと言われても、將軍は動じなかった。

この世のものとは思えないほど容姿端麗な王族を間近に見て育った將軍であるが、世間一般の基準で自身の容貌が美少女に相当するにとくらは自覚していたからだ。

「だからと言ってお前、あんな、むむ、胸を…！」

そんな彼女にも、コンプレックスというものはある。

耳まで赤く染めて詰め寄ってくる將軍に、さすがのエメスも悪ふざけが過ぎたと思ったらしく、神妙な声で詫びを入れる。

「あー…ごめん。隣にあんたが転がってるのに、普通に乘ってきた

もんだから、つい」

床に座り込んで黒騎士たちとフォーメーションの確認をしていたマウが、ぎよっとして振り返る。

「おい、人の所為にするなよ。おれの目の前で堂々と彼女を縛っておいて、それはないだろ」

結論から言つと、二人とも悪い。

とりあえず説教を後回しにして、將軍は馬鹿二人に尋ねる。

「知り合いか？ 随分と仲がいいんだな」

皮肉を交えて言つと、意外やエメスが「冗談！」と憤慨した様子でマウを睨み付けた。

「そりゃあ知り合いだけどさ。あたしは気に喰わないね。こいつの女王様への態度ときたら！」

「それは…」

將軍は、掛ける言葉を失つて黙り込む。

ちらりとマウを一瞥すると、彼は拗ねた表情で顔を背けた。

いつも飄々としているような印象を受ける少年だが、そんな彼でも感情を剥き出しにする瞬間がある。

それは、女王と相対しているときに見受けられることが多く…

どうも彼は、女王を嫌っているらしかった。

第十七話、縁

この挨拶回りには意味がないのではないかと、將軍が疑念を抱き始めたのは至極当然のことと言えた。

今にも噛み付かんばかりの剣幕でマウを睨んでいたエメスが、ころりと態度を変えてこんなことを言い出したのである。

「ところで、例のものは？」

エメスの激情をどこ吹く風と受け流していたマウが、片眉を吊り上げて彼女を見る。

「…サボテンなんて手に入れて一体どうするんだ？」

「決まってるだろ」

そんなことも分からないのかと、エメスは大仰な仕草でマウの鼻先に指を突き付けた。

「もちろん植えるんだよ、あたし自身になっ」

「そんなもちろんはないんだよ」

マウは嘆息した。空中でくるくる回っているアプリカに片手を差し出すと、賢い使い魔は主人の腕に器用にとまった。

アプリカを腕ごと引き寄せて、マウが言う。

「今、種から育ててる。アプリカに協力してもらってね」

真つ当な植物の栽培に、使い魔の入り込む余地はない筈だった。
エメスの疑惑はもつともだろう。

「…それ本当にサボテンか？」

よしよしとアプリカを撫でていたマウが、使い魔の仕事にけちをつ
けられて「ハッ」と鼻で笑った。

「本物が手に入るなら苦労しねえんだよ」

ときどき妙にガラが悪くなる少年だったが、そういう時の彼には、
逆さま心に余裕があるように見えるから不思議だ。

エメスも同じ印象を抱いたらしく、腹を立てることなく肩を竦めた。

「ま、ぱつと見、サボテンなら文句はないよ」

しかし、これにはマウが黙っていなかった。

彼はアプリカを定位置の肩に戻すと、エメスに詰め寄った。

「お前：そんなふわふわした気持ちで、おれたちのサボテンを枯ら
しでもしてみろ、ぶっ飛ばすぞ。こちとら、もうばつちり情が移っ
てるんだからな」

「え、サボテンで枯れるの？」

「こいつ…いや、駄目だ。やっぱりお前に、あいつは任せられねえ。
おれが責任持つて育てる」

咲かせるよ、大輪の花を…と昏く笑うマウに、約束が違うとエメスが食って掛かる。

「何だお前！ あたしのサボテンだぞ！」

「いいや、おれたちのサボテンだね。あんたがあの子に何をしてやれたよ？」

自分と同じ顔をした女がサボテンの親権を巡って言い争うのを、將軍は見ていらなかった。

「やめろ。やめてくれ、頼むから…。そんなにサボテンが欲しいなら、次の遠征で持ってきてやる…」

そう言って二人の間に割り込むと、エメスが「あら、そう？」と途端に機嫌を良くした。

黒騎士団の采配は將軍に一任されている。

まさかサボテンのために戦うことになるとは思わなかったが、帝国はいつの時代も孤立無援だったから、今更どこの国を攻めても同じことだった。

人間側の足並みが揃っていれば、また話は別なのだが…実際にそうなっていないので無意味な仮定だ。

「將軍はいい子だなあ…」

エメスはそう言って見せ付けるように笑うと、將軍の肩越しにひよいとマウを覗き込み、あるうことが「べーっだ！」と舌を出した。

「子供か」と呆れる將軍だが、悔しそうに表情を歪めたマウもどっこいどっこの精神年齢であるらしかった。

「ばーか！ ばーか！」

と捨て台詞を吐いて駆け去っていくエメスに、將軍は本気でこの国の行く末が心配になった。

言い返す彼も彼だ。

「馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ！ ばーか！」

どうやら自分も馬鹿であることを自覚しているらしいマウが、「あ、そくだ」と思い付いたように言う。

「エメス！ カーテンな、あれどうする！」

「あとでー！」

遠ざかっていくエメスが、大きく腕を振った。

彼女を見送り、ふむ…と思案している様子のマウに、將軍が声を掛ける。

「他にも何か頼まれているのか？」

「ああ、いや…」

いったんは口を噤んだマウだったが、すぐに思い直してこう言った。

「…魔霊は、おれたち魔術師と縁が深いからな。断りきれかった…」
つまりそれは、手の内がばれているということだ。やり難くて敵わない。

如何にも無念そうに顔をしかめるマウに、さして魔力に詳しくない將軍でさえ、とうとう氣付いた。

もしかして…と。

「…もしかしてお前…実は便利なやつなのか？」

マウは…マウは認めざるを得なかったのだ。

「…ええ、自分で言うのも何ですが、かなり便利なやつです」

だから、魔術師が帝国にやって来たと聞いた魔霊は、大抵がこう考える。

便利なやつが来たぞ、と。

どれ、少し顔を見に行つてやるか…と如何にも恩着せがましく、マウの部屋のドアを叩くのだ。

第十八話、將軍の懷中時計

「村の魔法使い」という童話がある。

題名の通り、とある長閑な村に住んでいた一人の魔法使いのお話だ。あらずじは、それまで村人たちに疎まれていた魔法使いが、村を襲った災厄を退けたことで力を使い果たして亡くなってしまうという陳腐なもの。

魔法使いの死に際は、村人たちに見守られながら徐々に身体が透けていくという表記がされており、これは一説には魔法使いたちが人々の前から姿を消した理由を描いたのだとされている。

だが、魔術師たちが社会と隔絶して生きるようになった理由は、実のところもつと切実で、災厄に追われてあたふたする村人を見て「萌え」とか言い出す人間性にあった。

そんな中、この度めでたく帝国に就職したマウは、魔術師の社会で長らく変人扱いされてきた少年で、頼まれたら嫌とは言えない性格をしている。

だから、例えば見目麗しい少女に家具の修繕という畑違いの依頼をされても、嫌々ながら引き受けてしまったりする。

「…まあ、他にやる事もないしね」

と結んだ少年に、將軍は大いに機嫌を損ねてしまったようで、

「むー…」

と頬を膨らませた。

栗鼠みたいだと、マウは呑気に思った。

將軍は、彼をじろじろと睨め付けたまま腕を組み、怒りを押し殺した声で言う。

「…つまりお前は、人に案内を頼んでおきながら、実はそんなもの必要ありませんでしたと言っただな」

包み隠さず言えば、彼女はこの人を食ったような魔術師より優位に立ちたかった。

だから、魔霊たちを紹介する傍ら、そんな彼らに傳かれる自分の凄さをアピールしたかったのである。

それなのに。

「わたしの善意を踏み躪っておいて、よくもそんな…」

マウからしてみれば案内を頼んだ覚えはないのだが、それをここで口に出せるようなら、彼の半生はもう少しましなものになっただろう。

「いや、ごめんね。何だか言い出しづらくてさ、こっつ、ずるずると…」

すると將軍は、腰に片手を当てて嘆息し、

「反省しているならいい。これは貸しにしておく」

ありもしない恩を売った。

まるでマフィアの遣り口である。

「ああ、はい。それはどうも……」

さすがに嵌められたことに気付いたマウだったが、ここで強いて取り沙汰にしなかったのは、同郷の魔女たちに口応えしてもろくなことにならなかったという経験によるものだ。

今なら、それが彼女たちなりの優しさだったのだと分かる。

（六年か…）

苦い思い出が美化されるのに、それだけの年月を要するというなら、同じように六年後、將軍の優しさに気付ける日がやって来るのだろうか。

「よろしい」

と頷く彼女は得意げで、華やかな容姿がそうさせるのだろう、無骨な所作にも彩りがあり、軽やかだ。

耳に掛かった金髪を指先で払った將軍が、ふと剣帯に手を差し込む。

彼女の肌着は、側面に切れ込みが入ったワンピースなので、ポケットがない。

その分、剣と鞘を固定する革製の剣帯に必要なものを入れることが

できるよう工夫されていた。

それが軍人のスタンダードなのかどうかは、マウには判断が付きにくい。

將軍は剣帯から取り出した懷中時計らしき物体を眺めて、「ん…」と二、三回揺する。

（え、何それ…）

と内心で驚くマウをよそに、彼女は「こら、怠けるな」と懷中時計を叱った。

さり気なく彼女の手元を覗き込んだマウが目にしたものは、懷中時計の中で惰眠を貪る小人であつた。

小指ほどの大きさで、これまた將軍と同じ姿をしている。

ただし、こちらはエメスのような精巧な模倣ではなく、等身を縮めたデフォルメバージョンだ。

寢床を將軍に小突かれて、びくつと目を覚ました小人が、慌てふためき何やらジェスチャーを開始する。

それに將軍が頷き、

「ふむ…いい時刻だな。他に伝言はないな？」

と問い質すと、小人はこくこくと首肯を繰り返し、そこで不意にマウと目が合った。

《…あなた、もしかして魔力屋さん？》

その声は、はつきりとマウの耳に届いた。

「魔力屋」というのは、魔術師の古い呼び名だ。

マウは動揺した。

魔霊との「会話」は、本来もつと曖昧で、断片的なものだからだ。

何の調整もなく、これほどクリアな意思を伝えてくる存在は珍しい。

(…音。音の魔霊か?)

思い至ったマウが、古い形式に則り折り畳んだ指を胸に当てる。

「僕はマウ。マウ…ユーティ。あなたは？」

《あら、ご丁寧にどうも》

小人は、その場でちょこんとお辞儀をすると、同様に折り畳んだ指を胸に当てた。

《わたしはサイレン。昔の魔力屋さんからは言霊と呼ばれてたわ》

将軍にはサイレンの声が聞こえなかったが、マウの言葉から挨拶を交わしている…程度の憶測はできた。

「ユーティ？ それはお前の家名か？」

「気にしないで。作法みたいなものだから」

マウは巧妙に誤魔化した。

古の作法では、名乗る際に真名を告げねばならない。

マウは家名を捨てており、また天涯孤独の身の上であつたから、そこまで名乗る必要はなかったが、「ユーティ」という名称はいささか事情が異なる。

本当なら口にするのも避けたかったが、それでは失礼に当たるので仕方なく名乗つたのだ。

それに、どの道…女王は自分を「ユーティ」と呼ぶ。

どうせ、いずれは露見するのだから、同じことだ。

別に偽名を使っている訳でもないのに、何でこんなに気を揉まなくちゃならないんだろうかと…マウは恨めしく思う。

第十九話、サイレン

將軍の仕草で判断したに過ぎないマウだったが、「懷中時計」という表現は奇しくも正鵠を射ていた。

サイレンの住処は、よくよく見るとフラスコに近い外観をしており、上部の円筒に当たる部分がない代わりに落下防止の鎖が取り付けられている。

肝心の球は厚いガラスで作られているようで、指先で叩くとコツコツと小気味いい感触が返る。

大きさは掌にすっぽりと収まる程度で、少々窮屈そうではあった。

小さな小さなお家の中で、彼女は妖精のようにくるりと回ると、両手をお腹に当てて上品にお辞儀した。

空色の大きな瞳が、ぱちくりと瞬いてマウを見上げてくる。

《初めまして、懐かしい友達の人。女王様からお話は伺っています。あなたのこと、わたしもユーティと呼んでも？》

彼女たちの生みの親である女王は、マウをユーティと呼ぶ。

可愛らしい仕草に絆され「喜んで」と頷き掛けたマウが直前で踏み止まれたのは、奇跡に近かった。

「…ありがとう、懐かしい友達の人。でも、僕のことにはマウと呼んで欲しいな。どちらかと言うとそっちが僕の魂の名前で、…ご存知でしたか？ あなたたちの女王は、ちょっと意地悪なんです」

愛くるしい小人の手前、マウはこの上なく盛大にソフトな表現を心掛けた。

「魂の名前？」

と、しつこくツツコミを入れてくる將軍に、マウはにこやかに指をさつと振ってお口チャックの秘術を施した。

「むっつ、むっつ」

苦しそうにうめく彼女の耳元に口を寄せて、そつと囁く。

「…忘れるんだ、いいね？ いい子だから…あまり僕を困らせないで」

妙に艶のある声だった。

濡れた低音が脳髓を痺れさせるかのよう。

將軍は背筋をぞくりと震わせて、されど一方的な要求に屈しはしなかった。

「むっつ！」

とマウの頬に手をやって、ぐいぐいと抓る。

思わぬ反撃に、マウが鼻白んだ。

「痛い！くそ、こいつとんでもねえ精神力してやがんな…」

まさか遣り返す訳にも行かず、それでも男の子、甘んじて受け入れ

る？

頬を引っ張られつつも、構わずサイレンとの会話を続行する気概は天晴れの一言に尽きるだろう。

「とにかく、そういう訳だから。その名前は僕にとって、あまり好ましいものじゃ…って、まじ痛い！」

しかし物事には限度があるのだ。

これ幸いと人肌の伸縮性の限界に挑み始めた將軍に向き直ると、興奮のあまり密着してきた彼女の荒い鼻息が喉をくすぐった。たまらず悲鳴を上げるマウ。

「ふーっ、ふーっ！」

「近い近い！ あなた女の子でしょ！ もうちょっと慎みってもんを持ちなさいよ！」

これでは埒が明かないと、彼女を力尽くで引き剥がして、魔力を解く。

発言の自由を取り戻した將軍が、肩で息をしながら不敵に笑った。

「勝った…！」

「…そういう問題じゃないでしょ。まったくもう…」

脱力したマウが、赤くなった顔を逸らしてばやいた。

二人の遣り取りを眺めて、くすくすと笑っているサイレンに、何か文句を言ってやろうと振り返り、彼はぎよつとした。

つい先程まで屈託なく笑っていた小人が、くつくつと笑動を噛み殺していた。

それだけなら、まだいい。

ちよつとした心境の変化だと自分を納得させることもできただろう。

しかし事態はより深刻だった。

サイレンの容貌が様変わりしていたのだ。

彫りの浅い顔立ちは幼げで、人を食ったような表情が不釣り合いな印象を与える。

白いカッターシャツの襟元から覗く鎖骨が今にもぽきりと折れそうで、訳もなく悲しくなる。

体格そのものは大きく変わっていないのに、薄い胸板と華奢な肩、細い手足がひどく頼りなく見えるのは何故なのか。

マウは、深く嘆いた。この世の終わりでも見たかのようにだった。

「か、可愛くねえ…！」

すっかり変わり果てたサイレンが、口調まで一変させて語り掛ける。

《君の負けだね、マウ。どうだい、僕らの元帥はちよつとしたもん

だろう?》

マウは、答える気力も湧かなかった。

ただ、どうしたら以前のような愛らしい小人さんに戻ってくれるのか、そればかりを考えていた。

一方、將軍は未知の感覚に戸惑っているようだった。

「これは…伯爵とエメスの気持ち少し分かるような…こゝこの優越感は一体…」

第二十話、笑顔

帝国の魔術師は考える。

外見で人を判断するのは愚かなことだ。

大切なのは心の在り方と実績であり、何を思い、何を成したかでの価値は決まる。

心が清らかでも臆病では意味がない。

如何なる功績も、歪んだ行いを正当化することはできない。

容姿の美醜など、論ずる価値すらない些末なことだ。

己の信念と語り合い、確かな手応えを感じたマウは、澄んだ瞳で現実と再び向き合う。

「だが、てめえは駄目だ」

人間は誰しも自分が可愛いとよく言っが、そんなものは嘘っぱちだとマウは思う。

《そう熱心に見詰めてくれるなよ。照れるじゃあないか》

この可愛げのない言い草ときたらどうだ。

皮肉げに口元をひん曲げた表情の憎らしいこと。屈折した内面が滲み出ているとしか思えない。

第一、目付きが気に入らない。

天使のようだったサイレンの変貌に、たまらずマウは將軍の手に縋り付いた。

「何だよ！ 何でこんな…畜生っ！」

絶叫するマウに、將軍は頬を引きつらせる。

「そ、そこまで嘆くことか？」

人間の姿に化けることができるタイプの魔霊に、しばしば真似られる彼女だが、仕方のないことと割り切っている部分もある。

やむを得ない事情でもない限り、女王の姿を借りるなど言語道断だし、姉妹が女王の生き写しである以上、必然的に選択肢が狭まるからだ。

マウの姿を写し取ったサイレンは、小憎らしさこそそのままだが、等身が縮んだこともあり、一つ一つのアクションが大振りで健気に見える。

だが、マウ自身はとうてい許容できなかった。

魔術師として鍛え上げた魔眼も、初対面の者には効力を発揮しない。本性すら定かでないのに、その正体を幻視することは叶わなかった。むしろ真実と呼ばれるものがこの世にあるのなら、それは魔力と正反対の概念と言ってもいいだろう。

意思の疎通を助けることはできても、本当の意味で心を通じ合わせることができない。

だから、きっとマウが戦っているのは、いつだって「それ」だった。

幾度となく挫折し、それでも諦めきれない。

後悔することに慣れ過ぎて、後戻りすることもできない。

魔力が嫌いだった。

運命を呪った。

世界は醜くて、息をするのも苦しくて、

…でも守りたいものもある。

「アプリカ！」

將軍の肩に隠れてサイレンをそうつと盗み見ていた使い魔が、主人の求めに風を切って飛翔した。

差し伸べられた片手の甲にとまったアプリカが、力強く後脚を踏み出す。

マウの視線に緊張が走る。

「…賭けになるな。やれるか？」

震える声に、アプリカはバイオリンと弓を構えて応じる。
それだけで十分だった。

奏でられた旋律と、魔力が螺旋を描いて調和する。

「…何をやっとなるんだ、お前らは」

と呆れる將軍の掌の上で、サイレンの姿が再び変化する。

蛹が羽化するように、髪は金糸の輝きを取り戻し、瞳は目も覚めるような碧眼に。

声は天女のソプラノを彷彿とさせた。

《あら、こんなの初めてだわ。しばらく見ない間に魔力の使い方も進歩したのね》

彼女は音の魔霊である。

おもに音声を蓄えて、それにより身体を構成する。

共振という現象を通じて、遠く離れた分身と連絡を取り合うことも可能だ。

伝達と攪乱を得意とする、情報戦のエキスパート。

それが「海の魔女」と畏怖を以って囁かれる言霊サイレンである。

《家にいるわたしから「声」を拾い上げるなんて、凄いわ、魔力屋さん》

しきりに感心するサイレンに、マウは笑顔を向ける余裕がなかった。

「くっ…」

その場でがくりと片膝を付き、屈み込んだマウを、將軍が慌てて介抱する。

「ど、どうした？」

彼の手にとまっていたアプリカの姿が、掠れて消えた。使い魔を維持できなくなるほど、マウは消耗していた。

「ま…」

「ま？」

顔色が真っ青だ。將軍の心配が募る。

「魔力を、使い過ぎた…」

苦しそうにうめいた少年に、將軍は同情した。

思えば、彼は今日一日で立て続けに魔力を連発していた。

そのほとんどが自業自得であり、同情の余地すらなかったことが、殊更に將軍の涙腺を刺激したのだ。

「お前は、どこまで馬鹿なんだ…」

特に、潜在能力を極限まで引き出す使い魔の行使は、マウの体力を著しく奪ってしまう。

意識を失う直前、彼は倒れ込みながら傍らの少女を見て、ふっと年相応の笑顔を覗かせた。

気絶したマウを抱きかかえた將軍が、悲痛な叫び声で彼を呼ぶ。

「術士！　？術士ーっ！」

窓から射し込んだ日の光が、満足そうに微笑む彼の横顔を優しく照らしていた…

第二十一話、希望

帝国の魔軍将は考える。

美しさに勝るものはない。

人間たちは、やれ心だの徳だのを責び崇めるが、そんなものは綺麗ごとに過ぎない。

叡智を究めた古代の賢者たちが、気高き精神を如何に賛美しようとも、実際に美の化身を目の前にしてどれほどの説得力を保てるかは甚だ疑問だった。

「あなたたち、本当にぐだぐだね…」

「面目ない」

畏る將軍に、妹姫は呆れて溜息を吐いた。

待てど暮らせど姿を現さない二人に痺れを切らして、迎えに来たのである。

サイレンに確認してみると、將軍は何故か自室の付近をうろろしていた。

部屋と廊下で往復を繰り返す將軍は挙動不審で、思わず声を掛けると、彼女の傍らには無惨に打ち捨てられたマウの姿が。

立ち尽くしている妹姫に気付き、はっとした將軍が真っ先にしたことは、我が身の潔白を訴えることであつた。

実に犯罪くさい光景だった…と妹姫は述懐している。

將軍の証言によると、マウは魔力を使い過ぎて倒れたらしい。

そこで布団のあるところに連れて行こうとしたが、異性の部屋に無断で入ることは躊躇われたため自分の寝室に連れてきたものの、何だか…普通に拷問器具が置いてあったりするので、これはどうかと思ひ右往左往していたのだという。

それならそうと最初から言えばいいのに、「わたしじゃない」だの「信じて」だのと白々しい台詞を連呼するから、妹姫は本気で身内の犯行を心配するところだった。

か細い吐息を漏らす妹姫に、將軍はどきりとした。

記憶にある幼い日の姉姫と重なって見えたからだ。

…今度、妹が生まれるの…

憂いを帯びた眼差しを、微かに震える長い睫毛が縁取っていた。
桜色の小さな唇から紡がれる声が、不安に揺れていた。

…ねえ、將軍。あなたは…

（やめて。その先は…）

聞きたくなかった。

だから將軍が目の前にいる姫君の肩に手を置いたのは、きっと自分の居場所を失わないためだった。

「姫様！」

「な、何よ突然……」

彼女の戸惑った様子に、將軍は安堵した。

幼い頃の姉姫は、酷薄に笑う無機質な少女だった。

妹姫は当時の姉姫と似ているが、やはり違う面も多い。

將軍は万感の思いを込めて、彼女に言葉を贈る。

あなたは祝福されて生まれてきたのだと、どうにかして伝えてあげたかった。

「もつと罵って下さい」

「何か言い出した！」

仰天した妹姫が、「この変態！」と律儀に將軍の要望を叶えて後ずさる。

その秀麗なかんばせに色付く多彩な表情は、かつての姉姫が持ち得なかったものだ。

「もうっ！ どうしてこの国には変人しかないの！ これって絶対にあなたたちの所為だと思っただけど！」

恨めしげに見上げてくる幼い姫君に、將軍は胸をときめかせた。

姉姫の気持ちだが、將軍にはよく分かるのだ。

妹姫を困らせるのは、とても楽しい。

この場に相方の彼女が居てくれば、もっと高度な、それこそ阿吽の呼吸で以って、息吐く暇もない怒濤のショートコントを披露できたのに。

それだけが残念でなかった…

第二十二話、疾風の如く

母は、定期的に城を空ける。

もうこちらでの生活がだいぶ長いと聞くが、元々母はことは別の、魔霊しかいない世界の出身で、ときどき里帰りするのだった。

足手まといになるからと、娘二人を置いて。

今頃は故郷でゆつくりと羽を伸ばしていることだろう。

最強の魔霊が同行しているので、警護は万全だ。

將軍が珍しく暇そうにしているのは、女王の留守を任されて、城から動けないからである。

人間たちと違って本来的に衣食住を必要としない魔霊の国であるから、とくべつ内政に手を付けることもない。

城を出発する前日に、遠征から戻った女王が土産に連れてきたという絶滅危惧種の魔術師は、よい暇つぶしのネタではあった。

「寝てる…」

廊下にうつ伏せで倒れているマウの傍らで、しゃがみ込んだ妹姫が、ぽつりと呟いた。

「姫様、御髪が…」

マウ個人にさして興味がない將軍は、気絶したままぴくりともしない少年よりも、妹姫の長い銀髪が床に広がり汚れるのが心配だった。

姉姫もそうだが、帝国の至宝たる美姫らは純粹であるが故に無防備

で、見ていてはらはらする。

絹製の長手袋に包まれた、たおやかな指先がマウの頬にそっと触れるのを見て、將軍は密かに完全犯罪の構想を練り始める。

遺体の処理をどうするかで悩んでいると、ふと妹姫が口を開いた。

「先生が」

「は……」

將軍は居住まいを正した。

妹姫の言う「先生」とは、姉妹妹の教育係を務める魔霊のことだ。

文武に優れ…將軍にとっては師に当たる老騎士に、彼女は頭が上がらない。

妹姫は続けた。

「…先生が、彼のことを変わった魔術師だつて。あなたは どう思っ
？」

「は…いえ、わたしは彼以外の魔術師を知りません。師は、他に何
と？」

「そうね…もしも本気で魔術師が逃げを打つたら、捕まえるのはま
ず無理だつて言ってたわ。母様は…大層喜んでいらしたそうよ」

將軍は内心で舌打ちした。女王の喜びは、彼女にとって何より優先
される。

それをよりによってこの自分が奪う訳には行かなかった。

命拾いしたな…」と胸中でマウに語り掛ける。

「陛下は、この男をどうなされるおつもりなのでしょうか？」

おそらく女王は、魔術師が魔霊との交信を可能としていることを知っている。

だから將軍は、許されるならば彼を自分の副官に置きたかった。

それを察してか、妹姫が振り返り艶やかに微笑んだ。

「あら、將軍。あなた、彼に何かを期待してるの？」

將軍は正直に告白した。

「姫様、この男は危険です。面妖な技を使い、周囲を煙に巻く…。ですが、わたしなら」

「あなたなら？」

妹姫に促されて、將軍は不敵に笑った。

「一息で仕留められます。藁のように」

彼女はマウと行動を共にする中で、魔力の致命的な弱点を看破していた。

「魔術師に共通する特徴かどうかは分かりかねますが、彼の魔力は速い…。が、わたしはもつと速い」

「…あなたの中で、あなた自身がどれだけ俊敏に動けるのかは知

らないけど…」

妹姫は、憐れみの目で將軍を見ていた。

「それ、勘違いだから。あなた、剣もろくに扱えないでしょ…」

「え…?」

「きよとんとするな」

剛腕で以って知られる黒騎士たちを手足のように運用する將軍は、自分のことを天才剣士か何かと勘違いすることがままたった。

黒騎士にできて自分にできないこともないだろうという彼女の理屈が、妹姫にはよく分からない。

「……………」

將軍はしばし沈思してから、ぽんと手を打つ。

「姫様はご存知ないかもしれませんが、わたしの二つ名は疾風と言つてですね」

「それ今考えただろ！　ないから！　目を覚ませ！」

黒騎士たちの苦勞が偲ばれて、涙が出てきた。

第二十三話、似て非なるもの

今年で七歳になる妹姫だが、人間の赤子と異なり、必要最低限の体力と知識を得てから生まれてくるため、実質的には十歳児に相当する。

三年。それが新しい王族の誕生に要する時間である。

その後、王族は長じるにつれて成長が緩やかになり、やがては完全に老化が止まる。

年下であるにも拘らず、姉姫が將軍に対して事あるごとにお姉さんぶるのは、そのためだ。

だから將軍は、生まれて初めてできた妹のような存在……つまり第二王女の妹姫にめろめろだった。

とくに怒ったときの顔ときたら、これはもう、

（たまたぬ）

と、ある種の興奮すら覚える。

まなじりを吊り上げて、形の良い眉をしかめた妹姫には、いつも無意味に元氣な姉姫や、冷淡な女王とはまた違った魅力がある。

廊下に正座してお説教されている將軍が神妙な顔をして、まさかそんなことを真剣に考えているとは、想像だにしない妹姫である。

…いや、そうではなかった。

妹姫は、この年若くして元帥の位に登り詰めた少女が、如何にも常識人ぶった顔をした変人であることをとうに承知していた。

「ちゃんと聞いてるの？ このへっぽこ聖騎士！」

「御意」

それでも潔く頭を垂れる將軍は凜としており、武人としての矜持に満ち溢れて見えるから厄介だ。

本来なら騎士が剣術を修めるだろう期間を、彼女は堂々たるはったりと口上の習熟に当て、残った時間で優雅にティーブレイクなど平気でやらかしていたのである。

妹姫の追及も自然と厳しくなる。

「…ホントに？」

「は…御心のままに」

もちろん將軍は聞いていなかった。

今はただ、この可愛らしい姫君を誰かに自慢したくて仕方なかった。

人間たちは帝国の王族を悪鬼羅刹のように語るし、別段それを否定するつもりはなかったが、今この城には自分と似たような立場の同族がいる。

どのような経緯で帝都に連れてこられたのかは知らないが、きっと分かち合えるという確信があった。

あるいは彼ならば…とすら將軍は思う。

さほど多くの言葉を交わした訳ではないものの、どこか自分と似通ったものを感じていた。
直感的に…だ。

やはり同じ人間ということなのか。

（そう。似ている）

自覚していなかった…否、認めるのが怖かった。
今なら、はっきりと言える。

（…マウ。あなたは…）

何という運命の悪戯だろう。

彼は…

…自分と、

芸風がかぶっている…

將軍は、雷に打たれたようにマウを見た。

「！」

ぱつと目を覚ました彼と目が合ったのは、とても偶然の一言で言い表せるものではなかった。

このとき將軍は確信したのである。

彼女はマウに駆け寄り、彼の手を取った。

テンション高いなあ…とマウは思ったが、それはさて置き。

將軍は、きらきらと輝く瞳で彼に告げた。

「術士！ わたしと一緒に天下を取ろう！」

「え、意味わかんない…」

まず氣絶した人間を廊下に打ち捨てる神経が理解できなかった。

同年代の異性に手を握られて何も感じないほど朴念仁ではなかったから、彼は照れ隠しにおどけて言った。

「何？ 天下って、笑いの？ 君はセンスあるよね」

「そうだとも！」

「あれ、肯定しちゃったよ、この子…」

マウは「寝起きから何なの、もー…」と、ひとしきり嘆いてから、將軍の手を優しく振り解いた。

「…残念だけど、君とは組めないな」

「な、何故だ？」

「だって僕は…」

うろたえる將軍に、マウはにやりと笑った。

おもむろに立ち上がった彼は、一人遠い目をしている妹姫の傍らに寄り添う。

「？」と見上げてくる彼女の頭を撫でて、マウは將軍に告げた。

「だっておれは、妹姫の味方だからね」

「！ 貴様、裏切るのか？」

將軍の弾効は、まったく筋が通っていなかったが、マウの返答もまた同じくらい脈絡がなかった。

「決着を付けようぜ、將軍…。おれとあんた、正しいのはどちらか…」

睨み合う両者。

かくして、運命の戦いの火蓋が切って落とされたのである…！

「…あんたたち、ちょっとそこに正座なさい」

そして直後に鎮火された。

帝国の未来は明るいかもしれない。

第二十四話、覆水

「あなたたち、二人していい歳でしょ。七歳の女の子に叱られて、何かおかしいなって思わないの？」

妹姫の説教はとどまるところを知らないかのようにだった。

「……」

無言で頂垂れる二人は、片や帝国軍を指揮する元帥であり、片や女王直属の帝国魔術師である。

無然として腕を組んだ妹姫が、苛立たしげに革の靴底でコツコツと音を立てる。

「返事！」

「はい、正直どうかと…思います」

いちいち將軍にボケさせていてはきりがないと、ここは代わってマウが答えた。

いくら目覚めたとはいえ、体力が全快した訳ではないのだ。さっさと部屋に戻って寝たかった。ていうか足が痺れて辛い。

「…そう。そうね。あなたは、まだ城に来て日が浅いものね」

鷹揚に頷いた妹姫に、マウは内心ほくそ笑むが…

「姫様、騙されてはなりません。この男はハイハイ言っていればそれで終わると思っっているのです」

マウは戦慄した。

ここに来て、將軍はまさかの泥試合を演じようとしていた。つまり、足の引っ張り合いだ。

「貴様、正気か…!？」

と声を潜めて覚悟を問うマウに、將軍はきっぱりと告げた。

「是非もない」

彼女には自信があつた。

長期戦になれば、確実に勝てるという自信が。自慢ではないが、正座は得意だ。妹姫のおしおきを、誰より数多くこなしてきたという自負がある。

「白旗を上げるなら今の内だぞ。帝国は捕虜を取らないが…骨を拾って再利用してやる程度の慈悲はある」

「…魔術師の辞書には、こんな言葉がある」

しかしマウも負けてはいなかった。

ずっと変人扱いされてきたということは、それでも信じた道を歩んできたということでもある。

譲らないと決めた一線に対して、彼はとことん頑固だ。

「鬼、邪に通じ魔に易し。口で立派なことを言うやつほど、足下を掬われやすいって意味だよ」

二人は顔を見合わせて、どちらからともなく笑った。

「ふふふ…」

「ははは…」

立場も忘れて火花を散らせる二人に、妹姫は呆れて言葉も出ない。そう言えば將軍の部屋には拷問器具が置いてあるのだと、ふと思いつ出した、まさにそのときであつた。

「そこまでだ！」

「面倒くさいのが来た！」

実の姉を面倒くさいの呼ばわりである。

颯爽と現れた第一王女の姉姫が、「どかーん！」と口で言つて体当たりを敢行したのはマウである。

とつさに体勢を整えて彼女を受け止めたマウが、溜息混じりに言う。

「お前さんは相変わらず元気だねえ…」

姉姫は彼の話を聞いていない。

「マウや！ どうしてわたしの部屋に遊びに来ないかな君はっ」

「どうしてって、君…」

今日は珍しく天気がいい。

気温も高く、花が芽吹くこともあるだろう。

だからマウは、てっきり彼女が環境を慮り自主的に休止状態に入っ
たのかと深読みしたのだ。

姉姫は、一見そうと分らないように振舞っているが、とても賢く
優しい少女だ。

王城での新生活を始めて一月にも満たないマウが、彼女の表面的な
性格を裏までは読めても、その更に奥に潜んだものを看破すること
は難しい。

マウを口では責めつつも天真爛漫な笑顔を振り撒いている姉姫だか
ら、尚更だ。

驚いたのは將軍である。

「殿下！ そんなどこの馬の骨とも知れぬ輩に…！」

どこの馬の骨とも知れないマウは、悲しくも切ない。

「貴様あつ、べたべたするな！」

「ええ…この子はいつもこんな感じですけど…」

激怒している様子の將軍に、マウは背中を向けてしゃがみ込み、ち
よいちよいと姉姫を手招きする。

よしきたと姉姫が応じる。

緊急会議だ。

「あのさあ…もしかして彼女って非マウ派なの？」

「非マウ派、非マウ派」

小声で尋ねてくるマウに、姉姫はごくごく頷いた。

彼女は「んー…」と人差し指を咥えて、小首を傾げる。

「…つうか、何なの？」

要領を得ない問い掛けに、釣られてマウも首を傾げる。

「マネージメントしておいて何だけど、將軍の好き嫌いを密かに克服させたり、二択トンネルを設置して泥沼にダイブさせたりしたのには、何か意味があったの？」

「え、もちろんあるよ？ 仲良くしようねっていう意思表示じゃん」

基本的に魔術師たちは、自分本位の考え方をする。

もしも彼らが他人にちよっかいを出すとするれば、それは「リアクションに期待してます」仲良くしましょう」という意思表示に他ならない。

だから彼はそれに習おうとしたのだが、そこは常識的な判断に定評があるマウである。

当初、彼は万が一にも將軍が気分を害さない程度の罫を設置していた。

が、結局のところマウは、彼女の潜在能力を甘く見ていたのだ。

いつ如何なるときも、將軍のリアクションはマウの予想を常に上回った。

例えば二択トンネルの際などは、一度スルーしておいて即座に振り向き特攻するという王道中の王道を披露してくれた。

これには陰で見守っていたマウも思わず吹き出してしまい、途轍もない敗北感を味わったものである。

と同時に：「ああ、これでいいのだ」と思った。

魔術師たちの好意の示し方は常識的に考えておかしいと常日頃から思っていたマウは、実はそうではなかったのだと確信した。

おかしいのは世界ではない、自分だったと大いに反省したのである。

そして行き着いた先が落とし穴である。

「まあ…途中で目的がすり替わったのは認めるけど」

あまりにも彼女のリアクションが素晴らしかったため、どこか意地になってしまったのだという。

それにしたって、城内で唯一の同族なのだ。

仲良くしたいと考えるのは当然のことではないのか。

しかし姉姪は人差し指を咥えたまま、

「んー…今更だけどさあ…文化が違っただよね」

それ逆に嫌われるんでね？ と。

「ちよつ、今更すぎ（笑）」

笑うしかなかった。

第二十五話、黒騎士

帝国が自分の全てだった。

魔霊たちが人間を憎み、一方で愛するのは、不老長寿の彼らにとって帝国が狭すぎるからだ。

だが、自分は違う。

多くの魔霊と比べて矮小なこの身には、翼すら生えていない。

帝国から一步でも外に出れば、自分を待ち受けているのは「裏切り者」という侮蔑と、百万にも及ぶ敵意だけだ。

王族のために生きようと誓ったのはいつだったか覚えていない。それは自分にとって息をするように自然なことで、覚悟する必要さえなかったからだ。

女王は厳しい人だから、愛情を向けてもらった記憶はない。今後もないだろう。

それでも自分に居場所を与えてくれたのは彼女だし、もしも自分に血の通った人間らしさというものがあるのだとしたら、

…それを与えてくれたのは、きっと二人の姉妹だった。

「動くな」

マウの背後に現れた黒騎士が、彼の喉元に冷たい刃を突き付けていた。

「動けば殺す」

一切の感情を排した將軍の瞳が、冷徹にマウを見据えていた。

將軍は、黒騎士たちを召喚し使役する権能を女王より直々に授けられた、この世で唯一の存在だ。

彼女と彼女の認識する世界の狭間から、黒騎士は自在に行き来できる。

黒騎士とは、すなわち影の魔霊だからだ。

將軍という実体を基点とするため、召喚できる範囲は精々が二丁三メートルといったところだが、光あるところに影があるように、召喚そのものは瞬き一つで終えることができる。

影より這い出る騎士を常に引き連れていることと、その美しい容貌から、人間たちは彼女を「影姫」あるいは「戦姫」と呼ぶ。

今、その影姫がマウの命を一手に握っていた。

とつさにマウを庇おうとした姉姫が、

「姫様」

將軍のたった一言で動きを封じられた。

將軍は、姉姫の大事な幼馴染だった。
でもマウは…

葛藤する姉姫に、マウはにこりと微笑んだ。

背後の將軍に語り掛ける声が、場違いなほど穏やかだった。

「姉姫が大事なんだね、將軍。それは…」

彼は何かを問おうとして、やめた。代わりにこう尋ねる。

「…女王から聞いてないの？ 魔術師を剣で倒すのは無理だよ。僕らは用心深いからね」

しかし將軍はひるまなかった。

「魔力で姿を消すか？ それもいい。だが…」

彼女は、マウの魔力の働きを常に注意深く観察していた。

「だが、お前はわたしに使い魔を見せたな」

そして、その機会は十分にあった。

「追われて消えるお前と、消えて追われるお前は、どちらかが嘘なのではない。どちらとも本当なのではないか？」

「だったら試してみればいい」

マウは強気に応じた。

だから將軍は確信した。

「今、わたしたちの目の前にいるお前が偽物かもしれないと知ってなお、わたしがお前を本物だと心の底から信じたなら、どうなる？」

(…この子は…)

マウの脳裏に浮かんしたのは、かつて女王と対峙した際に、自分の魔力を正面から打ち破った老騎士の姿だった。

(そうか…あの人の弟子か…)

遣り方は違えど、この勘の良さ…急所を嗅ぎ当てる嗅覚とでもいうのか…には覚えがあった。

將軍の言うことは…おそらく事実だった。

おそらくというのは、マウ自身にも確証がなかったからである。

一つ誤解があるとすれば、魔力の定義だろうか。

その口振りから、彼女は催眠術の一種と考えているようだが、それは魔力そのものというより、魔力を制御する理屈の部分だ。

魔力とは、もっとずっと曖昧で、これという形を持たない、あやふやなものだ。

心がそうであるように。

だが、肉体が減れば心も拠り所を失うように、理屈を押さえられた魔力は正常に動作しない。

それは、本来ならば机上の空論に過ぎないのだが…

「…そんなことは出来やしないんだよ」

「試してみれば分かる。そうだったな？」

そう言われると自信がなくなってくる。

マウは困った。だって死にたくないし。

主人の危機を察知して発現したアプリカは、ポーカーフェイスを気取っているマウに代わって將軍の脅しにびっくりどつきりしている。そして一段飛びで死期を悟った優秀な使い魔は、はらはらと落涙し、しきりに辞世の句を詠むよう勧めてくる。

「ちよつ、内心どきどきしてるのがバレるから！」

言われて、はっとしたアプリカが、マウの肩でぴしりと姿勢を正した。

（よし…）

ここからは我慢比べになる。マウは肩越しに不敵に笑い、

「…そんな脅しが僕に通用するとも？」

「いや、手遅れだろ」

「ですよ」

律儀にツツコンでくれた妹姫に、マウは同意せざるを得なかったのだ。

すっかりぐだぐだになった空気にも、將軍は屈さない。不屈の人である。

「…術士、答えて貰うぞ」

「何なりと」

マウはあっさりと従った。

何しろ將軍は、いつでも彼を殺すことができた。

彼女の狙いは別にあるのだろう。

そんなことにも気付けないほど、自分は頭に血が上っていたらしい。

（僕は…）

姉姫と目が合う。

彼女の視線は、將軍とマウの間で不安そうに揺れていた。

…彼女は、本当に頭の回転が早い。

だからマウは、將軍に問いを投げ掛けるのだろう。

「ただ、最初に言っとく。僕は女王が嫌いだ」

妹姫が息を呑む気配がした。

將軍は、何故とは問わなかった。

ただ、代わりにこう問うた。これだけは、はっきりしておかねばならなかった。

「お前は人間だ。お前は…帝国に敵しないと誓えるのか？」

「誓えるよ。と言うより、もう誓った。女王と約束したからね」

マウは即答した。

「僕は…約束は破らない」

「…そうか。ならばいい。では次の質問だ」

「はあ…どうぞ」

「好きな食べ物は？」

「え、軽いな急に」

「答える」

「ちょっと待て、何かおかしい」

何かおかしいと振り返ったマウが目にしたものは、フリップを掲げている黒騎士の姿だった。

「黒騎士のお悩み相談コーナーだ」

しれっとして言う將軍を、マウは無視した。

「何だ、どした？ 聞きたいことがあるなら、直接おれに言えばいいだろ」

顔を覗き込もうとすると、黒騎士はふいと視線を逸らした。

「え、何？ これ何なの？ あ、やだ。何かやだ。凄い嫌な予感がある」

「ときに、術士よ」

「ときにじゃねえよ。ホント勘弁して下さい。まじで」

ペコペコと頭を下げるマウに、將軍は無情にも告げる。

「お前、食堂で一回も食事をとっていないらしいな」

黒騎士は嘆いていたのだ。

第二十六話、幼馴染み

そして、二人は無言で厨房に立っていた。

將軍と姉姫である。

「……」

「……」

何だか気まずい雰囲気だった。

いつもべたべたしてくる姉姫が隣で黙々と作業しているのを、將軍はちらちらと見ている。

（話題…何か話題を…）

うー…と奇怪なうめき声を上げた彼女は、無理やり笑顔で姉姫に話し掛ける。

「ひ、姫様は普段お料理をされるのですか？」

將軍は、二人きりのとき姉姫を「姫様」と呼ぶ。

妹姫の誕生を境に互いを取り巻く環境が変わって、何事も昔のようには行かなくなったけど、それでも將軍にとって姉姫が、かけがえのない存在であることには変わらない。

感情が昂ったときにも無意識の内にそう呼んでいるようで、エメス

などは妹姫と混同してややこしいと愚痴を零すが、はっきりやめろ
とは言わない。

この二人の絆は、魔霊たちから見ても特別で、第三者が口出しする
のは躊躇われるのだ。

その関係に今、亀裂が走ろうとしていた。

姉姫は將軍を一顧だにせず、魚なのか蛙なのか判然としない生物の
頭を、包丁ですとんと落とした。

「黒騎士がやってるの、偶に見てたから」

黒騎士から借りたエプロンはこんなにもあんなにも白いのに、將軍
の気持ちは暗澹とするばかりである。

將軍は悔やんだ。

（わたしのバカ…やっぱり性急すぎたんだ！ あとで問い質すなり
何なりすれば良かったのに…でもでも…！）

うあー！ と内心で仰け反る將軍は、だがしかし、それでもやはり、
マウを許せなかったのだ。

「…姫様！」

「鍋」

「あ、はい…」

指摘されて、おたまで鍋をかもす將軍は、挫けそうだ。

どめ色のスープが、ぽこりと気泡を立てる。

鼻を突く刺激臭も、しかし將軍の心をへし折ることは叶わなかった。

「姫様」

「何？」

ただ姉姫の冷たい声音が、何より將軍の心に深く突き刺さる。

自分呼んだきり硬直する將軍に、姉姫はやれやれと肩を竦めた。

この幼馴染みは、戦のかけひきばかり達者で、敵に対してはどこまでも強気になれるのに。

昔からそうだった。

自分と喧嘩したときに限っては頭が真っ白になり、あとで部屋に戻って号泣するのだ。

だから、いつもこんなふうに自分が折れることになる。

「なあに？ 將軍」

仕方なく微笑む姉姫に、將軍の思考が再び活動を開始した。

姉姫が包丁を手にしていなければ、抱き付いてわんわん泣いていたかもしれない。

鼻がつんとした。

「…姫様。姫様は…あの男が好きなのですか？」

涙をすすりながら尋ねてくる將軍は、きつと今、あまり頭が回っていない。

結構とんでもないことをさらりと訊かれて、けれど姉姫はあっさりと肯いた。

「そだね」

「な、なにゆえ？」

「なにゆえとな」

調子が出てきた。

姉姫は怨嗟の声を上げる野菜たちを包丁でざくざくと刻みながら、
「そうだなあ…」とカウンター越しにマウを見遣る。

椅子に縛り付けられてもがいている彼は、見張りの妹姫に「おれをここから逃がしてくれ！」と懇願していた。

「食べなきゃ死んじゃうんですよ。あなた馬鹿なの？」

「生きることよりも大切なことが、この世にはあるんだよ…！」

妹姫に窘められて、慟哭するマウを見る姉姫の視線が、はっとするほど優しい。

「見てて飽きないからかな。真っ向から母様に啖呵を切る人間なんて、そうそういないでしょ」

彼女は、刻み終えた野菜を順にスープへと投下しながら、將軍に微笑みかけた。

「もちろん、あなたのことも好きよ、將軍」

普段の彼女と違う口調は、將軍に過去の思い出を連想させた。

妹姫が生まれてから、姉姫は変わった。

目に見えて明るくなり、言葉遣いも砕けて親しみやすくなったと、魔霊たちは言う。

けれど將軍は、心配だった。

表面上は女王と別の道を歩んでいるように見える幼馴染みが、成長するにつれて何故か…むしろ女王に似ていく錯覚に囚われたからだ。

それは本当なら喜ばしいことの筈なのに。

だから將軍は、彼女が昔と同じ貌を見せてくれて、ひどく安堵したのだ。

そのことと比べれば、マウを友達として好きなのだという姉姫の言葉さえ些細なことだった。

「ああ、何だ、そういう意味ですか。そうですね！」

けれど將軍に自覚はなかったから、思ったよりも嬉しくなって、溢れた感情が彼女のテンションを底上げしたのだ。

隠し味にと黒騎士から預かった小瓶を剣帯から取り出した將軍は、小躍りしながら詮を抜き、中身を一滴、鍋に垂らした。

じゅっ…と壮絶な溶解音がした。

「一体何を混ぜた手前えーっ!？」

マウが絶叫した。

第二十七話、果実

將軍はピーマンとニンジンが嫌いだ。

黒騎士たちは悩んでいた。

人間だった頃の名残りなのだろう、黒騎士には個性がある。

薙ぐように剣を振るう黒騎士が居れば、刺突を主体とする黒騎士も居る。

同様に…料理に情熱を捧げる黒騎士も居るのだ。

自分たちが調理したものを食べて、すくすく育つ將軍を見守るのが、彼らにとっての喜びだった。

しかし（何度でも言おう）、將軍はピーマンとニンジンが嫌いだっ
た。

食堂は將軍のためにあるようなものだから、嫌いなものをわざわざ
使っても仕方ない。

だが、果たしてそれでいいのか。
如何せん栄養が豊富だ。

將軍の発育が（一部）滞っているのは、自分たちの所為なのではな
いか？

黒騎士たちには個性があるから、議論も紛糾する。

こっそり混ぜて食べさせるべきという過激派と、さり気なくお皿によそって反応を窺うべきという慎重派。それでは何も変わらないと慎重派から分離した中立派。過激派の中でも、調理法で誤魔化そうとする融和派と、素材にとことんまで拘りたい自然派が台頭し、そもそも將軍の意に沿わないことは避けるべきという擁護派が睨みをきかせるに至り、それに対する反発、反発による内紛と、事態は混乱を極めつつあった。

唯一、彼らの中で一致したのが、戦争などやっている場合ではないという華麗なる存在理由の崩壊であった。

事態を憂えた各派閥の参謀らは、極秘裏にサミットを招集。時刻を深夜、会場を魔術師の部屋に定めた…

光陰は矢の如く過ぎ去り…
やがて決行当日。

クソ真夜中に自室に詰めかけてきた黒騎士たちに、マウは嫌な顔一つしなかった。

思えばこの日、エメスとの初顔合わせを済ませ、魔霊の行列が見守る中で望みもしない決闘イベントを消化した彼は、当然ながら使い魔を連続行使しており、身も心も疲れ果てていた。しかもきつちりと完全敗北を喫していた。

無理、あれは無理…というのはマウの言である。

長老のスライムから、先立って魔術師の苛烈な性を聞き及んでいた黒騎士たちは、言われるがままに議事進行を執り行うマウにいたく

感心した。

実によくできた魔術師である。

「もしも僕以外の魔術師に出会うことがあっても、ついて行っちゃ駄目だよ？」

と言っていたので、長老の言うことはやはり正しく、彼が異端なのだと知れた。

彼のおかげで、議会は滞りなく進行した。

いちいち筆談しなくても、彼が通訳してくれたからだ。

この少年は信頼できると場の全員が認めたので、彼に意見を求めたのは、彼が将軍と同じ種族であるという事実が何より大きい。

「料理は真心だよ」

彼は言った。

「僕は将軍さんと一回顔を合わせたくらいだから、彼女については何とも言えないけどね」

彼は嗤った。

「…こつそり混ぜてさあ、あとでネタばらししちゃおうぜ？」

彼は、超過激派だった…

そして彼は…

「本当は君たちだって、それを望んでるんだろ？ だから僕の部屋に来た。違うとは言わせないよ。僕のこと、知ってるんだろ？」

低く低く…囁いたのだ。

「魔術師の塔へようこそ…」

羞恥に頬を染めて赤面したマウが、ふと悔しげに眉根を寄せて、突然その場で床に突っ伏した。

「あんなっ…意思の塊みてえな野菜食べねえよーっ！」

魂の叫びであった。

その目尻には光るものがある。

魔術師の拡大した知覚力は、植物の意思をも捉えるのだ。

物を考える脳がなくとも、世界と密接に結び付く五感が具わっていなくとも、生きとし生けるものには「生きたい」という生理的な欲求がある。

その欲求を満たすために生物は思考能力を獲得したのだと考えるなら、思考の前段階にはまず「願望」がなくてはならない。

脳とは願望を自覚するための器官だ。生み出すための器官ではない。願望を心の働きと捉えるならば、植物にだって意思はある。心はあるのだ。

ただ自覚できないという、たったそれだけの違いでしかない。

そして、王族の「力」にあてられたものは、この「生きたい」と願う希求を強く刺激される。

死を招く力と、生を促す力は、相反するようで、実は二つで一つということなのだろう…

「肉ならいいのか」

「もつと無理」

好き嫌いの激しい男である。

面倒な…と將軍は黒騎士に視線を遣る。

黒騎士は、力なく首を振った。

肉も駄目、野菜も果実も駄目となると、手の打ちようがない。
他国から食料を取り寄せようにも、交易がない。

しばらく我慢してもらうしか…

悩む面々に、姉姫が溜息を吐いた。

「簡単なことですよ」

彼女は、黒騎士に命じた。

「連行」

ああ、そうか。無理やり食べさせればいいんだ。

まったく問題なかった。

…そして今、マウは天国と地獄に直面していた。

「さ、ちゃんと召し上げれ」

どん、とテーブルに置かれたのは、とろとろになるまで煮込まれた
(あるいは溶かされた)肉と野菜がぶかりと浮いている、透明なス
ープだった。

ほかほかと湯気が立っている。
匂いも悪くない。

「シェフ、本日のメニューは？」

「ウイ、ムツシュ」

將軍と姉姫の掛け合いは余計だったが、仲直りしたようで何よりだ。

エプロンもよく似合っている。

そして、ネーミングは最低だった。

「変な生き物と野菜っぽいシチューのスライム風味でございます」

「死ぬだろ、それ」

率直な感想を漏らすマウに、姉姫は「ちつつち」と指を振った。

「分かってないなあ。おやつさんは生命のスープ。出汁がきいてるところじゃないと將軍も大絶賛の究極調味料だよ？」

文字通り身を削ってくれたスライムには申し訳ないが、何もかもが胡散くさかった。

スライムの溶解液には、この世の如何なる物質も敵わないとされている。

剣で斬り付ければ、何の抵抗も感じずにあっさり振り抜ける。

何故なら刀身が一瞬で融解し、手元に柄しか残らないからだ。

火で炙れば、気化して大惨事だ。

噂によると寒さに弱いらしいが、だから何だという話である。

適量なら大丈夫なのだろうか。

そういう問題ではない気がする。

しかし事実、しっかりと器に盛られている。

不思議な生き物である。

当然、マウの願いも虚しく、透明な液体を掬ったスプーンは健在だ。そして悲しいことに、粘度も健在だった。

もしも両腕が自由だったなら、マウは両手で顔を覆って嘆いただろう。

心のどこかで諦めていた彼は、とろりと糸を引いた煮込みスープという予想だにしない惨劇を目の当たりにし、自分の覚悟が如何にちっぽけだったかを思い知らされた。

「ほれ。あーん」

あーんしてくれている姉姫は文句なしの美少女だが、可愛ければ何をしても許されるという法則は、きっとマウの命を救ってはくれない。

彼を救い、助けてくれたのは、いつだって頼れる使い魔だった。

「アプリカ！ アプリカ！」

迫り来るスライム汁に、必死に身をよじって首を仰け反るマウ。

魔術師の社会は才能が全てだ。

平凡の烙印を押された魔術師は、その大抵が魔力の制御に幻術という理屈を当て嵌める。

マウも例外ではない。

だから彼は、条件さえ整えば、この苦境を乗り越えることができる筈だった。

身動きを封じられているのは辛い、アプリカが協力してくれるのであれば。

助力を乞う主人に対し、アプリカは…悪徳レフェリーさながらに首を傾げ、聞こえなかったふりをした。

「あれれ？ 聞こえなかった？ アプリカ〜！」

テーブルの縁に腰掛けたアプリカは、窓から覗く大自然のパノラマに魅入られているかのようにだった。
バイオリンを爪弾く背中に哀愁が漂っている。

「アプリカさん？ もしもーし」

結局アプリカは、嬉しかったのだ。

孤独な幼年期を過ごした主人が、初めての友達を得ようとしている。

学校ではうまく行かなかった。

魔術師なのに。

優しい世界は、主人を受け入れてくれない。

魔術師だから。

幾重にも連なる世界を重ねて見ているのに、めくってもめくっても見えてこない不確かなものを信じようとするから、主人はどこに居ても異端だった。

ここに、彼の居場所があるといい。

「あ、ちょっと、やめて。謝るから。ねえ」

「噛めば噛むほど、味が出る。さあ」

「ひっ……！」

夕日が綺麗だった。

第二十九話、真相

「これで、もう大丈夫でしょ？」

と、何もかも見透かした瞳で囁かれて、頭の中が真っ白になった。
…それから先のことは、あまりよく覚えていない。

元々そのつもりで多めに作ったのだろう、残ったぶんのシチューは、
将軍が綺麗に平らげたらしい。

その後、お腹が膨れてお眠になった将軍を、妹姫がお風呂に連れて
行ったらしい。

らしいと言うのは、気付けば食堂に取り残されていて、ワイングラス
を傾けている姉姫とテーブルで向かい合っていたからだ。

「あ、こら」

未成年の飲酒は禁じられている。

少なくともマウの知る常識ではそうになっていたから、彼は慌てて席
を立ち、彼女の手からワイングラスを没収した。

没収してから、これは罠だと気付いた。

蜘蛛の巣を連想して、ぎくりとしたマウに、姉姫が言う。

「マウは察しがいいよね。わたしの周りにはあんまりいなかったタ
イプだから、ちょっと新鮮かな」

これは計算された状況だ。

まあ、元より…マウは姉姫に腹の探り合いで勝てるとは思ってはいなかった。

彼女は頭がいい。

少なくともマウの嘘をさっくりと見抜ける程度には。

いたたまれなくなったマウは、手元に残されたワインを眺める。血のようなワインレッドだ。

透かして見たらさぞかし綺麗だろうと思って角度を変えるも、ぼうつとしている間にとっぷり日も暮れてしまったらしく、食堂のカーテンはきっちりと閉められていた。

マウは思った。

（これは…あれか。どうして分かった？ とか言わなきゃならない流れなのかな…ハードボイルド的に）

いやでも…と逡巡するマウに、姉姫が取った行動は劇的だった。

彼女は、すらりとした長い脚を組み直し、架空の肘置きに片肘を乗せて頬杖を突くと、妖艶に笑った。

「わたしは命令されるのが嫌いだ」

「ぶふっ！」

女王のモノマネだった。

思わず吹き出してしまったマウは、それは卑怯だと内心で批判せ

ざるを得ない。

女王は姉妹の雛形なのだ。似て当然だし、こっちは気を遣って女王と同一視しないようにしているのに、それを逆に利用してくるとは。

まさしく渾身のネタで、おまけに完全な内輪モノだった。

（やばい、ツボった！）

顔を背けて、ふるふると小刻みに震えているマウを、姉姫は満足そうに眺めている。

「だからさあ、隠しててもしょうがないんだよね。はっきり言って疲れるだけじゃん？」

言葉は便利だ。

だから母は、魔霊の多くに発声器官を設けなかった。

魔霊と人間の共存の道を絶つためだ。

「將軍の性格からいって、最初にスライムの部屋に寄るのは分かってたんだ。

そのあと、エメスと鉢合わせしたでしょ？

わたしが呼んだんだよ。

言葉が話せて、魔術師のことに詳しい魔霊となると、どうしても限られてくるからね」

エメスは強い自我を備えているが、あれで忠実な面もある。

そして純粋な戦闘能力で言えば、魔霊の中でもトップクラスだ。

「わたしは猜疑心が強いからね。將軍は意識こそ高いんだけど、具体的にどうするかってなると甘さが目立つ。

妹は、まだ幼い。

だから、わたしがあなたに最初に接触したの。

わたしはあなたの人となりを観察して、信用できると思ったけど、同時にこうも思った。

感情に振り回されやすい人だなんて。

だから心配だったの」

呼吸を整えているマウに、姉姫は艶のある声で尋ねる。

「エメスに聞いたわ。マウ。あなた、この部屋で何を見たの？」

ん…とマウは言い淀む。

しかし隠していても今更だ。

自分が別に素材があればだからといって…いや、それも確かに嫌だったが…食堂を避けていたのではないと見抜かれていたからだ。

「…雰囲気かな。ここはたぶん將軍にとって大切な思い出で溢れていて…おれが立ち入っていい場所なのかどうか分からなかった」

幸い、王宮の周りは豊かな森で囲まれていたので、食べ物に困ることとはなかった。見た目がちょっとアレなだけで。

「雰囲気なんて見えるの？」

「あれ、ひょっとしてカマ掛けられましたか、おれ…」

姉姫は綺麗な笑顔で頷いた。

「うん。だってエメスも言うほど知らなかったんだもん。
ちなみに、將軍が言ってた魔術師殺法ね、あれもはったりだよ。ど
う考えても不可能でしょ」

「凄いな、あの人」

悔しいと言うより感心してしまった。

第三十話、序章

將軍のポテンシャルについて思いを馳せていると、姉姫がぽんと手を打った。

「さて、そろそろかな」

そう言つて、將軍と同じ型の懷中時計を襟元から引つ張り出して眺める。

中にいるのは、やはりサイレンで、こちらは姉姫の姿を模していた。どうやら、彼女の外見は持ち主に準じるのが基本らしい。

意識は統一されているらしく、サイレンはマウにひらひらと手を振つてから、小さな身体を精一杯使つて現在時刻をお報せした。

一つ頷いた姉姫が、懷中時計を胸元に差し込んだ。ネックレスと同じ要領で携帯しているらしい。

「將軍とおちびは今頃すっぱんぽんに違いない。わたしはこれよりお風呂に突撃するが、貴公はどうする？」

彼女は常に二手先、三手先を読んでいるようだった。

「いや、どうするって言われても……」

余計な情報を与えられて、マウは困ったように目線を逸らした。頬が熱い。

そんな彼に、姉姫が向ける視線は真剣そのものだ。

「悔しくないのかと言っているのだよ」

挑戦的な物言いに、マウが鼻白んだ。

「何っ…」

「100%だ」

身構えるマウに、姉姫は焦るなと言うように掌を突き付けた。

「知つての通り、城内は常にリブの監視下にある」

リブというのは、マウも知る、とある魔霊の愛称である。

「あれはエメスと相反する属性の魔霊だが、どういう訳か二人は仲がいい」

その理由は、エメスの対抗心が別の魔霊に向いているからなのだが、ここでは伏せた。

その魔霊とマウの接触を、諸事情から姉姫は避けたいと考えていたからだ。

「だから、わたしたちがお風呂できゃっきゃうふふしていると、ほぼ100%の確率でリブが乱入してくる。彼女は、エメスのことをとても大切にしているからな」

エメスの弱点は水だ。

泥は乾けば一定の強度を保つが、水に濡れると崩れてしまう。

つまり、さしものエメスも水場では力を発揮できない。
だから彼女に代わって、ということだろう。

「そうだ。理解したようだな。つまり今、三人の美少女が生まれた
ままの姿で洗ったり洗われたりしている計算になる。わたしが突撃
すれば、実に四人だ」

マウの妄想を掻き立てる姉姫の意図は分からなかった。

「もう一度言う。貴公は悔しくはないのか？」

だが、そんなことはもはやどうでもよかった。

「分かった。おれも男だ」

そこまで言われては、引き下がるという選択肢はなかったのである。

彼は、ようやく理解したのだ。

「おれは、まだ戦ってすらいなかったんだな……」

マウの良心を担当しているアプリカが、二人を見比べてあたふたと
していた。

その良心を、マウは胸の裡に大切に仕舞い込んだ。

今はただ、力を蓄えるべきだった。

彼を止めるものは、もう誰もいなかった。

このとき、王城に一匹の獣が檻を破って放たれたのだ。

第三十一話、男の戦い

魔霊を基準に作られた王城の設備は、そのどれもが民家一つに相当するほど広い。

無論、浴場も例外ではなかった。

かつては湯殿と呼ばれたこの施設は、十年ほど前に黒騎士たちの手による大々的な改装を経て、今や立派な檜風呂と化している。

一段高く設けられた浴槽から岩清水のように湧き出るお湯が足を浸し、波打ち際を歩いているような風情があった。

湯煙の中、白い裸身が二つ絡まり合い、蠱惑的なシルエットを浮かべていた。

「あの、將軍？ 胸を押し付けるのやめてくれない？」

妹姫の未発達な小さな身体を膝に乗せた將軍が、泡まみれの手で彼女を洗ってあげていた。

「……」

無言だ。

このつるぺったんが、あと数年で自分に追い付き追い越すのだと思う度に、將軍は世の不条理を嘆かずにはいられない。

あなたも大きくなれば胸が膨らむわよ…と、かつて姉姫は言った。

やがて成長期も軽やかに過ぎ去り、そして現在、將軍は十五歳になる。

マイナス方向に感極まり、とうとう涙をすすり始めた年上の少女に、七歳の女兒がフォローを入れる。

「いや、あのね。あなたもスタイルいいと思うわよ？ 腰が細いし、胸だって…まだ成長の余地が残されてると思うの」

そこには触れないのが本当の優しさなのだを知るには、彼女は幼すぎた。

「ぐすっ…三年前にも、殿下に同じことを言われました」

「おおっ…」

妹姫が絶句している頃、マウは群れ成し襲い掛かってくる黒騎士たちと激突していた。

「うおおっ！」

才覚に恵まれない魔術師が更なる高みを目指すなら、まずは己の肉体を完全に制御する術を学ばねばならない。

雲霞の如く押し寄せる黒騎士たちを、マウはときに走力で振り切り、またあるときは怪鳥のように跳躍することで突破を試みていた。

何者かのリークがあつたのか、黒騎士たちはその手に聖なるピコピコハンマーを掲げ、魔道に堕ちた魔術師の退路を徐々に削り取って

いく。

小隊単位の黒騎士が矢継ぎ早に投入され、所狭しと通路を跋扈する。事態は今や、大規模な鬼ごっこの体裁を擁していた。

既に何度か捕まり、その度に泣くまでピコピコされたマウの体力は、少しずつ、されど確実に奪われつつある。

千騎近い黒騎士から逃げ惑うマウは、しかし冷静に戦局を見極めている。

（一網打尽にするしかない）

謁見の間へと続く階段を駆け上がる、その足に迷いはない。

（喚べて二度。気合と根性で三度…いや、気絶しては意味がない）

もはや自分に嘘を吐いても仕方ない。
彼は認めた。

「おれはっ」

くるりと反転し、彼は跳んだ。

身投げとしか思えない暴拳に、黒騎士たちの視線が一斉に集中した。

…そう、この瞬間を待っていた。

「おれは女の子のハダ力を見てみたい！」

渾身の魔力を込めて刀印を振り下ろしたマウの肩に、使い魔が発現した。

「アプリカ！」

…一人の少年が己の全てを賭していた頃、將軍の背後に忍び寄る影があった。

「少しは成長したかなあ？」

「ひゃあっ」

後ろから抱き付かれた將軍が、頓狂な声を上げた。

にやにやと厭らしい笑みを浮かべた姉姫が、大きくなあれ大きくなあれと願いを込めてマッサージを施してきたのである。

「このセクハラ王女っ！」

顔を真っ赤にした將軍が腕を振り上げて威嚇すると、姉姫は一目散に逃げ出した。

追い駆ける將軍を尻目に、解放された妹姫が安堵の息を漏らすと、足元のお湯が独りでに盛り上がり、全身の泡を洗い流してくれた。

「ありがとう、リブ」

髪を編み上げながら、礼を言う。

リブと言うのは、霧の魔霊レヴィアタンの愛称だ。

これという実体を持たない彼女は、水と同化し自在に操ることができる。

気まぐれな性質をしており、ときとして気に入った人間に力を貸したりもするようだ。

とくに女王に対して忠誠を誓っている訳ではないものの、砂の魔霊エメスとは親交が深い。

意外と世話焼きな部分があるから、それでもかもしれない。

エメスは強力な魔霊だが、それ故に広く弱点を知られているのだ。

足を滑らせて転びそうになった將軍を、お湯のクッションで受け止めて、そのまま湯船に放り投げる辺り、レヴィアタンの性格がよく表れている。

奇怪な悲鳴を上げて着水した將軍が、顔に張り付いた髪を乱暴に掻き上げて、手近な湯煙を叱り飛ばす。

「リブ！ お前、もうちょっとわたしを敬え！ わたしはお前より偉いんだぞ！」

子供みたいなことを言う將軍に、姉姫がお腹を抱えて笑い転がっていた。

第三十二話、目覚めるとき

何かが割れる音がした。

何事かとクラスメイトたちが一斉にこちらを見た。

使い魔の力を借りて、ガラスの球を動かすという内容の授業中だった。

空中でひしゃげた教材がゴトリと落ちて、辺りに破片を撒き散らした。

大人が思っているよりもずっと、子供は大人の視線に敏感だ。

だから先生が、何か異常なものを見るような目をしているのが分かった。

「この使い魔は…」

違う。おかしいのは僕だ。

とっさにそう思った。

ガラスの球を動かせばいいと言われて、何で僕は壊すのが一番「簡単」だと思ったんだろう。

こんなことじゃいけない。

優しい人になるんだと、子供らしい前向きさで明日を誓った…

その翌日、先生によそのクラスへ行けと教室を追い出された。

思えば、これがケチの付き始め。

新しいクラスのお友達たちは、僕をいじめて喜ぶ悪魔のような魔女たちでした。

そして十四歳になったマウは、何の因果か帝国で魔術師をやっている。

地に伏した黒騎士たちを踏まないよう、ふわりと着地した。

アプリカを発現した状態のマウは、短時間なら浮遊できる。

立っていることも億劫で、がくりと片膝を付いた。呼吸が荒い。

がちがちと具足を鳴らしてもがく黒騎士たちに、マウが駄々をこねる子供を叱るように言う。

「無駄……だよ。女王がコストを優先したから、君たちは超人じゃない。アプリカの呪縛を、君たちは破れない」

だが、マウは知らない。

どんな魔霊が欲しいと女王に問われて、戦争は質より量ですと答えたのは、幼き日の將軍なのだ。

彼女は帝国に戦術という概念を齎した、まさしく戦姫と呼ばれるに相応しい存在だった。

…鋼が擦れ合う音がした。

集団戦闘の肝は戦う前に勝つことであると、將軍に骨の髄まで教育された黒騎士の第二大隊が、疲弊したマウを嘲笑うかのように姿を現していた。

マウは嗤った。彼我の戦力差は絶望的だった。

彼が己を叱咤して立ち上がった頃、帝国が誇る三人の美姫らは湯船に浸かつてのほほんとしていた。

「いやあ、今日は暑かったねえ」

髪が湯船に浸からないよう編み上げた姉姫が、誰にともなく言うと、隣でふにやふにやになっている將軍が答えた。

「そつすね。本当なら絶好の訓練日和だったんですけど、あの馬鹿の所為でうやむやになってしまいました…」

無器用な彼女に代わって、妹姫が將軍の髪を編んであげていた。

「たまの休みくらい、ゆっくりしなさいよ。あの子も、そのつもりであなたにちよっかいを出してるんじゃない？」

「いや、あれは好きな子にイタズラする心理じゃね？」

影のスポンサーである姉姫が、マウのフォローをした。

「好きな子に…えっ!？」

過剰な反応をする將軍に、ああしまったと姉姫が付け加える。

「ああ、いや、友達になりたいって意味ね」

不老長寿の王族である彼女は、恋愛感情というものを知らない。

この幼馴染みにも平凡な幸せを掴む権利はある筈だと思っていたから、二人の仲を応援したいという気持ちはあるが、いい加減なことは言えなかった。

「むむむ…」と難しい顔でうなつた將軍が、口まで湯船に浸かってぶくぶくと気泡を吐いた。

はったりではあったが、一時は本気で剣を向けたことを気にしているのだろつと察した姉姫が、殊更に明るい声で彼女を励ました。

「だいじょぶ、だいじょぶ。マウはねえ、たぶんどこにも行かないよ。他に行き場がないんだな、あれはきつと」

「？」と將軍が姉姫を見る。

頭の回転が早い姉姫は、会話していきときどき相手を置き去りにしてしまうことがある。

だが、それすら姉姫には計算尽くだ。

彼女はニヒルに笑い、こう言った。

「愛に飢えてるってことさ」

この姉の機転には、妹姫も一目を置いている。

「姉様。先生がこんなことを仰っていたのですが…」

彼女は、人間であるマウが帝国で暮らしていることを、ずっと不思議に思っていたのだ。

何故なら魔術師である彼は、やろうと思えばいつでもここから逃げられる。

それをしないのは何故なのか？

女王を嫌っているなら尚更だ。

妹姫の話を聞いて、姉姫は内心で苦渋を噛み締めた。

(…あの骨つ子め、余計な入れ知恵を…)

これ以上、將軍を刺激するのは避けたい。

同じ人間だからこそ、マウの言葉や思想に將軍は反発するし、そうあるべきと彼女は己を律している面がある。

しかし考えようによっては好機かもしれない。

マウの話を聞いていて、よく分かった。

彼は、この城に連れて来られた経緯を隠そうとはしているものの、女王に牙を剥いたこと自体は隠す気がないのだ。

確信を持てるまでは秘しておきたかったが…姉姫は決断した。

ついでに妹姫を抱き寄せようとしたが、逃げられた。

「……」

無言の拒絶だった。

だから姉姫は、計算通りに將軍の華奢な身体を抱き締めた。

「…たぶん、マウは母様に弱味を握られてるんだよ。□では嫌ってるけど、本当に憎んでる様子はないから、約束ってのがそうなのかも」

おそらく性格的なものだ。

「…これは、わたしの勝手な憶測だけど、そのときにマウは一度、母様と敵対してる。それで、負けたんだ」

腕の中で身じろぎする將軍を、姉姫は落ち着くようにと背中を撫でてあげた。

「エメスに聞いて、幾つか分かったことがある。マウは、母様を魔力で撃てなかったんだよ。だからここにいる」

姉姫が將軍を宥めている頃、マウは迫り来る黒騎士たちと今まさに対峙しようとしていた。

「死にたくねえなあ、畜生…」

かつて女王に命は惜しくないのかと問われたとき、自分は何と答えたか。

(…そうだな、それでも失いたくないって思ったんだ)

魔霊と人間の戦いには興味がなかった。

結局のところ、縄張り争いでしかないと思ったからだ。

人間は、戦争をさも悲劇的に謳うが、生物同士が殺し合うのは自然の摂理だ。

これっぽっちも特別なことじゃない。

(…本当に価値があると信じてたものは喪われて、積み木みたいに哀しさが募ってく。生きる意味なんてあるのかな？　って)

…でも諦めきれないんだ。

ぼろぼろになって、それでもなお、マウは吠えた。

「だから命は尊いんだろ！」

今、覗きに執念を燃やす少年の魔力が進化しようとしていた。

翅を広げて舞い上がったアプリカの身体が、ちかちかと点滅する。

幻術という枠組みは、魔術師にとって一つの大きな壁だ。

壁の向こうに広がる世界を、大半の魔術師が、その存在すら気付かないまま生涯を終える。

だがこのとき、非凡な、否、「異常」とさえ称された使い魔が、その壁を乗り越えつつあった。

明滅するアプリカの付近に、数式と図形が幾重にも浮かび上がる。

それらはアプリカを取り巻き、入れ替わり立ち替わり、周囲を巡った。

その光景は、マウの認識する世界の「外側」だったから、彼が目にすることはない。

だが、何かが新しく始まるという予感があった。

その予感に導かれるままに、彼は叫んだ。

「アプリカ！」

物理的に不可能なことは魔力で再現できない。

だが、本当に不可能なことなどこの世にあるのかという、それは問い掛けだった。

第三十三話、賢者の時間

お風呂を上がった三人が目にした光景は、壮絶なものだった。

まず目を引いたのは、通路一面に並んだテーブルと椅子だ。

その間を縫って黒騎士たちが忙しなく動き回り、壁面を綺麗に飾り付けていた。

黒騎士以外の魔霊たちも、それを手伝っていた。

歴史の節目ふしめで激戦の地となった王城の正面通路が、謎のパーティー会場と化していた。

会場を練り歩いているマウを見付けるのは容易だった。

何故なら彼は、「やつはっは。やーっはっは」と妙に格調高い笑い声を響かせて、黒騎士たちと次々に握手を交わしていたからだ。

「ありがとう。ありがとう」

その度に力強く頷くマウの肩には、当然のようにアプリカがとまっている。

「…何だこれ」

異常としか表現できない状況に直面しても、妹姫のコメントは冷静だった。

その声に我に返った將軍が姉姫を見ると、いつも瞳の奥で冷徹な知謀を張り巡らしている第一王女が啞然としていた。

「…な、何がどうなってこうなるの？ まさか魔力？ いや、でも…」

会場にはエメスも居た。

將軍は彼女に歩み寄り、事情を訊くことにした。

「エメス！ これは一体…」

「あ、將軍。いや、あたしもよく分かんない。何か黒騎士が部屋に来て、とにかく集まってくれて。逆に訊きたいよ、何なの、これ？」

彼女も事情を知らなかった。

（…黒騎士が？）

ならば直接、問い質した方が早いだろうか…と周囲を見渡していると、朗らかな笑顔でマウが接近してきた。

「今晚は、お嬢さん」

「おじよ…？」

一度は女王に刃向かったと聞いて、彼に含むところがあつた將軍が気圧されていた。

戸惑う將軍に頓着せず、マウは優雅な身のこなして彼女の手を取り

上下に揺すった。

「本日は僕のためにわざわざお越し頂き、誠にありがとうございました」

「はあ…」

追いかけてきた姉妹にも同様の挨拶を述べるマウ。

「あ、ども」

「悪い気はしないわね」

二人は如才なく応じた。

危うくスルーし掛けた將軍は、はっとしてマウの肩を掴んだ。

「ど、どうしたお前！ 頭でも打ったんじゃないか？」

「やつはっは。やーっはっは」

「聞け！」

耳元で怒鳴ると、彼は怒った様子もなくこちらを見詰めた。

「な、なんだ？」

今更ながらお風呂上がりだったことを思い出して、將軍は気恥ずかしくなった。

普通のマウなら、彼女の上気した肌や水気を帯びてしっとりとした髪を見て何か思うところがあっただろう。

しかし今のマウは違った。

彼は胸に手を当てて優雅に身を折ると、將軍にそつと片手を差し伸べた。

「失礼、美しいお嬢さん。よろしければ、僕にサイレン嬢をお貸し願えますか？」

何だか悔しくなって、將軍は反射的に断った。

「だ、駄目だ！　なんか、駄目だ。今のお前は、なんかおかしい」

サイレン入りの懷中時計を守るように剣帯に手をやると、指が空を切った。

「ありがとうございます。すぐにお返しします。ええ、すぐに」

いつの間にか抜き取られていた。

「何だと！？」

心底びっくりした將軍が腰に目をやると、確かにない。

姉姫の予想は正しかった。

これは魔力だ。

魔力とは曖昧模糊としたものであり、これという決まった形を持たない。

それ故、極限まで突き詰めた魔力は、個人によって効能が異なる。

その究極の魔力を、一部の高等魔術師は「固有結界」と呼ぶ。

今、正面通路を支配しているのは、マウの固有結界だ。

この空間内に立ち入ったものは、須らく戦意を喪失し、手と手を取り合い明日を歌おうという気分になってしまう。

それがマウの魔力の最終形態だった。

本来なら術者は結界の適用外とされるのが普通なのだが、アプリカを基軸としているため、むしろ一番影響を受けているのはマウだった。

頭が茹だった主人に代わり、アプリカが命名した、このマウ式固有結界。

名を…「賢者タイム」という。

この結界内において術者のマウは、煩惱から解放たれるついでに、魔力を使えば体力を消費するという当たり前の制約からも解放される。

否、これほど大規模な魔力を持続させるとすれば、そのような制約は無視して当然なのだ。

畢竟、現在のマウは望むがままに魔力を振るえる、それでいて紳士というハイパーな状態にあった。

「やつはっは。やーっはっは」

ハイパーに仕上がったマウが、影を踏んで階段の踊り場に姿を現した。

「消えた!？」

「いや、あそこだ!」

驚愕する将軍に、早くも気持ちがあわわわしてきた姉姫が、ノリノリで踊り場を指差した。

注目を一身に集めたマウは一礼し、将軍の懐中時計をウィングラスのように掲げた。

「えー、皆様。本日は僕のためにこのような場を設けて頂き、誠にありがとうございます」

その声はサイレンによって増幅され、通路の隅々まで行き届いた。

マウの次に結界に囚われた黒騎士たちが一斉にクラッカーを鳴らした。

脇で控えていた黒騎士がくす玉を割り、「ようこそ帝国へ」と書かれた垂れ幕が衆目に晒された。

歓迎会だった。

完膚なきまでに歓迎会だった。

マウのスピーチが続く。

「宴もたけなわ、堅苦しい挨拶はこれまでと致しまして、お待ちかねのカラオケ大会に移りたいと存じます」

嫌な予感がした。

「トップバッターは、もちろんこの人、勇名轟く帝国の戦姫、今夜わたしは歌姫になりたい、我らが元帥閣下であります！」

「うええ？ わ、わたしか？」

拍手喝采と、視界を埋め尽くす紙吹雪。

楽器に照明にとフル装備の黒騎士たち。

…とても断れる雰囲気ではなかったという。

第三十四話、願い

混沌の坩堝だった。

將軍が恥ずかしがっていたのは最初の内だけで、十八番の軍歌メドレーが二曲目に差し掛かった頃には頭の悪そうなポーズでウィンクなどやらかしていたし、即席のステージと化した踊り場で、熱気にあてられた鬼火が頭上を無数に飛び交っていた。

魔霊の大半は夜目がきかないから、それでは困ると黒騎士たちが行灯を片手に鬼火を追いかけて回している。

バックダンサーの黒騎士たちが抜けた穴を、普段は犬猿の仲の人面樹たちが埋めたから、それはホラー以外の何物でもなかったけど、きつと感動的な光景に違いなかった。

だから、何かと魔霊のリーダーを務めたがる、それでいて女王の騎獣には頭が上がらないエメスのテンションが急上昇したのも仕方のないことだった。

ステージに躍り上がったエメスが將軍と夢のデュエットを演出したもののだから、生理的に彼女を受け付けられない人面樹は恥も外聞も捨ててレヴィアタンに助けを求めた。

彼らが如何に誇りを重んじているかを知っていたから、怠け癖のあるレヴィアタンもこのときばかりは助力を惜しまなかった。

人面樹たちを潤した霧雨は、間違ってもエメスに被害を及ぼさないよう範囲が限定されていたから、本能的に水気を嫌った鬼火がパー

ティー会場を乱舞した。

本能的に火種を恐れるのは、氷雪の魔霊も一緒だ。肌も髪も雪のよう、真っ赤な瞳が特徴的な童女は、どさくさに紛れて愛するスライムの胸に飛び込んだ。

どこで育て方を間違ったのか、天敵とさえ言える魔霊に血も凍るような情熱を向けられて、しかし魔霊の長老は一步も退かない。己の肉体が凶器であり、周囲に居るのは護るべきものだと思っていたからだ。

瞬時に凍結した古い友人が情に篤い漢だと識っていたから、剣聖と謳われる老騎士の虚ろな眼窩を熱くさせたのは、きっと友情という名の魔法に違いなかった。

「おい、骨っ子」

それなのに、無礼な教え子に水を差されて、骸骨剣士の最後の生き残りは不機嫌になる。

最近ますます女王に似てきた、姉姪だ。

嫌々ながら話し掛けているのだと顔を背けている癖に、心細そうに襟褸を掴む仕草は幼い頃と変わらない。

振り払うことはいつでも出来るから、そのままにしておいた。

どうせ魔術師のことでも訊きたいのだろう。

それならそうと、さっさと尋ねに来ればいいものを、やれ喋れないから非効率だのと屁理屈をこねて賢しいふりをする。

スケルトンと呼ばれるものは、もう自分一人になってしまった、檻を纏った骸骨剣士は、それでもまだ手の掛かる弟子の多いこと、呵呵と下顎を打ち鳴らした。

もはや己の一部と言ってもいい聖剣あるいは魔剣の柄に掛けた手をゆるりと上げて、不出来な弟子を幸か不幸か上官に持つ幼い魔霊を招き寄せる。

ちなみに、その不出来な弟子は今、階段の踊り場で頭の悪そうなポーズを決めている。

きやはっ　とか言っている上司に疑問は持たないのだろうか、持たないのだろう黒騎士から用紙と筆を受け取り、慣れた手付きでさらさらと一筆したためた。

魔術師に頼れば早いのだが、そういう訳にも行くまい。

せめて偏屈な方の弟子が、魔術師を通せない相談だから連れて来なかったと信じたい。

『これは結界だ。今もそう呼ばれているかどうかは知らないが、魔術師が魔法を敷くときに使う』

紙面を見て、姉姫が不満げに口を尖らせた。用件を言い当てられて悔しいのだろう。

「魔力とは違う？」

『たぶん』

「たぶんとは何です。どっちなんですか」

そんなことを言われても困る。

別に自分は魔術師ではないのだから。

魔力の一種には違いないだろうが、それは魔術師たちの観点であり、自分たちからすれば別物なのではないか？

視点によって在り方を変える、魔力とはそういうものだ。

幻術とも取れるし、超常の力とも取れる。あるいは、そのどちらでもない。

考えるだけ無駄だ。

『分からぬ。ただ、魔術師は自らの結界をいよいよとなるまで使わない。何故か？』

「…反動が大きいから？」

『さて。それは結界の質による。これは、そういうものではないように思う』

「…千差万別なのですね？」

老剣士は頷いた。

結界とは何なのか。他者に見せるのを極端に嫌うのは何故なのか…大まかな予想は付いていたが、この場で言うことではないと思った。もしも自分の予想が当たっていたとしたら、あまりに不憫ではないか。

要は、歓迎会をして欲しかったということなのだから。

第三十五話、魔法みたいに

視点を変えれば魔力の在り方が違って見えるように、見方ひとつで人の貌も様々だ。

妹姫から見たマウは、ちょっと頼りなくて放っておけない感じの、けれど心の優しい少年というイメージだった。

マウは、これまでずっと他人に後ろ指を指される生活を送っていたから、幼子の純真な瞳に己がどう映るか不安なのだ。
だから妹姫と接するときは細心の注意を払ったし、小動物の癒し効果に多大なる期待を寄せていた。

そんなマウが、母を嫌っている、ましてや敵対したことさえあるという話は、十にも満たない少女にはショックだった。

渋々とステージに向かう將軍を見届けて、手持ち無沙汰になった妹姫は、手近な椅子に腰掛けて喧騒を見守る。

ステージ上で、將軍に懷中時計を手渡したマウが、恨めしそうに自分を見る彼女から逃げるように階段を下りるのが見えた。

彼は魔霊たちの注目が將軍に移るのを待ってから、再び影に紛れて妹姫のすぐ隣に現れた。

黒騎士が配膳してくれたグラスの水に口を付けながら、妹姫はマウに声を掛けた。

「どつという原理なの、それ」

將軍が小難しい理屈を並び立てていたが、分からないことは訊けばいいのだと、子供らしい素直さで思った。

「おや、魔力に興味がお有りですか、小さなレディー」

テンションがおかしかった。

「…あなた、そんなキャラじゃなかったでしょ」

「夜の煌めきは人を狂わせる。そうは思いませんか？」

夜の煌めきとは何だ。

妹姫はそう思ったが、訊いても為にならなそうだったので追及しなかった。

分からないことは訊けばいい。

だが、知ったところでどうにもならないことだって世の中には往々として存在する。

しかし彼もまた自分に戸惑っているようだった。

マウは眉間を揉み解しながら、

「ちょっと待つて。今…僕、かなりおかしいこと言ってる？」

「…そうね」

自覚が芽生えたようで何よりだ。

「…いや、おかしくない。だって、こんなにも世界は美しいじゃない

いか！」

でも駄目だった。

その場で無意味にターンしたマウは、劇場のスタアよろしく両腕を広げて天を仰いだ。

絶望を糧とする王族の第二王女は、マウの固有結界に対する耐性が高かったから、彼の異様なテンションに引っ張られないよう自制できた。

しかしそれも長続きはしそうになかった。

「なんか…胸がざわざわする…」

服の上から胸を押さえる妹姫に、マウは何の根拠もなく断言した。

「それは愛です！」

「たぶん違うと思うの」

だがしかし、マウが差し伸べた手には抗い難い何かがあった。

妹姫の手を取ったマウは、彼女を抱き上げてくると回る。

可愛らしい悲鳴を上げた少女の小さな身体を、彼は軽々と抱きかかえて、膝の裏に片腕を差し込んだ。

「影踏みはしょせん詐術！ ですが、アプリカと一緒になら。ああ、僕のアプリカ。君は本当に優秀だ！」

あとは寝るだけだと思っていたから、お風呂上がりに裾の短い夜着をチヨイスしたのが災いした。

ひらめくスカートを手で抑えた妹姫に制止する暇がある筈もなく、マウは影を踏んで宙に飛び上がった。

魔霊たちの喝采を浴びて、ぎこちなく歌っている將軍がよく見えた。行灯を抱えた黒騎士たちが、一糸乱れぬ隊列で踊っている。一心不乱に楽器を奏でる黒騎士も居る。

妹姫は、心の底から感激したのだ。

「すごい！ あなた、空を飛べるの？」

「三メートルくらいならね。調子が良ければ五メートルってところかな」

いつも背伸びしているような女の子が、年相応に瞳を輝かせている様子が微笑ましくて、偶には魔法使いらしいことをしなくちゃなと張り切る。

「しっかりと捕まってるね」

高い所が怖くはないだろうかと思ったが、妹姫は元気に頷いて両腕を首の後ろに回してきた。

人を乗せて飛翔できる魔霊は、そう多くはないものの、まったく居ない訳ではないのだ。

服越しに彼女の体温と胸の鼓動が伝わってきて、女王を撃たなくて良かったと思った。

それは弱さだと、同郷の魔術師たちなら言っただろう。自分は間違っていないと叫び続けた半生だった。

しかし心のどこかでは不安だったのかもしれない。

初めて認められた気がした。

マウは妹姫を片腕で器用に抱き直して、空いた片腕を振り上げる。

親指と小指、薬指を折り畳んで、さっと振り下ろした。

「アプリカ！」

肩の上で、使い魔が弦を弾く。

ぴんと清浄な音が響き、テーブルの上のグラスが一斉にカタカタと震えた。

バイオリンを構えたアプリカが演奏を始めると、どこからか笛の音が鳴り響き、それらは黒騎士たちの演奏と混ざり合ってハーモニーを奏でた。

それは二分か三分ほどの出来事だったけど、妹姫は大いに感動して「魔法みたい！」としきりにはしゃいだ。

將軍もいよいよ本調子だ。

歌声に銜いが消えて、陰鬱な歌詞とは裏腹に最高の笑顔でステージ上を飛んだり跳ねたりしている。

乱入してきたエメスとの息もばつちりだ。

盛り上がっている会場に視線を落とすと、どういった経緯を辿ったものか、魔霊の長老が究極の納涼を実現していた。

「あ、先生」

妹姫がそう言ったので見てみると、姉姫と老騎士が並んで立っている。

図書室の主とは彼のことが。

なるほど、これは驚きだ。

自分を捕らえ、帝国に連行したのは彼である。

悪戯心を試すには怖い相手だったから、ゆっくりと降下して声を掛けた。

「今晚は」

にこやかに手を振ったのに、姉姫は大層ご立腹の様子である。

「マウ！ 君ね、この魔法を解きなさい」

人差し指を鼻先に突き付けてくる彼女に、マウはハッピーな気分で「あはは」と笑った。

「そう、出会いは魔法だね。それは素晴らしいことだよ」

姉姫を下ろしてやり、二割り増しの高速ターンを披露すると、姉姫が「お前の身に一体何があった!？」と驚愕した様子で肩を揺さぶってきた。

「自覚がないんか!？」

「お嬢さん、魔法は絵本の中だけです…」

「それぞれ!　ばっちり掛かってるから!」

「今夜、僕は魔法使いになりたい」

「…これは駄目だ!　話が通じない!」

姉姫は傍らの骸骨剣士に視線で助けを求めるも、彼はお手上げと言うように首を横に振った。

ツツコミに定評がある妹はと言うと、絶賛オンステージ中の將軍にきやあきやあと黄色い声援を送っている。

彼岸へ行ってしまった実妹を見る姉姫の目が生暖かい。

彼女は再びマウに視線を戻し、じっと観察する。

そこで初めて、彼の使い魔が平静を保っていることに気が付いた。

「こいつかつ?」

姉姫には魔術師に対する先入観がないから、使い魔が主人を介して魔力を行使しているという本来ならば有り得ない真相に手が届いた。

アプリカを鷲掴みにする姉姫に、マウが「こらこら」と使い魔を庇う。

「もつと優しく扱ってよね。そもそも、魔力で心に干渉なんて出来る筈が…」

ない、と言い掛けて、彼は硬直した。

「…あるのか。ああ、そうか…」

マウは、両手で顔を覆って、その場で屈み込んだ。

「そうか、嘘なんだな…」

姉姫の手の中で、使い魔の姿が煙のように霞んで消えた。

…魔術師の学校は、子供を育てるための機関ではない。

子供の才能を数値化し、振り分けるための授業なのではないか。

そう考えると、残酷なほど辻褄が合った。

「なんだそれ…またかよ…」

「…マウ？」

心配なんて掛けさせたくなかったのに、とても立っていられなかった。

腰を屈めた姉姫が顔を覗き込んでくる。

魔力は解除されていた。

それでも一度火が付いた熱狂は、すぐには冷めない。

姉姫の言う通り、自分がこの事態を引き起こしたのだと思うと空恐ろしくなって、声が震えた。

「…將軍、怒るかな？」

階段の踊り場でエメスと一緒に「ばきゅくん」とかやっちゃってる彼女を、とてもではないが直視できなかった。

もしも自分だったら、もう末代まで祟るであろう有様だ。

しかし女の子の考え方は異なるのだろうか。

姉姫が、ひらひらと手を振り、こう言ったのだ。

「だいじょぶ、だいじょぶ。あれ、將軍の地だから」

それはそれでどうかと思った。

第三十六話、救いの手を差し伸べて

將軍とエメスのデュエットに見劣りしない二人組と言えば、それはもう姉姫と妹姫の王族姉妹を置いて他には居なかった。

氷の美貌と、凍て付くような微笑、苛烈にして凄惨な性質と、圧倒的な自負心で知られる女王は、それ故に多くの魔霊から尊敬されていたが、女王にはない闊達さや和やかさ、優しさを持つこの姉妹にはアイドル的な人気がある。

恥ずかしがる妹姫の手を引いて熱狂冷めやらぬステージに上がった姉姫が、將軍とハイタッチして会場に向き直り、

「こん！ ばん！ わ〜！」

とかやってやっている頃、マウは救命活動に勤しんでいた。

立场上、兄や姉に等しい魔霊の暴走に手を出しあぐねている黒騎士に代わり、スライムにひつついて離れない雪童を何とかせねばならなかった。

「ブレイク！ 離れて！」

迂闊に近寄れば、ミイラ取りがミイラになるだけだ。

マウの退去命令を、しかし凍結したスライムに幸せそうに頬を擦り寄せている冰雪の魔霊は、頑なに拒んだ。

大気中の水分が結露し、水雫となって髪を伝うものの、それらはた

ちまち凍結してしまうから、つららと化した髪の毛先がぱきぱきと音を立てて床に氷の根を張りつつあった。

メディア。それが彼女の名前だ。

名前：と言うよりは、総称と呼んだ方が正しいのかもしれない。

この時代、科学知識というものがなかったから、人間たちは自然界の猛威を魔霊の仕業と考えていた。

例えば氷雪の魔霊は、吹雪を呼び寄せ、雪山で遭難した人間を凍死させる存在として恐れられている。

自然界の脅威は人間たちにとって身近で、ごくありふれたものだったから、必然的に魔霊は黒騎士のような例外的な種に限らず、数多居るものと決め付けられている。

メディアというのは、伝承に登場する雪女の総称だ。

王族は人間たちの絶望を糧として生きるから、魔霊を生み出すのは女王でも、名付け親になるのは例外なく人間たちだった。

その名前が国内で有効活用されるようになったのも、将軍が魔霊を指揮するようになったここ数年の話である。

姉姫のグッドイブニングに、木々がざわめき、歓声が舞う。陽気な陽炎が気炎を吐き、気まぐれな水虎すら狂喜した。

「愛してるぜ、ハニー！」

姉姫が髪の手を解き、懐中時計を高々と掲げる。

ゆつたりと背中を広がつた銀色の髪が、鬼火に照らされて光沢を放ち、幻想的な美しさが観客たちを魅了した。

彼女の美声が会場を席卷する中、嫌々をするメディアに、マウはにやつと笑った。

「これは僕の歓迎会なんだろう？ なに、焦ることはないさ。彼は君を嫌っている訳じゃないし、僕は君の助けになれる。違うかい？
メディア」

《……》

彼女の沈思する気配が伝わってきた。

魔霊は、世界に蔓延する怒りや憎しみの具現だから、愛や希望と無縁ではられない。

メディアの愛情は一途だったから、彼女は決して人間に対して好意的な魔霊ではなかった。

そこには、きつと嫉妬の気持ちもある。

古い魔霊の多くがそうであるように、スライムは人間たちを好ましく思っていたし、人間でありながら魔霊の味方をする将軍にとても忠実だ。

それが、メディアにとってはあまり面白くない。

しかし魔術師だけは話が別だった。

何故なら彼らは、言葉を持たない魔霊たちの架け橋になり得る存在だからだ。

筆を持てば即座に凍らせてしまうメディアだから、尚更だった。

言い包められるような形になるのは癪だが、せつかくの歓迎会だし、ここは花を持たせてやるかと…飽くまでも上から目線で彼女は渋々と折れた。

名残り惜しくも愛するひとから離れると、すかさずマウがスライムに近寄って片手をかざした。

「ありったけの毛布を！」

彼は黒騎士に指示を出しつつ、真剣な表情で眉間に皺を寄せる。

「なんて生命力だ…これなら！」

スライムを覆う分厚い氷が、表面から徐々に溶けていく。

マウは、魔霊の生態にさして詳しくない。

時間との戦いになるのなら、遅延として進まない解凍作業に焦りを覚えてもいい筈だった。

（アプリカを喚ぶか？ だが…）

中にいるスライムごと氷を砕いてしまつては元も子もない。

人間の身体は炎を吐けるようには出来ていないから、体温と同じ熱を操るので精一杯だった。

焦るマウに、背後から囁れた「声」が掛かる。

《どれ、少し手を貸そうか》

そう言つて剣を鞘からすらりと抜き放つたのは、老練の骸骨剣士だった。

手骨で危なげなく支えた剣は、決して折れず曲がらず、その鋭さは石をも割くと言われるひと振りだ。

過剰な装飾の類は一切なく、ただ鋼が本来備える輝きだけがある。

数々の逸話で知られる音に聞こえし魔剣が、こうして間近で観察すると何の変哲もない長剣に見えるのは、マウの気の所為なのだろうか。

將軍の師でもあるスケルトンは、氷漬けスライムに無造作に歩み寄ると、す、す、す、と……まったくの自然体で三度、剣を振った。

《こやつとは、付き合いも長いでな》

たったそれだけで、氷が剥がれ落ちた。

剣術に疎いマウでさえ、はつきりと分かった。

神業だ。

この人の弟子なら、將軍もさぞかし剣が達者なのだろうと、マウは思った。

後日、將軍が妙な相談を持ち掛けて来るまでは、そう信じて疑わなかったのである。

第三十七話、命

女王の眷族たちを二つに大別すると、「魔獣型」と「魔霊型」に大きく分かれる。

魔霊という呼び名が定着したのは、時代の変遷と共に魔獣型の眷族が数を減らし、廃れていったからだ。

その特性上、不可避の「弱点」を抱える魔霊型の眷族は、冷気や暴風といった現象と同化し、操ることができる反面、非常にコストが掛かる。

女王が、この世界に来て、まずやるべきことは自らの存在を人間たちに知らしめることだったから、当初彼女はコストが低い魔獣型を大量に生産した。

魔霊型の欠点をもう一つ挙げるとすれば、複製が出来ないことだろう。

例えばエメスが二人居たとすれば、砂を操れるという権能が互いに互いを喰い潰してしまう。

それならば、わざわざ手間を掛けて同種の魔霊を生み出すよりも、異なる属性の眷族を増やした方がよほど効率がいい。

だが、魔獣型には、その欠点がない。

総合的に見て強力なのは魔霊型だったから、今や指折り数えるほどになってしまったが、建国して間もない頃の帝国を支え、己が身一つで時代を切り拓いたのは、違えようもなく魔獣たちであった。

スライムとスケルトンは、魔獣型の生き残りだ。

スケルトンが幾許かの幸運と磨き抜かれた技量で以って、同胞たちの意志を継ぎ、帝国の発展を見守ってきたのに対して、スライムが生き永らえてきたのは、ひとえに彼の特性に依るところが大きい。

限りなく不死に近い魔獣。

それがスライムだ。

たとえ全身の細胞が活動を停止しようとも、この恐るべき生命体は死の誘惑に屈さない。

ステージを姉姉妹に預けた將軍が、火照った身体を冷まそうと軽い気持ちで「わたし参上」とかやらかしたのは、スライムの並々ならぬ生命力を深く信頼していたからだ。

しかし新参者のマウが、スライムは死なないなどという嘘みたいな本当の話をどうして信じられよう。

「ぜえっ、はあっ、ぐっ……！」

お前が大丈夫かという有様だった。

滴り落ちる汗が、顎を伝って一滴二滴と床に落ちる。

近くで、腕を組んだ師匠がうんうんと小刻みに頷いていた。

マウは、自分が近い将来、全世界の人間たちから裏切り者と蔑まれるだろうことを知っている。

極論ではあるが、魔霊にとって人間は女王に捧げる供物でしかない。

人間は、命を尊いと言う。
だから魔霊が憎いのだと。

だが、これも「命」だ。

マウは聖人君子ではないから、赤の他人が死んでも、とくに感慨を抱かない。

一度でも関わってしまえば情が移ると知っていたから、アプリカと二人でひっそりと暮らせばいいと思って郷を出た。

それなのに、こんなにも命は眩く愛しい。

今、人肌の温もりを取り戻したスライムが、生まれたての赤ん坊のようにぷよぷよと震えた。

マウは泣いた。

「でも残念。スライムは何をどうやっても死にません」

と、水で喉を潤しつつ見物していた將軍がネタばらしをしたからだ。
息を切らして床に突っ伏したマウが、恨めしそうな目で傍らの骸骨剣士を見上げる。

「…それなら、そうと…」

大陸屈指の剣豪は、鼻で笑った。

《教えたところでどうなる？ 何も変わらぬ。だから結局、お前は甘いのだ》

魔力は便利で、不平等な力だから、その存在を知る人々は魔術師に縋るしかない。

彼ら魔術師が徹底した個人主義を貫くのは、自分の身を守るためだ。魔霊との戦争に駆り立てられることが分かりきっているから、魔術師たちは人間を見捨てた。

何故なら魔霊は、その多くが人間に負けないよう設計されているから強大で、そんな彼らの「声」を魔術師だけが聞き取れる。

こんな魔術師も居るのかと、女王に立ち向かってきたマウを見て、老騎士は驚いたのだ。

その場で首を跳ねなかったのは、まだ少年の魔術師が、魔霊の命すら惜しんだからだ。

そのとき、自分の心を震わせたものを、不出来な弟子にも僅かでもいいから伝えたかった、というのは余計なお節介なのだろうか。

人間も捨てたものではない…

第三十八話、マウ、オンステージ

ひかりのきしと まほうつかいが

おしろに せめてきました

ぜつぼうから うまれる

いのりと ねがいを つるぎにかえて

にんげんの えいゆうに じょうおうさまは いいました

よくぞきた ゆうきあるにんげんよ

ひかりのきしが つるぎをにかけて いいました

まれいのおうよ いまいちど ねむりなさい

じょうおうさまは わらいました

まほうつかいが つえをにかけて いいました

はい どうぞ

「…それ、おれ、つらいんだけど…」

とうとうステージに引っ張り込まれていた。

ぴったりと息が合った連携で、懐中時計をマウに向けた姉妹が、

目尻に涙すら浮かべて笑っている。

何故か魔霊たちにも大ウケだった。

マウは、穴があつたら入りたい。

「こら！　ちゃんと歌うの。あなた大人でしょ！」

少し目を離れた隙にハジけてしまった妹姫が、楽しそうに叱り付けてくる。

「そんなこと言われてもさあ、選曲がちよっと…おれ完全にアウエーだよな？」

あと、姉姫は笑い過ぎだと思えます。

「照れてるの？」

妹姫が、大胆不敵にもマウの訴えを無視した。

冷たい微笑の中、目だけが爛々と輝いていた。

いつも実姉と忠臣にかかわれている少女が、今、その鬱憤をぶつける相手を見付けていた。

しかしマウにだって年上の意地がある。

「照れてません」

「照れてるんだ。ふうん…」

「ちょっと誰か！　この子を何とかして！」

間奏の度にイジられるマウは、もう何が正解なのか分からない。
両手で顔を覆って嘆くマウに、妹姫が無表情にぐいぐいと懐中時計を押し付けてくる。

「何で照れてるの？　何が恥ずかしいの？」

自分の半分しか生きていない女の子に言葉責めされていた。

「ねえ、何で？　ちゃんと言ってくれなくちゃ分からないわ」

妹の成長に、姉姫がふくふくと笑って目を細めている。

こうなつては將軍だけが頼りだった。

会場でぐびぐびとグラスを呷っている少女に縋るような視線を向けて、すぐさまマウは目を逸らした。

マウの記憶が確かなら、色の付いた液体は水に分類されない筈だった。

頬にぐいぐいとサイレン邸を押し付けられながら、マウは小声でスタッフを呼んだ。

「黒騎士、黒騎士……！」

手前の階段で「そこでボケて」というカンペを掲げていた黒騎士が、何ぞ何ぞと近寄ってくる。

「おいつ、大丈夫なのか、あれ？」

そもそも帝国には法律という概念が存在しない。
従って飲酒を咎める道理もないのだが、マウに言われて振り返った
黒騎士がぎよつとしたのは、きつと目の錯覚ではない。

とりあえずと手渡された空のグラスを、マウは呆然と見詰める。

「…これでボケると…？」

ひっくり返して思案するも、何も思い浮かばない。
ここでボケる必然性もよく分らない。

それでも妹姫の追及は一向に収まらないし、魔霊たちの期待は高まる一方だ。

及び腰になったマウは、おずおずとグラスを掲げて…彼の名誉のため
に言う、何か考えがあつた訳ではない…

「が…ガラスのハートなもんで」

「面白いわ」

妹姫が、にっこりと笑ってくれた。

ほっと胸を撫で下ろしたマウに、彼女は言う。

「もう一度、言ってみて」

「將軍！ 助けて！」

もはや形振り構っている場合ではなかった。

すると將軍は…とろんとした瞳で、手元の杯をじっと見詰めた。

「お手本とか要らないから！そういう意味の助けは求めてないから！」

マウの必死の訴えに、「あ、うん…」と曖昧に頷いた將軍が、えへ…と照れくさそうにはにかんで、グラスを掲げた。

「かんぱーい」

すっかり使いものにならなくなっていた。

「かんぱーい」

それでもツツコむことが全てではないのだと、本日一番の笑顔で応じたマウは、自らを犠牲にして示したのだ。

第三十九話、將軍の決意

警備上の問題から、王族と將軍の寢室は城の最上階付近にある。人間は空を飛べないからだ。

マウの部屋が一階にあるのは、階段の上り下りを苦手とする魔霊も居るからである。

魔霊たちの居住区から少し離れた、中庭に程近い角部屋がマウに宛がわれた寢室だ。

表札が掛かっていない、古びた木製の扉を開けると、軋む音がした。

ここは、今や滅んだ古い魔獣のかつての住処の一つだ。鳥類に属する魔獣だったのか、部屋の中央には天井から鎖で固定された止まり木が吊り下がっている。

その止まり木に寄り添うように、質素な寢台がぽつんと置かれている。

カーテンを閉める習慣がないのか、間取りに対して随分と大きく感じる窓から月明かりが差し込み、室内を仄かに照らしていた。

寢台の上で規則正しい寢息を立てているのは、当然マウだ。

眠っているときの彼は、表情から険が取れて少し幼く見える。

寝顔を見物することしばし。

將軍は：「よいしょ」とマウの掛け布団を剥ぎ取ると、熟睡している彼の腕を掴んで引っ張り起こした。

「時間だ、行くぞ」

「……」

マウは抵抗しなかった。だらんと首を垂らして、ふらふらと將軍に追隨する。

彼女の足取りに迷いはない。

一体どこへ連れて行こうというのか。

疑惑の黒鎧までしっかりと着込んで、夜の散歩もあるまい。

懐中時計なんて洒落た小道具を持たないマウだが、彼の体内時計は魔術師ならではの正確さを誇る。（だからと言って例の懐中時計が欲しくないという訳では決してない。むしろ欲しい）

時刻は、草木も眠る丑三つ時だった…

クソ真夜中に部屋を訪ねて来るのは、黒騎士団の伝統なのかもしれない。

そういうふうに考えれば、少しは寛容になれる気がした。

もちろん、そんな伝統はない。

將軍はマウの腕を引っ張り廊下を歩きながら、

「ときに、術士。お前、夜目はきく方か？」

「
……
……きくけどおっ」

マウは、たつぷりと間を置いてから駄々をこねる子供のように嫌々をした。

魔術師は夜目がきく。

まったく見知らぬ土地に連れて行かれて、さあ案内しろと言われても困るが、「魔眼」といって、過去に見た光景と現在を照合して暗所を見通す術がある。

とくにマウの魔力は、対象との距離が近ければ近いほど、つまり自分自身に対して最大の効力を発揮する特性を備えていたから、いわゆる「定跡」と呼ばれる初歩的な術が得意だった。

魔眼は定跡の一つだ。

研究し尽くされて、最短の道のりを定められているから、発想力や構想力を必要としない。

マウは平凡な魔術師だから、持久力や集中力といった精密さを磨くことは出来ても、その上を目指すことは出来ない。

それなのに使い魔だけが際立って優秀だったから、この少年は魔術師たちの間ではちょっとした名人だった。

夜目がきくと聞いて、将軍が食いついてきた。

「ほう！　それはいい。適任ではないか」

大抵の魔霊は夜目がきかないからなあ…と呟いた彼女に、マウが舟を漕ぎながら相づちを打つ。

「ん…夜目え？　そんなイメージ…ないけどなあ…」

はきはきと答える將軍が、いつそ憎らしいほど対照的だった。

「そうとも。女王陛下は人間どもが苦しんでいるのを見るのが好きだからな。魔霊の活動時間は日中がメインだ」

ろくでもねえなあ…とマウは思ったが、王族の体質を鑑みれば至極当然のことなので、口には出さなかった。

とにかくひたすら眠かったので、將軍の柔らかい手を意識せずに済んだのは幸か不幸か。

寝癖の付いた髪をぐしゃりと掻き乱して、マウは「あー」だの「うー」だのとうめいた。

「…で、なんなの？　夜分遅くっていうレベルの時間帯ですらねえぞ…」

ぼやくマウに、將軍が足を止めて振り返った。ふわりと鼻先を掠めた髪から甘い香りがした。

「思えば、わたしが甘かった」

彼女は真剣な表情で、マウの両肩を掴んだ。

「お前が陛下を嫌っているのは何となく分かっていた。それなのに…
わたしが、いけないんだ。
許せとは言わない。だが、安心しろ。わたしが、お前を教育してやる」

將軍の瞳が、熱く燃え盛っていた。

ありがた迷惑だった。

第四十話、見えない明日

北に世界最大の湖、南に前人未到の霊峰、見渡す限りを秘境の樹海で覆われた帝都は、天然の要塞だ。

城の屋上から眺めた風景は、まさしく難攻不落といったところか。

行灯に篝火まで幅広く活躍する鬼火が、あちこちで青白く瞬き、夜の帳にささやかな抵抗を続けていた。

夜風を孕んだ將軍のマントが、大きく翻った。

ここ帝国領内は、気候の変動が激しい。

魔獣はともかくとして、トップクラスの魔霊ともなれば、その存在だけで自然に影響を及ぼしてしまうからだ。

將軍が身に付けている革鎧は特別製で、体温を調整し体力の消耗を軽減してくれる。

市場に出せば値が付かないほどの価値がある。

マウが着ている半袖の寝間着とは雲泥の差だ。

つまり何を言いたいのかというと、

「…寒いっす」

眠気が吹き飛んだ。

しかし前述にある通り、摩訶の黒鎧に身を包んでいる將軍は、多少の肌寒さを感じる程度だ。

彼女はか細い腕をずっと伸ばして、樹海の間こうを指差した。

「森を抜けた先にあるのが死海。海って呼ばれてるけど、本当は湖なんだと」

「はあ…」

「あつちにある山は頂上ら辺でいつも雪が降ってる。不思議」

「…標高が高いからだよ。気圧が低いと空気が散って、気温を保てなくなるんだ」

憐みの目で見られた。

「そうか、お前の住んでた村ではきつとそうなんだな…」

「何この人。ナチュラルにおれを見下してくるんですけど」

マウは手櫛で寝癖を撫で付けながら、視線を逸らした。

時代が下るにつれて、いつしか魔術師が集団を形成し独自の文化を築きつつあることは知られていない。

情報の流通量と人口密度は比例するから、歴史から姿を消した魔術師が山村に隠れ住んでいるという考え方はあながち間違っではないなかつた。

マウに背を向けていた将軍が、ゆっくりと振り返った。
彼女の秀麗な横顔を、鬼火が照らしていた。

将軍は、何度でもマウに問う。
お前はそれでいいのかと。

「人間どもの脆弱な戦力では、魔霊には決して勝てんぞ」

「…どうかな」

マウが明言を避けたのは、戦争にあまり詳しくなかったからだ。

ただ、ひとつだけはつきりと言えることがあった。

「でも、魔霊には欲がない。あっても少ない。欲望は、生きるための力だ。魔霊にはそれがない…」

王族の食欲を満たすためだけに戦う魔霊の、歪さがそこにある気がした。

「……」

将軍は否定しなかった。

彼女も同意見だったからだ。

瞑目した彼女は、腕を組み…二度三度と頷いてから、マウの肩に手を置いた。

「術士よ。お前はこれから自宅警備員として働くのだ。どうだ？」

「どうもこうも」

聞こえはいいけど、それ実質無職じゃね？ と。

しかし將軍の決意は固かった。

彼女は、もしもこの少年が死ぬときは、自分の手に掛かって死ぬべきだと思い詰めていた。

何故なら彼は自分と同じ人間で、魔霊たちは彼を歓迎しているようだけれど、それでも…

(…わたしは…！)

…同じ人間である彼に魔霊を認めて欲しいという願いを捨て切れない。

「お前が自分勝手に振る舞うのは、責任感がないからだ。やはり人間、無職ではいかん」

「無職とか言うな」

女王直属の魔術師なのに、里帰りする女王に置いて行かれたマウが、今はたまたま仕事がないだけだと吠えた。

將軍がマウの両肩を揺さぶり、彼の敏感な部分をちくちくと刺激する。

「わたしは常日頃から、城の夜間警備に不満があった。お前がやるんだ。まずは飛び出せ無職を」

「だから無職とか言っな」

けれどマウの心は揺れていた。

魔霊は夜目がきかない。これは自分にしか出来ない、自分だからこそ出来る仕事だ。

「…べっ、べつに仕事なんて欲しくないんだからね！」

だからそう、魔力の訓練にちょうどいいからと、将軍がどうしても言うから、仕方なく引き受けたのだ。

第四十一話、友情

魔力を制御する理論とは、すなわち自分を如何にして正当化するかという、その一点に集約されるから、魔術師という人種は総じて、驚くほど人の話を聞こうとしない。

あんた大人だとツツコミ続けて生きてきたマウだから、いざ自分が給料泥棒の立場になってみると、いたたまれなくて仕様がないのだ。

一応、帝国魔術師という肩書きは持っているものの、女王は魔術師を手元に置いただけで満足してしまったから、業務内容が曖昧の一言に尽きる。

魔霊たちはあれこれと無理難題を言ってくるが、交渉の余地があるだけ生易しいとすら感じていた。

だからだろう。

まんまと夜勤を押し付けて睡眠時間を獲得した將軍が「しつかりやれよ。うむうむ」とか言って去り行くのを、憮然と眺めていたマウは、内心そう満更でもなかった。

素直に喜ばなかったのは、厄介ごとに首を突っ込む 気付けば四面楚歌というルーチンワークをこなしている内に形成された人格が、ろくなことにならないぞと耳元で囁くからだ。

「なんだよ、もう……」

けど本人に自覚はないから、感情とは裏腹に悪態を吐くのだ。

唇を尖らせたマウは、腕を組んで瞑目し、何度か身体を揺する。

(…ま、女の子だしな。夜中に出歩くのはどうかと思うぜ)

心の着地点を定めた彼は、「よし」と一つ頷き、屋上を漂っている鬼火を手招きした。

「おいで、ウィスプ」

ウィスプというのは、鬼火の呼び名の一つだ。「人魂」と呼ばれることもあるこの魔霊は、人懐っこく陽気な反面、臆病な面がある。

好奇心が旺盛なので、呼べば近付いてくるが、手の届く範囲まで寄ると不安になって一定の距離を保とうとする。

いくら夜目がきくとはいえ、光源が近くにあるのとないのでは、魔眼の精度が違ってくる。

マウは、口を利けない魔霊に対しては自然体で接することが多い。

「ほら、集まって集まって。はい、輪になって。そこくるっとターン」

手拍子で音頭を取るマウが、鬼火と一緒になっってくるりと回る。

「あらよつと」

女の子の一人歩きは危ないからと、マウが將軍を彼女の部屋まで送り届けるのは不自然ではない。

彼女の寝室は屋上にはないから、鬼火を引き連れたマウが城内に居

るのは当然の流れだ。

影を踏むというのは、そういうことだ。

無駄足を踏ませるということであり、影を「畳む」…つまり主体を移すという意味でもある。

自身だけでなく他者を伴える術者はそう多くないが、要は相手の同意を得られるかどうかが鍵なので、条件付けを常識的範疇にとどめておけるマウとは相性の良い魔力だ。

この場合は、將軍に善意を抱いている鬼火だから成立したと言える。鬼火からしてみると瞬間移動以外の何物でもなかったから、彼らは大いに驚き、喜んだ。

妹姫には大層好評だったからどうかと思ったのだが、喜んでくれたようで何よりである。

こうしてコツコツと信頼を積み上げておけば、有事の際にも安心だ。

マウの魔力が一風変わった特性を備えているのは、彼の考え方が他の魔術師とは根本から異なる所為でもある。

マウを取り巻く鬼火たちが、城の内壁を淡く照らしていた。

寄り集まっても光量そのものは変わらないのが、彼らの大きな特徴だ。

帝国には、純粹に炎属の魔霊が存在しない。

あらゆるものを灰燼に帰す魔霊が居たなら、それは確かに無敵かもしれないが、他の魔霊との相性が悪すぎる。

人類の滅亡は女王の飢餓をも意味するから、代表的なところで「火」と「水」を秤に掛けた折り、彼女は後者を選んだ。

今、マウの足元に立ち込めつつある夜霧は、そうした経緯で誕生した魔霊だ。

泡を食って浮上する鬼火を嘲笑うかのように、レヴィアタンは凝り固まり渦を巻いて屹立し、髪の毛の長い女性のシルエットを取った。

《まさか本当に来るとは思わなかったぞ、人間》

「何か誤解があるようですが…」

その口振りから待ち伏せされたのだと知って、マウは早くも逃げ腰になる。

《分かっている》

レヴィアタンは、皆まで言うなと頷いた。

彼女は気分屋ではあるものの、人魔を問わず気に入った者には手を差し伸べる大らかさがある。

《…夜這いだな？》

「待て、話せば分かる」

將軍の寢室と王族の寢室は同じ階にある。

「…エメスの差し金か？」

レヴィアタンと仲良しのエメスは、王族への忠誠心が強く、女王嫌いのマウを一方的に敵視している。

《その度胸は買おう。だが…》

もしもレヴィアタンが姉妹の寢室に近付いた不埒者を抹消する任に就いているなら、魔術師並みに我が道を行く彼女を説得するより、まず先に依頼者を特定して命乞いする必要があった。

《だが、貴様が愛に殉じるといふなら、わたしは友に応えねばならない…分かるな？》

実に面倒くさい友情である。

第四十二話、レヴィアタン

アプリカとの初めての共同作業で、マウはクラスだけでなく寮も追い出された。

当時は戸惑うばかりで言われるがままにするしかなかったが、今なら上から学校に圧力が掛かったのだと分かる。

使い魔は術者の潜在能力を引き出すための存在だから、子供の握力では決して碎けない強度のガラス球を粉々にするほどの物理的干渉を僅か八歳で成し遂げたというなら、その少年の未来は希代の天才魔術師でなければならなかった。

魔術師の社会では魔力に秀でた人物が実権を握るから、権力者たちは今ある地位を失うまいと優れた人材を独占したがる。

そして現在。

一時は将来を嘱望された少年魔術師が、今、遠く離れた異国の地で人生に落第しようとしていた。

《そうか、狙いは小っこい方か》

「狙いって何だよ！」

廊下で騒いで將軍やら姫姉妹が出て来たら事態は泥沼だ。それだけは避けねばならない。

階段方向へ駆け出したマウに、レヴィアタンは躊躇いなく人間失格

の烙印を押した。

言っても無駄だと分かっている、沈黙が肯定を意味するようであった。

霧の魔霊は、いつそ清々しいほど人の話を聞かない。
まるで魔女だ。海神…

《このことは責任を持って報告させて貰う。あとたったの十年が待てなかったのだと。いや、だからこそか…》

「生々しいだろ！ 本気でやめて!？」

本気で逃げる魔術師を捕えることが出来るのは、同じ魔術師だけだ。けれど今、マウの尊厳が風前の灯火だったから、彼女を野放しにする訳には行かなかった。

マウの人生は、いつもそんな感じだ。

逃げて失うものと戦って得られるものを秤に掛けたなら、決まって天秤は後者に傾くかのようにだった。

とぷんと大気に潜水したレヴィアタンが、再び夜霧と化してマウに迫る。

水で構成される彼女を呪縛できる自信はなかった。
行く手を遮る水柱に、マウは舌打ちして飛び退いた。

じりじりと後退しながら、彼は思案する。
魔霊の権能はどの程度まで有効で、限界はどこにあるのかと。

仮に一切の制約がないなら、勝ち目はなかった。
血液の大部分は水だからだ。

警戒を露わにするマウを、その浅はかさを、レヴィアタンは嘲笑う。

《このわたしが、人間如きに手の内を明かすとても思っているのか？》

水柱を割って、中から人影が現れる。

やはり髪の長い、目も口も鼻もない女性の輪郭だった。

《近距離戦が得意なのだろう？　まるで魔術師の出来損ないだな……
何と言ったか：そう、確か***だ》

彼女が何と言ったのか、マウには分からなかった。

魔術師は物言わぬ民と交信できるが、固有名詞の類いは互いに共通の認識を持っていなければ伝わらない。

だが、彼女が何を言いたいのかは分かった。

手札を伏せたまま、格闘戦でマウを叩きのめすと言っているのだ。

魔霊は、いつの時代も人間を弱小と侮る。

その油断が、魔霊の最大の弱点だったとしてもだ、明日があると信じているから人間は前へ進める。

絶望を享受したなら、それは「諦め」だ。

女王は世界征服を謳っているが、本心ではない。

魔霊は効率的に敗北し、効果的に勝利するべきなのだ。

レヴィアタンは、女王を親とも思っていないが、女王が弱体化すれば魔霊の権能も衰退する。

魔霊の力は相対的で、実は刻一刻と変動していることを、人間たちは知らない。

無造作に歩み寄ってくるレヴィアタンは隙だらけで、格闘技の心得があるようには見えない。

対するマウも武術を習った経験はない。

しかし彼には、誰よりも精密な魔力がある。

自身の運動を客観的かつ機械的にコントロールできるマウは、それ故にクラスメイトから「あんな変質者のスキルばかり上げて将来どうすんの？」と真顔で訊かれたことさえある。

無警戒に距離を詰めるレヴィアタンに、彼は何を思ったのか、その場で片膝を付いた。

《…降伏か？》

「そう思っているなら、君の負けだ」

上空で鬼火たちが見守る中、顔を伏せたマウの双眸だけが不気味に煌々としていた。

レヴィアタンが獰猛に笑う。

《面白い…》

初めて会話が成立した。

当たり前のことなのに嬉しく感じて、マウは自分がどこへ向かおうとしているのか不安になる。

「…おれ、真夜中に一体何をやってるんだろっ…」

ふと、そう思った。

第四十三話、深夜の攻防

互いまでの距離が三メートルを切った。

魔術師は動かない。片膝を付き、やや前のめりに倒した上半身を片腕で支えている。

顔を伏せたのは、目線を隠すためか。それとも、他に何か理由があるのか：

彼の狙いが何であろうと、レヴィアタンは一向に構わない。

最強の魔霊と称される「伯爵」にすら、彼女は負けない自信がある。

それほどまでに、生命と水の関係は深い。

レヴィアタンが城内の監視を任されているのは、大気中の水分と同化した彼女が生物に対して絶対的な優位に立てるからだ。

エメスとの戦いは見せて貰った。

不必要な接近と離脱を繰り返す彼の戦い方は、魔術師のそれとはかけ離れている。

遙か昔、魔術師が「魔法使い」と呼ばれていた時代に暗躍した、強制的に魔力を開発された人間の兵士と酷似していると感じた。

二メートル。互いに手を伸ばせば指先が触れる距離だ。

マウは動かない。

《どうした、射程距離内だぞ?》

レヴィアタンは親切にも教えてあげた。

近ければ近いほど、彼の魔力は真価を発揮する筈だった。

もちろん望ましいのはゼロ距離射撃なのだろうが、広い視野の確保は魔術師の生命線でもある。

その狭間を行き来するマウのスタイルは、魔術師として褒められたものではない。

だが…

レヴィアタンは微かに目を見張った。

この、肌を刺すような圧迫感はどうだ。

質量を持たない筈の魔力が、まるで彼の小柄な身体から立ち昇っているかのようだ。

にわかに緊張を帯びた空気にも怯まず、レヴィアタンは悠々と歩を進める。

一メートル。

振り上げたレヴィアタンの手が、したたかにマウの頬を打った。

彼は、まったくの無抵抗だった。

もしも振り下ろしたのが拳だったら、それで終わっていた。

だが、実際にマウの頬を打ったのは、鋭く振り抜かれた平手だった。

ククク…

切れた唇の端から滴る血を、彼は拭いもせず、低く嗤った。

「ご丁寧にも忠告してやったのによ」

僕の勝ちだ。

そう囁いたマウの姿が忽然と消失した。

影踏み！ だが…

脇を通り抜けざま、刀印を突き付けてくるマウを、レヴィアタンは超人的な反応速度で迎撃する。

彼女の手刀がマウを貫くより早く、肩をぽんと叩かれた。

軽やかな身のこなしで飛び上がったマウが、レヴィアタンの肩を支点に彼女を飛び越えていた。

《二人…いや三人だと！？》

レヴィアタンは今度こそ驚愕した。

マウは、影踏みをほぼ完璧に制御できる。

レヴィアタンには見えないが、彼の肩にはいつしか使い魔が発現し

ていた。

マウが、使い魔を発現させるときに執拗なまでにアプリカの名を呼ぶのは、そうしなければ喚べないのだと周囲に錯覚させるためだ。

マウの魔力は、アプリカを発現することで爆発的に出力が上昇する。

今、レヴィアタンが目になっている現象は、魔力のオーバーフローだった。

暴走した魔力は破綻へと向かって崩壊するのが常だが、発現したアプリカがそれを許さない。

結果として、影踏み作用も手伝い、魔力は「術者が複数人いる」

「だから破綻はしていない」という理屈に飛び付いた。

本来なら実現不可能で説得力が皆無の理論に魔力を誘導する。

一人では出来ないことも、二人なら、三人なら？

アプリカという非常識な使い魔に支えられたマウだから可能な、これが彼の奥の手だった。

完全に虚を突かれたレヴィアタンが「しまった」と思ったとき、背後のマウが、またもや煙のように姿を消した。

「でも忠告はお互い様だね」

二度とない好機をあえて見送った理由を、肩越しにマウが明かした。

人間が、だ。

どこまでも対等であろうとする少年に、レヴィアタンの心が震えた。

《面白い！ 面白いぞ、人間…いや魔術師！ ユーティと言ったな！》

魔霊が真に願うのは、人間の手による敗北だ。

侮り、踏み付けにした人間が己に依って立ち上がり、強大な魔霊に屈さず立ち向かうというなら、それは「心の力」の具現たる彼女たちの実在を証左するようなものだ。

「やめてよね、その名前で呼ぶの！ 僕はマウだ！」

着地して再び駆け出したマウの背を、レヴィアタンが追う。

前言を撤回した彼女が、鞭状に変化させた髪を無数に撃ち出す。

きんっ…と新たに展開された魔眼が、背後から迫るそれらを捉えてマウに軌道を正確に伝えた。

戦闘時の彼に死角はない。

後ろに目があるような回避運動を見せるマウに、レヴィアタンは歓喜した。

しっかりと避け切ってから、わざわざ振り向いた彼の目が、夜闇に爛々と輝く魔眼が、「ついて来い」と雄弁に告げていたからだ。

戦いの中でしか生きられない人間だと直感した。
魔霊と同じだ。

「どうした？ その程度か、レヴィアタン！ どうした、どうした
…海神の名が泣くぜ？」

魔術師とはいえど人間だ。

全力を出した魔霊に敵う筈がない。

それでも、マウは挑発的な物言いを改めようとしな

口で言っても聞かない魔術師たちを力尽くで黙らせている内に、す
っかり歪んでしまっていた。

家族と呼べるのは、もうアプリカだけだった。

術者と使い魔は一心同体だから、失うものは何もない。

守るべきものが自分の中にしかないのなら、どこまでも強気になれ
た。

それは弱さだ。

だから、傲然と立ち塞がる砂の魔神を正面に認めても、嗤うしかな
い。

「居たなあ、エメス！」

この場で土下座しても良い筈だった。
だが、それは何かが「違う」と感じた。

地を削る勢いで立ち止まり、背後のレヴィアタン、正面のエメスに
両手で刀印を向けるマウに、こういうシチュエーションが好物の
魔霊たちは灼熱のような興奮を覚える。

「ちょっと見ない間にあたし好みに育ってんじゃねえか、人間！」

まるでプロポーズのように吠えたエメスが、両腕を砂へと変じ緩慢な動作で迫ってくる。

アプリカを肩に乗せたマウが、よく通る声で叫んだ。

「来いよ！ 二人掛かりでも構わないぜ！ それで勝てるんならな」

…

…だから、正直、真夜中だとか、そういうことは頭から飛んでいたのだと、マウは妹姫に釈明した。

三人揃って廊下に正座させられていた。

「そうなの。それで…ここはどこ？ 言ってみて」

「…廊下です」

「もっと具体的に教えて？ どの廊下なの？」

クソ真夜中に寝室の真ん前でぎゃあぎゃああと騒がれた妹姫の口調は、ひたすら優しい。

「妹姫の…部屋の前です」

「それ、わたしのことよね？」

「…そうです」

マウは、昨日と今日で三回も妹姫（七歳）に怒られている。

こんな筈ではなかったと、幼い頃のマウが現状を知ったら嘆くだろう。

だが、十四歳になったマウとて、過去の自分に言ってやりたいことがある。

お前、もうちょっとまともな人生を送れなかったのかと。

そしてこうも言えるだろう、少なくとも今の自分は一人ではないと。

「…姫様、あたしは巻き込まれただけなんス」

だが、早くも内部分裂の狼煙は上がっていた。

「レヴィだって、本当のところは分からないじゃないスか。こいつの証言なんて」

エメスは、親友のレヴィアタンを「レヴィ」と呼ぶ。

友人を庇おうという、麗しい友情の発露だ。

思うに、そこに保身がなければ最高だった。

売られたマウは、内心で嘲笑う。

（これだから叱られ慣れてないやつは…）

彼女は何も分かっていない。

責任の所在など、もはや妹姫にとっては問題ですらないのだ。

瞑目してエメスの言い分を聞いていた妹姫は、果たしてゆっくりとまぶたを開けた。

「…で？」

何が言いたいのかさっぱり分らないと、妹姫は一文字で簡潔に告げた。

「…え？ いや、だから…」

察しの悪いエメスに、妹姫は優しく教えてあげる。

「あのね、わたしは今、あなたたち三人を叱ってるの。ここまではいい？」

辛うじて頷くエメスに、よく出来ましたと微笑む。

「じゃあ、わたしがこうして真夜中に廊下に立ってるのは誰の所為なの？ あなたが言うように、マウが全部悪いの？ 本当は全然悪くないあなたとリブを、わたしは性格が悪いから間違えて怒ってるの？ どうなの？ 黙ってちゃ分からないわ、ねえエメス…」

笑顔で追い詰めてくる妹姫は背筋が震えるほど怖いのに、可愛いと思ってしまうのは何故だ。

マウは、そればかり考えている。

第四十四話、プロローグ

理屈を説いて戦い始めるのに、途中で感情という壁にぶつかって、終いには理想を追い駆けるから駄目なのだ。

言っていることは正しいし、共感できる部分だってまったくない訳じゃないのに、自分では一貫しているつもりでも周りからすると目的がころころと変わっているように見えるから、誰もついて行けないのだ。

事あるごとに魔術師の在り方に疑問を投げ掛けるマウだったが、常に人生のクライマックスを迎えているような彼を正しいと認めれば、待ち受けているのは、きつと取り返しのつかない泥沼に違いなかった。

日に日に成長するサボテンは、その象徴であるかのようなようだ。

魔力により成長を促され、己が何者であるかさえ忘れた観葉植物は、この日の朝、ついに食虫能力をも獲得した。

鋭いニードルで覆われた蔓が、他でもない自分を付け狙っているように、アプリカは落ち着かない。

小鳥ほどもあるキリギリスという視覚情報を内包した使い魔。特技はバイオリン。
それが彼だ。

使い魔というのは、簡単に言えば魔力の一種であり、魔力を自動制御するために仮想人格を付与された存在である。

魔力を二重起動しているようなもので、当然ながら術者への負担は通常の比ではない。

魔力の制御は修練で磨くことができるから、使い魔に頼るのは本来なら不名誉なことだ。

だが、古代の魔法使いたちが魔術師と名を変え、暮らしが安定するにつれて、魔術師が自らの魔力を自慢できる相手は同じ魔術師に限定されていったから、いつしか彼らは持久力よりも瞬発力、発想の奇抜さや柔軟性をより高く評価する傾向を強めていった。

事実、それらは才能と呼ばれるもので、後天的な努力では到達できない分野に属する。

人間は五感の内で視覚を重用する生き物だから、目に見えない努力よりも、はつきりとした才能を好む。

アプリカの主人は一言で言えば努力の人だ。

マウとかユーティとか呼ばれる彼が、自身の使い魔であるアプリカと比して平凡などと評されるのは、ひとえに生まれた時代を間違えたと言いたいようがない。

運も実力の内と言うなら、それもまた主人に課せられた宿命なのか。

止まり木で翅を休めているアプリカは、幸せそうに布団の中で眠っている主人を見るにつけて、不憫に思う。

己の使い魔に同情されているという事実が、またより一層に涙を誘うのだ。

アプリカの一日は、不正な手段で進化したサボテン（他称）の世話から始まる。

元々はエメスとかいう変な生き物（魔霊とか呼ばれている）に依頼されて種から育てたものだが、当の彼女がサボテンを永久機関か何かと勘違いしていたため、そのまま主人が引き取って育てることになった。

いささか歪な進化を遂げたサボテンは、植物にあるまじき自由意思を備えつつあったので、見捨てられなかったのだ。

情に脆いというのは彼の美德であると同時に、最大の弱点でもある。

使い魔としてオーバースペックなアプリカは、主人の意思とは無関係に発現し、あまつさえ無断で魔力を拝借することさえ可能だ。

常識的に考えてありえないことなので、そのことを主人は誰かに相談したことはない。

魔力を織り込んだ演奏を披露し、更なる飛躍をサボテンに課したら、次は自分の番だ。

部屋の中央に吊り下がっている止まり木に舞い降りて、瞑想する。

主人は人としてどうかと思うほど無茶をやらかす人間なので、彼を支える使い魔として日々の努力は欠かせない。

殊に最近は何を血迷ったのか、死と隣り合わせの新生活を始めたりと、まったくもって油断ならない。

主人は昼頃まで寝て過ごす。

自宅警備員という、何だか悲しい響きの職に就いており、朝方まで働いているからだ。

本当なら昼を過ぎても寝ていたいらしいのだが、大抵は途中で邪魔が入るので、仕方なく起床する羽目になる。

「マウマウ」

本日の闖入者は、姉姫とか呼ばれている変な生き物だった。

他人の部屋に入るときは扉をノックするのが習わしなのだが、何故か主人の部屋だけは適用外であるらしかった。

どうでもいいが、主人の名前を連呼すると新種の鳴き声のようである。

姉姫が扉を開けたとき、主人は既に着替えを終えてくつろいでいる。

寝顔を見られるのが嫌らしく、来客をきつかけとし「影踏み」という魔力で身支度を終えるよう設定しているのだ。

至福の二度寝という美しい未来が砕け散る様は、アプリカの胸に何とも言えない寂寥感をもたらす。

しかし主人はめげない。

彼が就職したのは、帝国といって、およそ最悪な評判と、それに見合うだけの実績を叩き出している職場だ。

帝国に連行される前、主人は魔術師たちの国に住んでいた。

魔力に目覚める条件からして真つ当な人生にバックドロップするよ
うなもので、魔術師は実にその大半が人格破綻者という素敵な
人種だ。

その中であって、例外的にまともな人格をしている主人は、それ故
に身近な者に対して過保護になり易い。

特に同年代もしくは年下の異性に対してはその傾向が顕著だった。

「マウです。こんにちは」

穏やかに返した主人は、いちいち服を選ぶのが面倒くさいという理
由で、白いカッターシャツを好んで着る。

会社勤めのデキる大人への憧れもあるのだろう。

まだ成長の余地はあるからと大きめのサイズで一式を揃えたため、
余った袖を腕まくりする癖が付いていた。

一方、姉姫の服装が白いドレスで統一されているのは、混戦時に見
分け易いようにという、きちんとした理由があった。

そのぶん彼女は、日によってところと髪型を変える。

腰まで届く銀髪を、今日は背中できく編み込み、大きなリボンで結
んでいた。

滑らかな髪は、彼女の動きに合わせて小さく跳ねる。

「遊びに来たぜっ」

特にこれと言った用事はないらしかった。

将来的に帝国の未来を背負って立つ筈の姉姫は、同時に国内で随一の暇人でもある。

主人は、小さな子供にするようにちょいちょいと手招きした。

「ちょうどいいトコに来た。ナイスタイミング姉姫。そうさな、さしずめ…ザ・ナイスタイミング姉姫…てことだな」

即興で二つ名を与えたのに、おそらく深い意味はない。さしずめという単語を使いたかったただけだろう。

「よろしい。わたしは今日からザ・ナイスタイミング姉姫として生きよう」

主人がおかしなことを口走った所為で、一人の少女が今、人生という名の道を踏み外そうとしていた。

傍目から見ても、この二人は、ちょっと気持ち悪いくらい仲が良い。

姉姫の方はどうか知らないが、主人は生まれて初めて出来た友人とどう接して良いか分からず、とりあえずテンションを上げてみたのだ。

慣れてくれば落ち着くだろうとアプリカは樂觀視していたのだが、何とそのまま定着してしまっていた。

慣れとは恐ろしい。

主人の部屋には、調度品の類いが極めて少ない。
正確には、少なくなつた。

部屋まで詰め掛けて来た魔霊に対応している内に、少々前衛的な形状を獲得してしまったため、魔霊の長老に頼んで放棄して貰つたのだ。

でも最近、人面樹という魔霊をお願いしてテーブルセットを再び導入した。

今度は長持ちするといい。

結論から言つと三日で壊れたけど。

新品の椅子にちょこんと腰掛けた姉姫に、主人は勿体ぶつて告げた。

「まずは、これを見てくれ」

「こ、これは…！」

主人がテーブルの上に置いたのは、一冊の本だった。
事態を悟った姉姫が、ごくりと生唾を飲み込んだ。

そこには、こう記されていたのだ。

『世界の名剣全集』と。

第四十五話、発端

つい昨日の出来事である。

その日、王族（小）の勅命で森へと出向き、人面樹の教えのもと隠し芸を習得してきたマウは、もう誰にも無職とは言わせない、大手を振って堂々とランチタイムに突入しようとしていた。

いけないことだと分かっているけど、某液状生物の味の素が病み付きになってしまっていた。

帝国王城の食堂は、和平交渉に訪れた他国の大使に歓迎の意を示せるよう、魔霊がひしめく一階の居住区ど真ん中にスペースを設けている。

マウの部屋から、ちょうど中庭を挟んで反対側だ。

魔霊は食事を必要としないので、扉は人間が肩を並べて通れる程度の大きさだ。

これが魔霊の通用口ともなれば、人間が組体操をしながら行進してもなお余りある開放感を満喫できる。

まるで巨人の国だと、帝国の女王に首輪で繋がれて入城した日、マウは思ったものだ。

両腕を鎖と呪符で拘束されていないければ、もう少し感動できたかもしれない。

実に惜しいことをした。

食堂には先客が居た。

金髪碧眼の少女で、立派なこしらえの黒鎧を身に付けている。

普段はその上から羽織っている帝国紋入りのマントを、今は畳んで椅子の背に引っ掛けていたため、具足に覆われていない白い太ももと二の腕が露出していた。

彼女は「将軍」という。

その名の通り、魔霊を指揮する立場にある少女であり、国際的には元帥の位階を持つ。

生後間もなく女王に拾われ育てられたという、人間の女の子だ。

口から物を食べないでいるとやがて餓死してしまう、帝国では少数派に属する彼女と、マウは食堂で鉢合わせることが多い。

マウが、將軍から少し離れた席に座ったのは、特別に他意あつてのことではない。

彼女が読書中だったからだ。
随分と熱心な様子である。

声を掛けるのも悪いかと思い、マウはカウンターの向こう、厨房へと目を向ける。

そこでは、漆黒の戦鬼が鍋を火に掛けていた。

ここ数年で帝国の代名詞と化した、魔霊兵士、黒騎士だ。

魔霊としては珍しい、集団戦闘を得意とする彼らは、平時においては城内の細々とした雑事を任せられている。

手先の器用さは個体によってまちまちなので、調理班の他に清掃班、改装班、お庭番とチームごとに分かれて内部でローテーションを組んでいるらしい。

料理担当の黒騎士が、マウの視線に目で頷く。
食堂のメニューは日替わりランチ一択なので、わざわざ声に出して注文する必要はない。

マウと黒騎士が目と目で通じ合っていると、おもむろに將軍が席を立った。

「……」

彼女は本を広げたまま、無言で歩み寄ってくると、そのままマウと同じテーブルの対面席に着席した。

「……」

マウは、厨房の黒騎士に視線で問う。お前の上司は何がしたいのかと。

將軍は、黒騎士たちを召喚し使役する権能を女王から授かっている。
だから実質、黒騎士たちは彼女の保護者のようなものだった。

蝶よ花よと將軍の成長を見守ってきた黒騎士団の一員は、すっかり大きくなった（……）彼女の奇行の是非を問われて、ふと材料籠からジャガイモを手を取った。

人面樹から強奪してきたそれは、形といい、大きさといい、悔しいが一級品と認めざるを得ない……つまりはマウの問い掛けを無視した。

このやろっ……マウは内心で黒騎士を罵る。

渦中に居る少女は、まるで朗読でもするかのように本を目線の高さに掲げ、ほうほうとわざとらしく感嘆の声を上げる。

「ふむふむ。ほうほう…よもやこのような…」

「……」

マウは、三たび黒騎士に視線を振る。お前らが育てたんだから、お前らが何とかしろという、明確な意思を乗せた視線だ。

マウに背を向けた黒騎士が、肩越しにちらりと振り返り、手にした包丁で、断末魔の叫び声を上げるジャガイモを無慈悲にもすたと両断した。

調理の工程上、先に芽を取るべきところをだ。
次はお前だと言われた気がした。

これはつまり、俺はお前を無視するが、お前が彼女を無視するのは許さないという意味表示に他ならなかった。

普段は謙虚で心穏やかな黒騎士たちだが、こと將軍が絡んでくると豹変する。完全に親ばかの心境に到達していた。

マウは溜息を吐いた。そういうことなら仕方ない…

彼はまぶたを閉じて、底辺まで落ち込んだ気分を一段、二段と持ち上げる。

テキストに忠実なマウの魔力は、幻術を基とした理屈で成り立っている。

使い魔が術者に寄り添い支えるように、魔力の支柱は理論であり、確固たる意志でなければならぬ。
相手の心理を衝き手玉に取る魔術師が、それなのに自分の心さえま
まならないのは何故だ。

マウは、微笑もうとして失敗した。

帝国で暮らし始めてもう三週間になるのに、未だに彼女とどう接す
るべきか決めかねていたからだ。

魔術師流のコミュニケーションは駄目だと言っし…

まずは無難に尋ねてみた。

「…何、読んでるの？」

すると彼女は即座に反応した。

「ん、何だ？ 気になるのか？」

白々しくとぼける将軍に、マウは早くも面倒くさくなってくる。

面倒くさい面倒くさいと口では言いつつも厄介ごとを率先して引き
受けてしまう面がマウにはある。

このときもそうだ。

彼は、見るからにそわそわし始めた将軍を目にして、嫌な予感が膨
れ上がるのを感じた。

「まあね」と答えたのは、ほとんど条件反射のようなものだった。

その場しのぎで返事をする、ろくなことにならないと、十四歳のマウはそろそろ学習してもいい筈だった。

魔術師は子供の頃に学校で、自分たちこそが優良人種なのだと教えられる。

魔術師から誇りを取ったら、無法者しか残らないからだ。

魔力を持たない人間は哀れな存在だと、傲慢な魔術師たちは信じて疑わない。

それなのに、「えゝどうしようかなゝ」とそれまで読んでいた本を胸元に引き寄せて隠す将軍から目を離せずにいた。

人間という檻からは逃れられないのだと言われているようだった。

人間は誰しもが、いつか自分の中に眠る怪物と向き合わなくてはならない。

思春期というやつだ。

「いいから見してみ。ほれ」

「えゝ…でもお…」

散々じらしてから、将軍は「これ！」と手にした本を突き出した。

それから、差し出された本をぱらぱらと流し読みするマウに、彼女はもじもじと身をよじって、

「実はあ、この度い…剣を新調しようと思います!」

きっぱりと告げた将軍が、「きゃっ」と恥ずかしそうに顔を両手で覆った。

第四十六話、使い魔の半分は思いやりで出来ている

好きにすればいいと思った。

それを口に出して言わなかったのは、学生時代に培った勘が警鐘を鳴らしていたからだ。

將軍は、いつも腰に提げている剣を新しいものと変えたいらしい。

それを、何故わざわざ門外漢の自分に告げたのが気掛かりだった。

だが、疑念を抱いていることを知られる訳には行かなかった。

マウも最近になって分かってきたのだ。

同じ人間だからこそ、自分と彼女の仲は際限なくこじれる。

帝国でたった二人きりの人間が脇目も振らず仲良くしていたら、魔霊たちの目にはどう映るか。

かつて將軍が悩み、そして彼女なりの答えを出した問いに、今度はマウが試される番だった。

しかし將軍と違って、目下の存在であるマウが悩む時間を、魔霊たちは与えてくれない。

マウは、將軍から手渡された『世界の名剣全集』をひっくり返して、背表紙を見詰める。

「でもこれ、物語に出てくる魔剣とか聖剣の逸話を集めたものだろう。実在しなくね？」

「何を言う」

將軍は強気だった。

「一ページ目を見てみる」

言われて、開いてみる。目次などという気の利いたものはなかった。代わりにあったのが、怪談集と見紛うような挿絵と、その説明文と、思しき行書体だった。

「…おお」

マウは絶句した。

襷褌を纏った骸骨剣士が、岩山に突き刺さった剣を抜き放った場面が、流麗に描かれていた。

一人の人間が一つの技術に生涯を費やしたなら、それはもう努力や才能という領域すら超える。

不老長寿の魔霊が、永い年月を極限の修練に当てたなら、「技」というものの最果てに手が届くかもしれない。

剣士であれば、誰もが一度はと願う存在。

それが「剣聖」…生き残った最後のスケルトンである。

將軍は、その弟子だ。

「だからって君…前例があるからって…まさかおれに探して持って

来いって言うんじゃないだろうな？」

雲を掴むような話だった。

將軍は：他に頼れる者が居ないとでも言うように眉尻を下げて、可愛らしくおねだりした。

「…だめ？」

「ばか、やるよ。こんなん、そこら辺を歩けば転がってるよ」

だから時間をくれと。マウは言った。

昨日の話だ。

「…どうしよう、姉姫…」

あらかた事情を話し終えた頃、マウは両手で顔を覆っていた。

話を聞いていた姉姫も同様だった。聞くに耐えないといった様子である。

しかし彼女の場合は、理由が違った。

姉姫は思い出したのだ。

：…そういえば、彼の前で明言したことはなかった。
いや、あるにはあるのだが、そのときマウは交信中で話を聞いていなかった。

姉姫は、新品同然のテーブルに突っ伏した。まだ色濃い木々の新鮮な香りがした。

「やつべ…」

「…そうだよね、ないよね…」

「そうじゃなくて…」

「？」と怪訝な顔をするマウに、姉姫は慎重に切り出した。

「マウはさ…魔剣が見付かればそれで解決だと思ってるよね？」

「あるの!？」

「いや、ないけど」

腰を浮かせるマウに、姉姫はぴしゃりと言う。
そんなものはない。

金属で作られている以上、折れない剣はないし、使い続けていれば必ず歪み、曲がる。

この文献に拠れば、魔霊の牙を研ぎ鍛えた剣をどこぞの王家が国宝として祀っているらしいが、魔霊の部位に権能が宿ることはないし、あったとしてもそれは魔霊が進んでそうする以外に可能性はない。

「ないけど…」

姉姫は、それ以上を口に出ることが出来なかった。

將軍は、姉姫にとって大切な幼馴染みだ。

ひめさま、ひめさまと追い駆けてくる人間の女の子を煩わしく感じた時期もあったが、過去の話である。

今では立場が逆転し、たまにうざったそうな目で見られる。

マウはどうだろうか。彼は、自分のことをどう…

そこまで考えて、姉姫は視線を伏せた。

王族は人間たちの絶望を糧に生きている。

友達になれる筈もない。

それなのに、彼は…平気で自分の手を取り、言うのだ。

「頼むよ！ 友達だろ？」

マウは、この国にやって来て最初に優しくしてくれた姉姫に多大なる信頼を寄せている。

姉姫がマウに接触したのは、彼が魔力という異能を持った人間で、幼馴染みと妹に危害を加えるのではないかと疑ったからだ。

そのことを、姉姫はマウに打ち明けている。

何故なら、彼となら友達になれるかもしれないと心のどこかで期待してしまっただからだ。それを自覚してしまっただからだ。

打算で近付いたと知っても、彼はまったく気にしなかった。マウの経験則によれば、最初から友情を求めて近付いてくる輩は、

土壇場で「ふははは！ まんまと騙されたな！」とか言い出すからだ。

友情は生まれるものではなく育むものだと言っていたからだ。

だから、このとき、姉姫も同じことを学んだのだ。

「友情……！」

胸を打たれた姉姫が、マウの手を握り返す。

「ではヒントを一つ……！」

「よし来た！」

椅子を蹴って立ち上がった姉姫が、細い腰に手を当てて、ぴんと人差し指を立てた。

裾が短いドレスから覗く、すらりとした脚線に目が行ってしまうのは、一概にマウの責任とも言いきれない。澁刺とした愛らしさが、この姫君にはあった。

彼女は、小刻みに身体を左右に揺すりながら言う。その度にドレスの裾がひらひらと舞い、マウの視線を誘うのだ。

「ヒント！ ちゃらっ ーページ目！」

この城で暮らしていると、いつか女性の脚に偏愛を抱くようになりそうに怖かった。

姉姫は、太ももの半ばまでしか隠せないワンピースと、膝上まです

つぱり覆う長さの靴下を好んで着用する。

ドレスの裾と靴下の境界線をどこまでも追及するのが、マウに課された宿命であるかのようにだった。

「…難しいな…」

「え！？　そ、そう？」

真剣な面持ちで沈思するマウに、ほとんど答えを言ったつもりの姉は戸惑いを隠せない。

もしも運命というものがこの世にあるのなら、真実と戦ってきたマウに微笑むのは、きっと悪夢のような現実だった。

彼の魔眼に映るのは、肉体を持たない意思たちが笑いさざめく光景だ。

目を凝らしても実体を捉えられない影に、ぽんと肩を叩かれた気がした。

「…ああ、分かってるよ」

その声が明らかに自分以外に向けられたものだったから、姉姫はとっさに周囲を見渡し、止まり木の上でじっとしているアプリカに気が付いてぎよつとした。

「い、いつからそこに…」

「意識を向けなければ見えていても認識できない」

出し抜けに、マウが言った。

彼は、いつしか瞑目していた。安堵したように微笑み、

「思いやりと同じだね…」

「しっかりしろ!？」

第四十七話、図書室へ行こう

という訳で、やって参りました図書室。

魔剣のことなら、魔剣の持ち主に訊けばいいというのが姉姫の案である。

姉姫は、姉姉妹の教育係でもある老騎士が苦手だ。

一応は同行を渋ってはみたものの、「一人は嫌だ」と懇願するマウが事態の深刻さを理解していないため、元より一人で行かせるつもりはなかった。

そして今、二人はどちらが先頭に立って図書室へ乗り込むかで揉めている。

「じゃ、よろしくマウ」

「語尾みたいに言っても駄目。姉姫の方が親しいでしょ。おれに至っては図書室に入ったことすらないよ」

魔術師と言えば知的なイメージがあるのに、この少年はまったく本を読まない。

感性を磨く、思考力を養うという意味では読書も悪くないが、結局のところ「答え」は自分の中にしかないから、活字を読まない魔術師だって居る。

姉姫は頬を膨らませて、つんとそっぽを向いた。

「やだもん。わたし、あいつ苦手だもん」

だが、それならマウにだって言い分はあるのだ。

「おれなんて、いっぺん殺され掛かってるんだからねっ」

このままでは平行線だ。

交わらない道を交差させるためには、妥協しかない。

そして、勝負とは敗者が己を曲げるための交渉術でもある。

無言で拳を掲げる姉姫に、マウが「上等」と応じる。

「じゃん、けん、ほいっ」

姉姫の勝ち揺るがなかった。

何故ならマウは、自覚はないらしいが、チョキを出さないからだ。

魔術師にとって、人差し指と中指を立てた「刀印」は特別な意味を持つ。

剣の儀式的側面である「破邪」を象り、転じて「封魔」…魔力の暴走を押さえ込む意志の表れだ。

だが、魔力の暴走を利用することさえ出来るマウにとっては、「敵を打ち砕くための刃」という認識が強いから、親しい者にそれを向けることを無意識の内に拒んでしまう。

昔からジャンケンで勝てないマウは、貧乏くじを引いても「まあいいや」で済ませるから、あまり深く考えたことはないのだ。

精々が、男はグーだろ程度だ。

彼を打ち負かすのは、いつだって差し伸べられた手であるかのようにだった。

渋々と門扉の前に立ったマウが、負け惜しみを言う。

「…でも本当の意味で勝ったのはおれだからね？」

「マウや、歴史を紡ぐのは勝者なのだよ」

姉姫にぐいぐいと押されて、マウが「くそっ…」といじけた背で門に片手をつく。

そう、これは「門」だ。

魔霊も通れる造りの扉はジャンボにして重厚である。

だが、将軍に黒騎士が付き従うように、マウには魔力がある。

手を触れた状態からなら、彼は使い魔の助け無しでも、筋力が許す範囲で物体に干渉できる。

図書「室」と言うよりは、図書「館」と表現した方がしっくり来ると思った。

この世の全てがここにあると言っても言うように膨大な蔵書が、整然と並ぶ本棚にぎっしりと詰まっている。

遙か頭上では、天井から吊り下がっている木造の羽がくるくると回

っていた。

部屋の中央には、大きな円卓と椅子が数脚、疎らに配置されている。かつて姉姫が学んだであろう円卓に、今はその妹が教科書を広げていた。

その傍らに立つ老骨の剣士が、片手に支え持った書籍をぱたんと閉じた。

《ちょうどいいところに来たな、魔術師…》

ザ・ナイスタイミング…マウ。

筆を置いた「剣聖」が、檻褸を翻して振り返った。

《実に。…そう、今まさに魔術師の倒し方を教えていたところだ》

「何を教えてんだ、あんた！」

第四十八話、剣と魔力

死が不可避のものだから、人は何かを遺そうとする。

後世に何かを伝えようとするのは、限りある生命の、死に対する抵抗だ。

スケルトンという魔霊は、スライムやエメスとはタイプが違う。ほんの些細なミスで、あっさりと滅びてしまう。

だから、伝えるべきことを、伝えられる内に、伝えておきたいのだ。

スケルトンの足取りは緩やかなものだった。

踵骨が床を擦る度に、襪褌の中でカシャカシャと音が鳴る。

《まずは機先を封じる》

魔霊の《声》を、魔術師だけは聞き取れる。

より正確に言うなら、彼らの意思を言語に変換して再生できる。

だから、マウは怯えた。

マウは、この骸骨剣士に完全敗北を喫したことがある。

エメスや黒騎士とは状況が違う、負けてはならない戦いでだ。

人間と同程度の身体能力で、練り上げられた技巧に敬意を抱いてしまったから、おそらく一生勝てない。

知らず知らずの内に後ずさり、マウを盾にこそそと隠れていた姉

姫と軽く接触した。

「ふぎゃっ」と小さな悲鳴がすぐ後ろから聞こえたから、もう肚を決める頃合いだった。

ぐつと眉間に皺を寄せて前へ一歩踏み出した少年に、老騎士が呵呵と下顎を打ち鳴らした。

《そつだ。いいぞ…お前には戦士の素質がある》

それが何より重要なことであるように言われて、マウは反論せずにはいらなかったのだ。

「そんなものなくたって、人は笑えるだろ。悲しいときは泣くんだよ」

魔霊の声が届くのは魔術師だけだから、突拍子もないことを言い出したマウに、このとき初めて二人が「会話」していることに姉姫が気付いた。

ひょいと肩越しに顔を覗かせると、口うるさい教師が無駄のない足運びでこちらへと歩いてくるのが見えた。

椅子に腰掛けている小つこいのに目で問うと、ふいとそっぽを向かれた。

あとで泣かそうと心に決めた。

今はマウだ。

「何だ、どした？」

「あんたほどの魔霊が、どうして!」

「…おお」

その温度差に、姉姫はうめいた。

彼女は悩んだが、置いてきぼりは寂しいので、とりあえず参加してみることにした。

「や、やめろー!」

マウを押しつけて前に出ると、彼を庇うように両腕を広げて立ち塞がったのだ。

教え子に対してすらも、老騎士の動きに迷いはない。

襜褕の裾を跳ね上げて剣帯に手骨を差し込んだスケルトンが、振りかぶった得物を容赦なく姉姫に叩き付けた。

快音が鳴り響いた。…ハリセンだった。

馬鹿弟子の二人が、これで叩かれると大人しくなるので、常備しているのだ。

イイ顔で前のめりに倒れ込む姉姫。

「無茶しやがって…!」

その背後から飛び出したマウが、刀印を正面に突き出す。

自らの肉体を完璧に制御できる彼の瞬発力は、ほとんど人類の限界値に近い。

自分より遅い筈のスケルトンを、それなのに見失うのは何故なのか、マウには理解できない。

ぴたりと側面に付いたスケルトンは、そのとき既に抜剣していた。

回避する暇などあろう筈もない。

だが、逆袈裟に跳ね上がった剣先が、迂闊にも踏み込んだマウを捉えても、そうでないマウなら掠りもしない。

影を踏んでスケルトンの背後に現れたマウが、至近距離から檻褸の背中に刀印を突き付ける。

しかしそれよりも早く、びんつと剣の柄を手骨で器用に弾き飛ばしたスケルトンが、その場で急激に旋回し、空中で半回転した剣を逆手に掴み取って、マウの喉元に突き付けていた。

「何ソレ!?!」

魔眼の反応が、まるで追いつかない。

マウの悲鳴に、倒れ掛かっていた姉姫が踏ん張りを見せた。片腕を振り上げて、スケルトンを背後から強襲する。

「死ねえゝ!」

本気すぎて怖い。

この機会に恩師を亡き者にしようというのが、どす黒いオーラが目に見えるようだった。

…いや、実際に見えていた。

姉姫の腕を、黒いもやのようなものが覆っていた。

王族は人間とそう変わらない、非力な存在だが、魔霊を生み出し支配する「力」を持っている。

姉姫の腕を覆った鉤爪状の「闇」は、魔霊の原型だ。

しかしそれすら、彼女を教え導いた先生には通用しない。

マウの首にぴたりと剣を添えたまま、彼はくるりと反転し、残る片腕で力一杯ハリセンを振り下ろした。

「ぐ…ぐつつぁんです」

頭頂部から突き抜けた衝撃に、姉姫がもんどり打って倒れる。

「姉姫！ くそっ…だったら！」

スケルトンが転進して駆け出したとき、マウは再び影を踏んで、今度は円卓の上に片膝を付いた姿勢で出現した。

ショートレンジの差し合いでは勝負にならない。

距離を置くなら、印象に残った円卓の付近が最適で、けれど幼い妹姫の背に隠れるほど恥知らずにはなれなかった。

その思考を、完全にトレースされていた。

先読みしてこちらへ直進してくるスケルトンに面食らうマウだが、さすがにこの距離だ。先手を取れる。

刀印を横なぎに振るったマウが、使い魔を発現した。

「アプリカ！」

マウの魔力は、対象の内面に働きかける幻術の特性を強く帯びている。

発動したなら、避ける術はない。

襲い掛かる横殴りの衝撃波を、スケルトンはひらりと跳躍して回避した。

「避けっ…ええ!？」

行き場を失った衝撃波が、轟音を立てて本棚を直撃した。

「おしおきね」

惨劇を目の当たりにした妹姫が、ぽつりと呟いた。

一生懸命がんばれば、いつか報われるとマウは信じている。

第四十九話、不正停止

魔術師たちの間で人気の競技と言えば、「決闘ルール」だ。

三メートルの距離で向かい合い、互いの魔力を正面からぶつけ合うもので、ほとんど一撃で勝敗が決するから、まず使い魔を発現しての抜き撃ちになる。

そのルール下において、マウは負けたことがない。

だから、想像だになかった。

（踏めない）

逃げ道を想定できない。影を踏めないなど…

マウが最後に頼るのは、やはり使い魔だ。

目が合った。

アプリカは、残念ですが…とでも言うように、ふるりと一度、頭を揺すった。

ぎくりと硬直したマウに、襷袢を纏った剣士が覆い被さった。

「痛っ」

円卓に背中を打ち付けて、息が詰まる。

(…！)

反射的に閉ざしたまぶたを、まずいと思い即座に見開くも、瞬き一つで、もう趨勢は決していた。

円卓の上で大の字に倒れたマウを、虚ろな眼窩が見下ろしていた。

目を向けなくとも、喉元に冷たい気配を感じたから、ああ負けたのだと腑に落ちた。

彼が本気だったなら自分は死んでいたと、やや遅れて理解が降ってきて、ひどく恐ろしくなった。

声が震えたのは、その所為だ。

「なんで…」

《儂が魔力を使った。お前を通してな》

「な…に？」

理解できないと言うように眉をしかめる少年に、老教師は我が意を得たりと頷いた。

《それだ。お前は正規の教育を受けていないのか？》

彼は剣先を引き戻すと、手元できりきりと魔剣を回して、剣帯の鞘にぱちんと納めた。

もう片方の手に持つハリセンはそのままに、空いた片手をマウへと

差し出す。掴まれということだろう。

比喩表現でも何でもなく、皮も肉も削ぎ落ちた手骨は、驚くほど細い。

不思議と暖かみのある中手骨に指先が触れて、無性に気恥ずかしくなってきた。

「いや…」

助け起こされたマウが言い淀んだのは、学歴に自信がなかったからだ。

彼が十四歳という若さで郷を飛び出したのは、進路の関係で一悶着あった為である。

進学の見込みはなかった。お世辞にも優等生とは言えない成績だったからだ。

落ち零れて流されて…今や「いつまでテーブルの上に居るの」と七歳児に叱られるところまで来てしまった。

素直にすみませんと頭を下げるのは年上のプライドが許さなかったから、卓上に散乱したノートを盗み見て、「ちゃんと勉強してるんだ。偉いね」と頭を撫でてあげた。

魔霊の姫は二人姉妹で、何食わぬ顔でやって来て妹の隣に座った方が「姉姫」、席ごとにじり寄ってくる姉をガン無視している方が「妹姫」だ。

姉妹と言っただけあつて似通つた面差しをしている。

数年も経てば、「同一人物です」と言つても通用するだろう。それほど似ている。

ただし、白いドレスに身を包んでいる姉妹に対して、その妹が着ているのは真紅のドレスだ。

まさしくお姫様然とした丈の長い衣装で、ふわりと裾が広がったスカートと、肩口を装う華やかなフリルが特徴的だった。

二の腕から指先にかけてを、こちらは純白の、長手袋で覆っている。

姉妹と同じくらいの長さの、やはり銀色の髪を、妹妹は彼女らの母親を真似ておろしている。

妹妹は、魔霊の王たる母を強く尊敬している。

だからと言って、マウが妹妹を女王と同一視することはない。

女王は、はっきり言つて救いようがない。

だが、心優しく可憐な姉妹妹には明るい未来が似合うと感じていた。

「座るの？ 座らないの？」

たとえば、獲物をいたぶるような目で見られたとしてもだ。

「…座ります。すみません」

身分が違うから謝つてもいいのだと、また一つ誇りを失った。

姉姫とは逆側の椅子を無言でばんばんと叩く妹姫に、マウは忠犬よろしく従った。

彼が着席したのを見届けて、スケルトンが筆を取る。

嫌がらせのつもりだろうか、椅子の上で身を乗り出して、頼と頼が触れそうなほど間近で妹を凝視している馬鹿弟子一号を、まずはハリセンで叩いておいた。

第五十話、スケルトンの分かりやすい魔力講座

魔力を使うという行為は、扉を開くことと似ていると、老教師は言った。

「魔術師」とは、その扉を開くことのできる人間だ。

つまり、魔術師でなくとも、扉さえ開いていれば潜ることはできる。その現象を、気が遠くなるほどの歳月を戦場で過ごした騎士は「影踏みの瑕」と書き記した。

姉姉妹には彼の声が届かないから、ひよつとしたら自分にとって致命的かもしれないことを、マウ本人の口から伝える羽目になる。

しかし妹が興味を示したのは、まったく別のことだった。

「…先生、自分のこと儼なんて言うんだ…」

筆記では、いつも『私』と書いているのだ。

恥じらう歳でもない、スケルトンは、しかし気まずそうに講義を続ける。

《…お前は以前に他人を連れて影を踏んだらう？　だから、当然…知っているものとばかり思っていた》

一人称を避けて話しているのが分かるから、マウも微妙に気まずくなる。

「その…瑕つてやつ？ 僕：おれは魔術師の学校で魔力の使い方を習ったけど聞いたことないよねマウです」

引きずられてマウの一人称もぶれてしまい、早口で誤魔化そうとしたから、拳句に語尾まで怪しくなって、最後に自己紹介を付け加える始末だった。

姉姫が顔を背けて必死に笑いをこらえているのが見えたから、二人の間の空気がますます微妙になる。

《他者を同伴する影踏みは、その者の同意を得られる状況が必要だ。…分かるか？ 私を攻撃したことで、お前は逃げ道を失ったのだ》

「…ごめん、全然分からない」

一人称を変えたことに気付いたら負けだと分かっていたのに、気持ちとは裏腹に研ぎ澄まされた五感が鈍感になることを許してくれない。

スケルトンは、根気強く説明する。

《お前に反撃を許す状況を、先に私が作ったということだ。無意識にしろ、お前がその状況を受け入れ攻勢に回った時点で、私がお前の魔力に干渉した》

つまり、攻性の魔力を放ったことでマウの「現在」が確定し、それにより影踏みの下地が崩れたということだ。

だが、本人の意向を無視して進学クラスに放り込まれたマウは、授業について行けずに落ち零れたのだ。

スケルトンの語る難解な理屈を聞いてすぐ理解できるようなら、今頃マウは魔術師の里で高校受験に向けて勤しんでいる筈だった。

「な、なんとなく分かるような…？」

何故？ どうして？ と問うたびに、この少年の魔術師としての歪さが浮き彫りになるかのようなことから、スケルトンの口調からも自信が失われていく。

《そもそも、あの場面で空間指定の魔力を使ったのは何故だ？ 対象指定だったなら、最低でも私を足止めできた筈だぞ》

マウは、答えられなかった。同様に考え彼が編み上げた呪縛の術を、補強し上書きしたのはアプリカだったからだ。

空間指定の物理干渉など、マウには逆立ちしてもできない。つまり、アプリカが紡ぎ出す理論の多くは、マウの理解を越えているのだ。

そして、そのことを、マウは誰にも打ち明けるつもりはない。魔術師なら誰しもが欲しがる情報だと分かっているからだ。家族を守りたいという強い欲求が、マウにはあった。

魔術師をよく知る老騎士だからこそ、使い魔が術を書き換えたのだとは決して思い付かない。

《…これは言うまでもないかもしれんが、剣士である私が対等の条件で魔術師に勝とうとするなら、影踏みの瑕を突くしかない。お前が圧倒されたと思うなら、それは私の思惑に嵌ったということだ》

お前もそうしろと言外に語り、老教師は筆を置いた。

もしも高等魔術師が帝国を襲撃したなら、現時点のマウでは太刀打ちできないと思ったからだ。

彼が魔術師の里を出奔したのは個人的な事情だろうと察していたものの、歴史の奔流は私情を容易く呑み込み押し流してしまう。

時代が動いたのだと、老騎士は感じていた。

第五十一話、帝国今昔

会話しきものをする二人は、一切目を合わせようとしない。

何やら真面目な話をしているようだが、ちらりと先生を見たマウが、はっとして視線を伏せたから、もう何だか…

「…それで、あなた何をしに来たの？」

妹姫が尋ねると、マウはきょとした。

「え、なんで？」

「…？ 先生に負けるためにわざわざここに来たの？ 違うでしょ？」

マウは、目的を忘れていた。

生命の危機に瀕したためか、それとも忘れた方が楽になれると思っていたからか、おそらく両方だ。

ただ、失われつつある年上の威厳を大切にしたかった。そのことだけは確かだ。

「負けるためって…そんなのやってみなくちゃ分からないよ」

「でも負けたわ」

広義で言えば、魔霊とて女王の子には違いない。
それでも姉姫と妹姫が「王族」と呼ばれ、特別視されるのは、彼女

たちが正しく女王の形質を受け継いでいるからだ。

妹姫は、酷薄に笑った。

「あなた、ほんの少しでも先生に勝てると思っていたの？ 諦めなければ、きっと、いずれ？ 人間らしい物の考え方をするのね…マウ」

魔術師なのに…と囁いた、あどけない少女が、すっと腕を伸ばして、マウの前髪を指先で軽く払った。

マウは、黒髪黒目の少年だ。

片方だけならともかく、両方とも混じり気なしの黒色というのは、実は珍しい。

頬まで降りてきた妹姫のか細い指を、マウは壊れ物でも扱うような手付きで柔らかく包んだ。

「思ってるよ。今でも思ってる。諦めなければ、きっといずれ…」
人間は魔霊と比べて短命だから、自分が何を残せるのかと問い続ける。

生物の究極形が不老不死であることは間違いない。

「だから」人間は死ぬ。

種として全体で見ると、年老いた細胞が次世代にあとを託すのは、生物が到達した一つの結論だからだ。

だからマウは、おそらく人間よりずっと長く生きるこの姉妹に何かを残してあげたかった。

人生に意味があると言っなら、魔術師の役割は、何かを伝えることだと信じたかったのだ。

ああ、と妹姫は思った。

だから母様は、この人間を連れてきたのだと分かった。

魔術師だから、それだけではない。

まるで黒い蜜のようだと思った。どろりとしていて、それも火のように熱い。

剥がれ落ちた希望を絶望と言っなら、上辺だけ信念で塗り固められた「怒り」を何と言って表現すればいい？

飢えた狼が生肉を目の前にしておあずけを命じられたような目で見詰められて、マウは居心地悪そうに身じろぎした。

「ちょっと、何て目で人を見てるの…」

実のところ妹よりも「力」に乏しい姉姫は、それ故に「食欲」に対して鈍感でいられた。

「おちび、おちび？　おい、ちびすけ。こら、正気に戻りなさい。よだれが出てるぞ、はしたない」

姉姫は、妹を「ちび」と呼ぶ。

畏れ多くも帝国の第二王女を、そんなふうと呼ぶのは、世界広しいえど姉だけだ。

マウを凝視していた妹姫が、姉にたしなめられて、はっと我に返った。屈辱の極みだった。

「よだれなんて出てません！ わたしは姉様より力があるんだから、こうなるの仕方ないでしょ！」

妹に力で劣るという事実は、姉姫のプライドを著しく損なう問題だった。

「お姉ちゃんに対して何て言い草だ！ 生意気なやつめっ」

不毛な争いが始まった。

お互いの頬を引っ張り合う王女らに、その教育係は不干涉を貫くと決めているようだった。

止めなくていいの？ とマウが目で問えば、『好きにさせておけ』と気のない様子で鞘から剣を取り出し、こなれた所作で手入れを始める。

丸めた教科書とノートではしはしと攻防戦を繰り広げる姉妹をよそに、マウが尋ねる。

「大事にしてるんだな。それ、絶対に折れないんだろ？」

剣聖スケルトンの振るう剣が、鉄をも切り裂く魔剣であるという伝説は、大陸で暮らす人々の間でよく知られた逸話だった。

《否定はしない。そういうときもあった》

しかし返ってきたのは、含みのある言葉だった。

長く生きていれば、色々とある。もちろん後ろ暗いことも。

取り立てて話すつもりはなかったが、…円卓に頬杖を突いて、ぼんやりとこちらの手元を眺めている魔術師を見て、少し気が変わった。

《…そうだな、お前には話しておいた方がいいかもしれん》

「ん？」

《僕は、幾度か…魔術師たちと共闘したことがある。卑しくも女王陛下に牙を剥いた魔獣どもを斬るためにだ》

魔霊は、生体を基礎とする「魔獣型」と、精神を基軸とする「魔霊型」の二通りに分かれる。

もっと言えば、魔霊を生体に封じ込めたのが魔獣だ。

霊体が剥き出しの魔霊は、強大な権能を振るえる反面、不安定で、自滅しやすい。

その点、霊体を封入された魔獣は、安定していて力こそ弱いが、ほとんど弱点らしい弱点を持たない。

スケルトンは、典型的な魔獣型だ。

つまり、同胞を討つたと、彼は言うのだ。

第五十二話、吐露

魔霊は、生みの親である女王に対して必ずしも忠実ではない。

魔霊同士の仲間意識はあるから、大抵の魔霊は帝国に与することを選ぶが、一方で傲慢な女王に反発を覚えるものもいる。

特に魔獣だ。

彼らは霊体を外殻で保護されているため、権能の盛衰に左右されにくい。

それはつまり、帝国の庇護を必要としないということだ。

「ほら、おちび！ お姉ちゃんに謝りなさい！ お姉ちゃん大好きでも可！」

だから、妹姫に馬乗りになった姉姫が愛情を強要するように、女王の食欲を満たすために戦う生活に嫌気が差して離反する魔霊だつて居る。

「本当のこと言っただけでしょ！ そうやってむきになるところが子供なんです！」

しかし妹姫が姉姫の要求を跳ね除けるように、戦わない魔霊に価値はないと女王は言う。

魔霊の権能は女王の「力」を変換したものだから、無駄な消費を嫌った女王は、配下の魔霊に討伐を命じることになる。

両腕を突っ張って姉姫を押し退けようとする妹姫のように、魔霊同士の争いが起こるのだ。

「わたしのこと子供扱いする癖に、姉様は自分勝手です！ いい加減、お風呂について来るのやめてって言ってるでしょ！」

しよせん、女王にとって魔霊は道具に過ぎないのだ。

そこには、膝を立てて体重を掛けないようにしている姉姫のような慈悲はない。

「お前は何も分かってない。將軍なんて十五歳になっても未だにお風呂でよく転ぶんだぞ！」

「あの人、何もないところでも転ぶでしょ！」

將軍がお風呂でよく転ぶように、スケルトンの膂力には先天的な限界がある。

鋼より強靱な魔霊が相手だった場合、第三者の協力が要る。

「知ったような口を……。じゃあお前、將軍が最後におねしょしたのいつか知って「アプリカ！」」

さすがに同情を禁じ得なかったマウが、使い魔の力を借りて姉姫の身柄を拘束した。

「はわっ！？」

ふわりと浮き上がる姉姫。

重力から解き放たれ、とつさにドレスの裾を抑えた彼女が、空中でくるりと回る。

「ふおお…」

マウが指を手前に引くと、それに応じて、姉姫の身体が不自然な等速運動で寄ってきた。

(…正常に作用する。さっきのは…アプリカ?)

マウは、魔霊と話するときでも言葉を声に出して言う。読心術ではないからだ。

しかし相手が使い魔なら話は別だった。

ちらりと見ると、肩にとまっているアプリカが、前脚に持つ弓でちよいちよいと首をつついてきた。

スケルトンが言うように、確かに呪縛なら必中だったろう。マウもそう考えた。

だが、アプリカの考えは異なる。

彼には、術者のマウですら見えないものが見える。

あの場面で貪欲に勝ちを拾おうとしたなら、だからこそ物理干涉に賭けるべきだったのだ。

胸を張る使い魔に、マウは肩を竦めた。

アプリカは、こう見えて好戦的なのだ。誰に似たんだか…

手の届く範囲まで近付いてきた姉姫を受け止めて、隣の椅子に降ろしてあげる。

ここはびしっと言っておくべきだろう。

「目上の人が話してるんだから、ちゃんと聞きなさい」

姉姫が唇を尖らせる。

「だっておちびが…」

「言い訳しないの」

ぴしゃりと言うマウに、しかしスケルトンが言った。

《もういい。お前が老人の昔話より、パンチラに興味があるのはよく分かった》

「…そういつとこあるよな、おれ…」

きちんと自覚があるマウだった。

第五十三話、誤算

要約すると、スケルトンが使っている剣は、何の変哲もない鉄剣らしい。

同じ部隊にいた戦友の形見なので愛着はあるが、酷使すれば曲がり、欠ける。そのたびに研ぎ直しているのだという。

ときには魔術師に依頼することもあったとか。

その縁で魔術師と浅からぬ付き合いがあったスケルトンは、剣だけではどうにもならない魔獣を相手取った際に魔力を剣に宿してもらったことがある。

怪しくも冴え渡った剣は、魔獣の強靱な外殻さえも打ち砕いたのだという。

だが、形あるものはいずれ滅びるように、永続する魔力などない。

ただの鉄に戻った剣は、それでも今なお、伝説の名剣として語り継がれている…

「…え、じゃあ將軍の剣はどうすんの？」

言ってみて、用件を思い出したマウの血の気が引いた。

剣の切れ味を上げる魔力と聞いても、まるでぴんと来なかったからだ。

マウの魔力を乗り物に例えるなら、このままならない現実と接続するサーキットは、錯覚や幻聴をベースとした暗示催眠術という…」

辻褄合わせ」だ。

魔力の定義があやふやだから、それを操る魔術師たちは、一定の法則と方向性を定めて、「だからこうなる」と自分を納得させねばならない。

マウもそうだが、大半の魔術師が魔力を幻術という理屈で制御するのは、それが一番簡単で、通りがよく、しかも使い勝手がいいからだ。

だからと言って万能という訳では、もちろんない。

一例として……幻術式の魔力は、こと物体に対して、しばしば無力に陥る。

木石は物を考えないからだ。

マウは、魔力に幻術という方程式を当て嵌めることに慣れすぎていて、その考え方から抜け出せないし、「別の方程式」にシフトするという発想自体がない。

複数の回路基盤を持ち、自在に切り替えることができる一握りの天才を、「高等魔術師」と呼ぶのだ。

マウは、直に手で触れて工程を省略する術と、指定の空間に斥力を発生させる術が、結果は同じ物体干渉でも、実はまったくの別物であることすら知らない。

聞いても理解できないだろう。

仮に理解できたとしてもだ、自分に嘘は吐けない。

だから彼には、魔剣を作れと言われても無理なのだ。

將軍は、スケルトンの弟子の一人だ。

正直、あまり関わり合いになりたくなかったが、師弟でも何でもないマウにばかり負担を掛ける訳にも行くまい。

《…あやつが、どうした？》

「將軍が…あやつがどうしたと老師が嫌々ながら興味を示しております」

とことこと近寄ってきた妹姫を抱き上げて、姉姫とは反対側の席上に安置しながら、マウは姉姫に報告した。

この姉妹を隣り合わせると話が進まないと学習したからだ。

姉姫が妹姫に構うのは、妹の将来に期待しているからだ。手が届く範囲にいないなら、殊更に構ったりはしない。

姉姫は、円卓を挟んで向かい側の席に腰掛けている老教師を見据えると、腕を組んで鼻を鳴らした。

「新しい剣が欲しいんだと。今度は魔剣が欲しいとか言い出した」

妹姫が、か細い吐息を吐いた。

「…まだそんなこと言ってるの、あの子…」

おねだりされてホイホイと安請け合いましたマウが、將軍を庇って言う。

「まあまあ。やっぱり將軍くらいになると、普通の剣じゃ満足できないんだよ。おれとしては、魔剣とまでは行かなくとも、名のある鍛冶職人に一振り打ってもらおうかなと」

魔剣が実在しないなら、その旨を告げればきっと彼女は分かってくれると、このときのマウは考えていた。

「……」

妹姫が、信じられないという目でマウを見ていた。
今、彼は何と言った？

將軍くらいになると？ 普通の剣じゃ満足できない？ そう言ったのか？

妹姫は、マウに気付かれないよう、そっと姉に目配せした。

妹の視線に気付いた姉姫が、然りと頷く。

マウは、勘違いしている。

將軍は、剣に関しては素人だ。

残念な運動神経をしているので、そこら辺の村娘にも負けるだろう。

だが、当の本人である將軍には自覚はない。いや、あるにはあるのだろうが、剣聖の直弟子にして黒騎士の宿主でもある彼女は、頭の中で自らを美化しがちなのだ。

《…！》

スケルトンが、烈火の如く姉姫を睨んでいた。
謀られたことに気が付いたからだ。

將軍は、帝国で育てられた人間の少女だ。

人間である以上、魔霊と同等の個体戦力は望むべくもなかったから、幼い頃から戦術指揮官としての英才教育を施された。

現存する魔霊で、曲がりなりにも部隊長を務めた経験があるのは、スケルトンだけだ。

だから、もしも彼がその気だったなら、將軍を一端の剣士に仕立てあげることも可能な筈だった。

そうしなかったのは何故か？ 剣一つで守れるものなどたかが知れていると思ったからだ。

事実、將軍は黒騎士団団長として数多の戦果を挙げ、今や全軍を率いる元帥職にまで登り詰めた。

だからスケルトンは、彼女に「お前に剣の才能はない。よく転ぶし」ときっぱり告げたことはない。

妙な自信もはつたりの一部として有効だったから、すっかり機を逃してしまっていた。

その点に関して、スケルトンは責任を感じていた。

ここに至って、知らぬ存ぜぬは通らないだろう。

…そう、共犯者は多いに越したことはない…

第五十四話、露呈

腕まくりをしながら、別に興味はないけど…というように目線を逸らして、マウが言った。

「で、どうなの？ ああ、これは飽くまでも参考までに訊くんだけど」

と前置きしてから、

「彼女、老師と試合して三本中一本は取れるとかそんな感じ？ 腕とかめっちゃ細いもんな、やっぱ軽くて細身な剣の方がいいんかね」

マウが知る限り、「剣」と呼ばれるものは三種類。

ブロードソード、ロングソード、ショートソードの三つだ。

ブロードソードは厚身の剣で、重量はあるものの、一撃の殺傷力が高い。黒騎士たちの制式武装がこれだ。

ロングソードは、刀身が長く、扱いに熟練を要する。騎士が用いるのは専らこれだ。スケルトンも愛用している。

ショートソードは、小剣とも呼ばれるもので、ややこしいが短剣とは違う。刃渡りは五十センチほど、屋内でも振り回せるし、扱いやすい。

将軍が帯剣しているのは、師と同じ長剣だ。

禍々しいデザインになっていて、見た目だけで言うなら、よほど魔剣らしい。

將軍の腕前を尋ねるマウだが…

《……》

彼女の師は、気まずそうに目線を逸らした。

実際に気まずかった。

馬鹿弟子一号とその妹が、揃って期待の眼差しを寄せていたからだ。もしも女王が二人いたなら、確実に共倒れになるから、その娘たちは能力あるいは人格的に差異が出るよう調整されている。

最初に姉姫が生まれて…

しかし女王の「期待」を満たしたのは、むしろ人間である筈の將軍だったから、第二子の妹姫が生まれた。

母親が自分に求めている役割が、他の魔霊たちが言うように、女王の後継者「ではない」と姉姫は気付いていたから、こんなにもひねくれてしまった。

その点、馬鹿弟子二号は、一号と違って素直だ。性格的にちょっとアレな部分はあるものの、大きくなっても昔と変わらず師匠、師匠と慕ってくれている。

それでもスケルトンが迷いを捨て切れないのは、最終的に自分が従うのは女王だと決めているからだ。

だから、せめてそれまでは…という思いをどうしても捨てられない。軽い気持ちで訊いたのに、一向に返事がないから、マウは戸惑うしかない。

「…あら？ えー…と」

困ったときに使い魔に頼るのは、彼の悪い癖だった。

さっと視線を振ると、アプリカは素早く身を翻して、バイオリンの調律を始めた。

「ちよつ、今、完全に目が合ったよね？」

使い魔の補助を交えた魔力は、確かに強力だが、術者への反動もまた大きい。

だから、ときとして心を鬼にすることだってある。

マウは使い魔に甘いので、見捨てられても決して怒らない。

それに、今は他にも頼れる友人がいる。

だが、姉姫からしてみれば、將軍は大きな妹のような存在だ。継るような目で見られても、真相を打ち明けるのは陰口を叩くように嫌だった。

戦略的な見地ではどうなのか？ 帝国魔術師が、帝国軍元帥のへつばこぶりをすることは有益か否か…

姉姫が師に期待しているのは、そこだ。

マウは年齢の割に大人びたところがある少年だが、秘密を守れるタイプではない。感情に走りやすく、余計な気を回して失敗するタイプだ。

帝国では周知の事実と化していることだが…敵国に知れ渡るのだけは避けたい。

しかし戦場では何が起こるか分からない。
仮にマウが出兵に参加するなら、「知らない」では済まされないだろう。

その辺り、おもにマウの扱いに関してが曖昧なまま、母が里帰り…
というのは「ついで」なのだろうが…してしまったので、判断がでない。

師は、どう答えるのか…

実際に戦場でマウと矛を交えたことがある老騎士は、重々しく口を開いた。

《…あれはどこに居る?》

「え? んー…サイレン、將軍がどこに居るか分かる?」

マウは、使い魔の助け無くして遠距離の探査ができない。
距離に応じて、不確定要素が増えるからだ。

姉姉妹を通してではなく直接サイレンに話し掛けたのは、彼女たち

が持っている通話用の携帯端末を、自分も欲しがっているというさ
さやかなアピールだった。

それなのにマウの視線が食い付いたのは姉姫のふくよかな胸元だっ
たから、彼の願いが通じることはない。

同じ端末を持っているのに一顧だにされなかった七歳児が、はっと
して椅子をぴょんと飛び降りると、姉に駆け寄り、つま先立ちで姉
の耳元に口を寄せた。

ひそひそと耳打ちされて、姉姫が「ほほう…」と目を細めた。

「…なるほど、女なら誰でも…」

「よし分かった。まずはエメスだ。やつはどこに居る?」

マウの尊厳が失われるとしたら、その経緯には、ごく少数のお喋り
魔霊が絡んでいるに違いなかった。

「マウのえっち」

姉姫が身の危険を感じたように両腕で胸を隠したから、人間性を疑
われたようでショックだった。

それなのに、隠れた膨らみを残念に思う気持ちを捨て切れない。

この怒りをどこへ向ければいい? …決まっている。エメスだ。

「ゴーレム…!」

いずれは決着を付けねばなるまい…？

第五十五話、マウ包囲網

「影姫」と、將軍は人間たちによく呼ばれる。

今、人面樹たちの眼前で騎士の形状を獲得した魔霊兵士たちの正体が、將軍の影だからだ。

霧の魔霊が渴きを嫌い、嵐の魔霊が冷水を嫌うように、魔霊型の眷族には、必ず弱点がある。

黒騎士は数年前に生まれたばかりの幼い魔霊で、それはつまり最新型ということでもある。

池に小石を投げても水面の月は揺れさざめくだけだから、黒騎士は倒されても時間を置けば復活できる。

彼らの鎧と剣は、現実には干渉するために実体を得た「影」の一形態に過ぎないからだ。

生まれて間もない黒騎士たちは、他の魔霊のように、自らの権能を理解し発展させることができない。

一律、騎士の形状で統一されているのは、そのためだ。

物語の中で、姫君を護るのは騎士と相場が決まっている。

だから、つまり、黒騎士たちの致命的な弱点とは、本体である將軍なのだ。

彼女の命が散ったとき、黒騎士たちもまた同様に滅ぶのである。

無数の黒騎士を顕現した將軍が、深く長く呼吸し、剣帯に差し込まれた剣を、ちゃんと洗練された動作で抜き放った。

剣の至る所に施された、煌びやかな宝玉が、木漏れ日を浴びて燦々と輝いた。

『まづ』と書かれた看板を首から提げた案山子に、距離を隔てて剣先を向ける。

案山子の足元には、『小』と明記されたクマのぬいぐるみが置いてある。

王城を囲う樹海の奥深くで、將軍は、最後に大きく息を吸い、号令を飛ばした。

「進めーっ！」

「ちよっ…何やってんの、この人…」

茂みを掻き分けて現場に到着したマウが、呆然としていた。

將軍の号令に従い、じゃきつと一斉に剣を構えた黒騎士たちが、足下の草を踏み締めて突進した。

『まづ』の末路は哀れなものだった。

四方八方から串刺しにされ、その衝撃に耐え切れなかった四肢が千切れ飛んだ。

「お、おれ〜！」

マウには、自分と同じ名前の案山子に感情移入できる程度の想像力はあった。

「何してんの！？ ホントに何してんの！ もうやだ！ この子、怖い！」

半狂乱になって喚くマウに、將軍が何故か照れた様子で内股をもじもじと擦り合わせた。

「…ばか、言わせるな。お前が姫様を誘拐して森に逃げ込んだ状況をシュミレーションしていたんだ」

女の子の秘密を打ち明けるような態度で殺害計画を告げられて、マウはどうしていいか分からない。

將軍は城内で暮らす同族の先輩だから、きっとマウは、彼女の常識に見習うべき筈だった。

だが、作戦やら武装やらの話で羞恥心を覚えるようになったら、今後の人生に差し支えがありそうで躊躇いを覚えた。

黒騎士が大事そうに抱えて持ってきたクマのぬいぐるみに関しては言及しなかったから、恥じらう將軍にマウは簡潔に用件を述べる。

「中」や「大」ではいけないのかと。何故『小』なのかという問いが踏み込みすぎだと…意識しすぎだと自覚していたからだ。

「將軍、あの…「も、もう見付かったのか…？」

午前中に雨が降ったのか、微かに湿った地面を立てたつま先で掘り返しながら、将軍が先に尋ねてきた。

魔剣のことだ。

黒騎士たちの目を気にしているらしく、恨めしげに上目遣いで見られていた。

よほど緊張感溢れる演習だったらしく、呼吸は浅く、薄らと紅潮した肌が汗ばんでいた。

マウは、もしかして自分は彼女にとっても恥ずかしいことを強要しているのではないかと不安になってきた。

黒騎士たちの注目がマウに集中していたからだ。

「あ、いや……」

とても言い出せる雰囲気ではなかった。

「いや、いいんだ！ 別に急ぎではないから、自分のペースで構わない……楽しみにしてる」

言い淀むマウに、慌てて首を振った将軍が、最後にそう付け加えて穏やかに微笑んだから、今、どんどん後戻りができなくなっていく。

わきわきと根を蠢かせて這い寄ってきた人面樹たちが聴衆に加わり、証人が更に増えた。

勝手に発現したアプリカにぺちぺちと頬を叩かれて、マウは「分かってる」と頷いた。

無理なものは無理だ。

「がんばります」

自らの限界を誰よりも知っている筈の少年が、しかし境界線の一步先を目指すのはいつものパターンだった。

具体的なプランを訊かれても困るといつか、むしろ自分が訊きたいくらいだったから、マウは早口で用件を告げる。

「あのね、今日は伝言に来たんだ。スケルトンが庭園に来て欲しいって」

伝言なら、サイレンに頼めば済む話だった。

魔剣は諦めて欲しいと言いに来た筈のマウが、実際にやったのは、己の首を絞めただけだ。

不甲斐ない自分を認めたくなかったから、責任の所在地を求めて、愚痴が口を衝いて出た。

「…呼び付けるくらいなら、おれと一緒に来れば良かったのに」

「とんでもない！」

将軍がわたたと片手を振った。

「そうか、お前には言っていなかったな。スケルトン殿は、わたしの師だ。こちらから出向くのが筋だろう」

「でも、君は元帥なんだろう？ 立場で言えば君の方が上なんじゃないのか？」

マウの素朴な疑問に、將軍は少し悩んだ。

彼の会話のペースは、將軍にとって少し早い。

彼女が遅いという訳ではなく、

魔力の応酬の合間に信念をぶつけ合うのがマウの日常だったから、自分の気持ちを言葉で表すのに長けているのだ。

その話術を用いれば、將軍を幾らでも丸め込むことだって出来る筈なのに、相手が女の子というだけで、マウはこんなにも弱くなる。

魔術師の社会では男女平等を是とするが、そんなものは絵空事に過ぎなかった。

一息挟んで、將軍がたどたどしく言う。

「…いや、でも、やっぱり、師弟の関係は別だ。もちろん戦場では…そうだ。わたしの指揮で動いて頂くが、平時でまでとなると、逆に申し訳なくて…その、困る」

「まあ、それが普通かな。おれにも魔力の師匠みたいな人は居たんだけどね、これが偏屈な人で」

マウが自分のことを話すのは珍しい。

先に歩き始めた彼に、興味を惹かれて、その背中に將軍が声を掛ける。

やや早足であとを追いながら、

「やはり魔術師というのは師弟制度なのか？」

彼女は、この魔術師の少年に心を許しつつあった。

魔霊たちに優しいからだ。

魔霊の存在を認めてくれる同士が一人居るだけで、こんなにも心強い。

將軍は、やはり人間だ。

幼い頃から一緒だった姉姪が、將軍に、あなたは人間であると、その自覚を捨てるなど常に言い聞かせていたからだ。

そうでもしないと、將軍は自分が人間であるという、その一点を心に抱え、卑屈に育つかもしれないと考えたからだ。

あるいは、影に巣食う魔霊に同調して人間であることを辞めてしまっていたかもしれない…

一方…

「人間」という定義にどれだけの価値がある？

マウはそう考えている。

「ん…皆が皆って訳じゃないね。おれの場合は、師匠って言うより、下宿先の家主って感じかな。おれ、あんまり才能がなかったんだ」

言外に「だから見捨てられた」と言うも、それは方便だった。

誰もがマウを劣等生だと認識し始めても、その人物だけはマウに強い期待を抱いていた。

「野望」と言い換えてもいい。

もしも使い魔の能力が独走しているだけならば、マウの並外れた魔力精度はどこから来るのか？ と考えた高等魔術師が居るのだ。

それは使い魔の力を制限するためではないのか？ と。

だからマウは、使い魔を守るために里を出た。

彼にとって、アプリカは家族だからだ。

帝国に流れ着いたのは、まったくの偶然だろうが、ここなら周囲を自分の戦いに巻き込むことはない。

魔術師は総じて自分勝手だが、魔霊と敵対する道を選ぶほど愚かではない。

帝国で暮らしてよく分かった。

魔霊と人間では視点が違う。

確かに魔力は魔霊に対しても有効だが、魔術師では決して魔霊には勝てない。

そついうふうに仕組まれている。

魔霊を倒せるのは人間だけだ。

この世界の異分子が、「女王」と「魔力」だからだ。

魔力に目覚めた人間は、世界から見ると「人間」の定義を外れるらしい。

マウは、帝国に来てから、ずっと女の子のことばかり考えている。

例えば、不老長寿である筈の女王が跡継ぎを生み出したのは何故なのか？ とか、人間の赤子を拾ったのは何のために？ とかだ。

マウは、女王が嫌いだ。

だから、彼女の目的は何なのかと考える。

ぴょんと軽く跳ねて隣に並んだ将軍が、身体を屈めて顔を覗き込んできた。

「やっぱりセクハラで追い出されたのか？」

「え、違うし。やっぱりってどういうことなの…」

そろそろと着いてきた黒騎士たちが、順番に将軍の影へと沈む傍ら、いちいちこちらに疑惑の視線を寄越していた。

マウは、もうこの国は一度滅ぶべきなんじゃないかと思う。

第五十六話、遭遇

魔霊たちは不老長寿だから、欲望が希薄だ。

女王さえ存命であれば、それだけで生命活動に支障を来さないのだから、そもそも何かを欲しがる必要がない。

だから、たいていの魔霊は何かしらの生き甲斐を求めて生きる。

今、掛け声と共に二階の窓から身を投げ出したエメスは、帝国の尖兵として名の知れた存在だ。

「魔術師！」

「…エメス！」

彼女はマウの中でブラックリスト入りしていたから、魔眼が自動的に反応して「金髪碧眼の少女」の姿を捉えた。

使い魔を見たいと駄々をこねて視覚を開発された將軍は、活性化した魔眼のイメージを目で見ることができた。

將軍の肌の露出について熱く語っていた（よりによって本人に）変態魔術師の片目の先に独立した眼球が発現し、ぎよろりと動いたから、隣でマウの熱弁を聞き流していた將軍は「うわ、キモっ」と率直な感想を述べた。

内心傷付きながらも、マウはとっさに身体を屈めて、地面に指でラインを引いた。

帝国王城の二階と言えば、民家の三階か四階に相当する。人間が飛び降りれば無事では済まない高さだ。

直立した姿勢で軽やかに着地した少女は、当然ながら人間ではなかった。

「乾き」を司る魔霊…それが彼女だ。

魔霊の中でも変身能力に秀でるエメスは、「人形」という本質を持つが故に、人間に化けるのが上手い。

將軍と瓜二つの容姿をした少女が、猛獣のように犬歯を剥いて嗤った。

「おい、魔術師。おい。それは何のつもりだ？ 何度も言ってんだろ。人間、お前じゃあたしには勝てねーよ」

土壤に指を突き立てたまま、マウが軽口を叩いて応じる。

「妹姫に偉そうなこと言っちゃったからな。退くに退けないのさ」

だが、その声には多分の強がりと、微かな自信が同居していた。

エメスは、乾きの象徴たる「砂」を自在に操れる強力な魔霊だ。

人間は空を飛べないから、大地に干渉できる魔霊に対して脅威を感じる。

逃げ場がないからだ。

だからマウは、彼女に勝とうとするなら、彼女のテリトリーに踏み

込むしかないと考えた。

あえて、こちらからだ。

確かに、とエメスは思った。

確かに…この少年には戦士の素質がある。

何を企んでいるのかは知らないが、自らの命を対価に差し出せる人間はそういない。

しかし女王を認めようとしないうちに彼が気に入らなかったから、エメスは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「教えてやる、魔術師。お前がてめーらの力を魔力と呼ぶように、あたしら魔霊が生まれつき持つ力を…権能と呼ぶ」

その変身能力で容易く人間を欺き、またあらゆる物理攻撃を無効化できるエメスは、純粋な戦闘能力で言えばトップクラスの魔霊だ。

その彼女が言う。

「権能ってのは、使いようで幾らでも応用が利く。権能の発展つてやつだ。いいか…黒騎士やら人面樹どもと一緒にたにすんな。あたしの権能は、ほとんど完成してる」

そう言って彼女は、羽織っていたマントを脱ぎ、片手に掲げ持つ。すると、マントが端から見る間に風化し、最後には手元に一握りの砂だけが残った。

「くっ…」

気圧されるものを感じて、マウがうめいた。

白日の下に晒された彼女の白い太ももが、マウの視線を囚えて離さなかったからだ。

そして何より、

「……」

…そして何より、隣で二人の遣り取りを眺めている將軍の視線が痛かった。

「…先に行つていいか？」

彼女は、尊敬する師に呼ばれて参上する途中なのだ。

エメスとマウの、下らない争いに付き合っている暇はない。

言うが早いか、さつさと歩き始めた將軍に、ぱつと身を翻したエメスが纏わり付く。

「え、何だよ…ノリが悪いじゃん、將軍」

エメスは若い魔霊にありがちな、大の人間嫌いだが、唯一、將軍だけは認めている。

この元帥がひとたび指揮を執れば、帝国軍は常勝無敗だからだ。

女王は最低限の指示は出すものの、自軍の損害をまったく気にしないし、そもそも勝敗に興味がない。

戦争とは、魔霊の権能を誇示するための場だという認識が強いからだ。

女王を批判する訳ではないが、矢面に立つ魔霊の立場からすると、優秀な指揮官と言えるのは、やはりこの人間の少女だ。

エメスが、好んで將軍の姿を取るのは、彼女なりの友好の証である。

將軍とて、別にエメスを嫌っている訳ではない。

自分の容姿を写し取られるのは面白くないが、だからと言って女王の真似をしるなどとは口が裂けても言えないからだ。

「師匠に呼ばれてるんだ。一緒に来るか？」

「げえ、あたし、あいつ苦手なんだよね…」

そう口では言いつつも、エメスはひょこひょこ將軍についていく。

將軍を姉姉妹の騎士とするなら、魔獣の生き残りである骸骨剣士は女王の騎士だ。

人間の中から「英雄」と呼ばれる類いの人物が登場するたびに、エメスは先駆けして帝国の尖兵として立ち塞がる。

だが、負ける。

どという訳か負ける。

まるで運命を敵に回したかのように、友情とか何かそんなのが奇跡を起こして負ける。ひどい話だ。

その点、あの骸骨剣士は、一定の戦果を上げるのだ。

女王に忠誠を誓っているエメスが、面白くあろう筈もない。

うめき声を上げるエメスに、將軍の片眉が跳ねた。

「…お前、もうちょっとお淑やかになれないか？ わたしの姿でそういう…なんだ…わたしの品性が疑われるだろ」

「…あれ？」

言われて、エメスがきょとんとした。
今更ながら気付いたのだ。

「あんた、なんで戦場モードの口調なの？」

彼女は、それでもかと言うほど空気を讀まない。

折り悪く追いついてきたマウが、せっかく気付かないふりをしていたのに台無しになりそうだったから、素早く使い魔を発現して天気の話振った。

「いい天気だね、アプリカ」

肩の上で、アプリカがうんうんと同意した。

ちょうど森を抜けたところでエメスとエンカウントしたから、まるで後を追うように頭上までやって来たどんよりとした雲がよく見えた。

ちらちらとマウを盗み見た將軍が、精一杯の虚勢を張った。

「ふ、深い意味はない…」

第五十七話、枝葉

帝国王城の中央庭園は、魔霊たちの憩いの場として人気を集めるスポットだ。

日中なら、庭師（黒い）と木々（人面）の熱い戦いが観戦できるだけでなく、つい先日、実在を確認された魔術師が暇そうにしているのを目にする機会も多い。

今日に限って言えば、噴水の縁に腰掛けて足をぶらぶらしている美姫らを幸運にも鑑賞できるだろう。

その傍らで、風景に溶け込むように佇んでいる骸骨剣士が、將軍の師だ。

「しっしょー！」

ぶんぶんと手を振って駆け寄ってくる直弟子に、スケルトンは内心で目を細めた。

姉妹を教え子に持つスケルトンだが、その半生を剣に捧げた彼の技を正しく継ぐ者がいるとすれば、それは將軍に他ならなかった。

目指す目的が勝利なら、手段は剣でなくともいい。

部隊の運用、戦場の機微を徹底的に叩き込んだ自慢の弟子だ。

その彼女に刃を向けねばならないのは、哀しいことだ。

ずっと片腕を上げて、ぴたりと剣尖を伸ばした老師に、將軍は駆け寄る足を止めた。

「師匠？」

時代の変節を感じていたから、スケルトンはそう遠くない未来で、自分が朽ち果てるだろうことを意識している。

伝えるべきことを、伝えるべきものに伝えておきたかった。

彼の上半身が、ぐらりとよろめいて見えた次の瞬間、スケルトンの剣先が將軍の細い首にぴたりと添えられていた。

彼女を呼びに行った筈のマウがこの場に居なかったから、將軍の無知を装う態度が演技であることは分かっていた。

だから、「將軍」の口角が無機質に吊り上がり、三日月に歪んでも、スケルトンは驚かなかった。

「こんにちは」

眼前でさらさらと風化した少女の正体は、將軍に化けたエメスだった。

では本当の將軍はどこにいる？

いや、そうではない。

エメスと分離した細い腕が、まっすぐ伸びていた。

日の光に対して垂直に腕を伸ばせば、腕の内側は陰になる。

將軍の身体から剥離した「影」は、彼女自身がそう在りたいと願うように、騎士の形質を獲得してスケルトンを取り囲んだ。

魔霊は「本質」に縛られるのが普通だ。

如何に変身能力を有していようと、**「心」**の具現たる彼らは「自分」からかけ離れた姿にはなれない。

だが、ごく一部の魔霊は、自らの権能を発展させていく過程で、そうした制限を超えていく。

ひとつ例を挙げるなら、「人間に化ける」という現象を分解し、部位ごとに変身したり、更に細かく、指を長くしたりと試みているうちに、やがて「人間」という枠組みから外れていく…

権能の「発展」と呼ばれる現象が、これだ。

完成した権能は、その属性において、およそ人間が想像しうる範疇、全てを再現できると考えていい。

例えば、自身を薄皮一枚とし、將軍をコーティングすることだって出来る。

それがエメスという魔霊だ。

「……」

その彼女が、今、羞恥に悶えて地に伏した。

帝国軍が誇る元帥は、戦闘時と平常時のギャップが激しい少女だ。

戦場では「貴様に明日はない」とか言っていた口で、次の日には「今日はピクニックだぴょん」とか平気で言ったりする。

その場で突っ伏してひたすら地面に視線を固定しているエメスの苦悩を、将軍が察することはない。

「エメス!？」

「…どうしてこうなった…」

「立て! 来るぞ」

木漏れ日が枝葉の影を落とすように、黒騎士の召喚は瞬く間に成立する。

「光の速さ」という概念が、この時代には無いから、将軍は「影姫」と呼ばれている。

この世の生物が光を情報の媒体として選び、進化した以上、それを上回るものが、たとえ実在したとしてもだ、認識はできない。

それは、人間の心を加工されて生まれた魔霊とて例外ではない。

如何にスケルトンが技を極めようと、将軍の召喚速度を超えるスピードで剣を振り回すことはできない。

だからこの怖るべき剣士は、召喚主たる将軍の意識の間隙を縫って反撃するのだ。

わずかひと振り、召喚された黒騎士たちの手元から剣が弾き飛ば

される。

技術というものに限界はないかのようにだった。

独特の歩法に翻弄されて、黒騎士たちの剣は空を切る。

まるで魔法のようだ。

將軍の隣で、立ち直ったエメスが齒噛みした。

（あたしを頼れよ、將軍。劍聖が何だっただけだ：あたしなら勝てる。利用できるものは何でも利用する。そうだろ。あんたはそれでいい。）

人間は弱い。ちょっとした怪我で死ぬし、そうでなくとも百年も経てば寿命だ。

だからエメスは、將軍を見ていると心配でぞわぞわする。無意識のうちに、一歩踏み出したのはそのためだ。

それを、將軍が見咎めた。

「エメス」

エメスではスケルトンには勝てない。

將軍はそう考えている。

負けるとは言わないが、エメスの攻撃が、あの骸骨剣士を捉えることとはないだろう。

だから、將軍はエメスを自分の傍らに配置しておきたかった。彼女の変身能力は、強力な武器であるが、それだけではなく、むしろ強力な武器「にもなる」点を、將軍は高く評価している。

おそらく最上位の権能であるとさえ。

元帥の声に、エメスは渋々と引き下がる。

それでも自分は負けなと思うっていたから、鬱憤を晴らす相手が必要だった。

「魔術師！ 何やってんだ、さつさと撃て！ あたしが仕留める」

わざわざバラしてどうする、と思ったマウは、距離を隔てた庭園の片隅で、樹上に隠れ潜んでいた。

将軍の指示だ。

近距離戦ではスケルトンには勝てない。

勝機があるとすれば、遠距離からの狙撃しかない。

枝と枝に足を掛けて器用に立ち、庭園の中央付近に刀印を向けているマウを、人面樹たちが興味深そうに見ていた。

肩には、発現したアプリカが既にとまっている。

マウが、同世代の魔術師と戦ってきて今日まで無敗でいられたのは、幾つかの切り札を隠し持っているからだ。

使い魔の無音発現は、そのひとつだった。

身内に甘い彼だから、一度心を許した相手には、自分にとっての生命線であるそれらを躊躇いなく晒してしまう。

何度が騙されて痛い目に遭っているのに、それでも人と人は手を取り合えると心のどこかで信じているからだ。

だが、アプリカの考えは異なっていた。

術者の分身である筈の使い魔が優先するのは、主人の身の安全だ。まったく無関係な戦いで手の内を晒してどうするのか。

だからアプリカは、使い魔なしでも遠距離狙撃できるよう、マウの魔眼を「改造」した。

より早く、より深く。

「魔法」という、ひとつの究極に到達したアプリカには、それが可能だった。

より広く、より深く。

マウの魔眼が、彼自身にさえ理解できない理屈で拡張した。

剥き出しの眼球を、その隣に新しく浮かび上がった歯車と滑車が連動し、マウの視界を深く鋭く押し広げた。

魔眼のカスタマイズは、高等魔術師にとってさして驚くべきことではない。

「定跡」と呼ばれる魔力の多くは、極めれば大きな役割を果たすからだ。

自らの魔眼に起こった変化に、マウは気が付かなかった。

ただ、いつもより遠隔視が鮮明で、スケルトンの動きが手に取るように分かった。

まるで、実際にあの場にいるかのようにだった。
調子がいいと思った。

彼は、エメスの求めに応じるように魔力の引き金を絞った。

第五十八話、異端

「作戦は、こうだ」

旅の同行にエメスを加えた一向は、城内に足を踏み入れる前にミーティングをしていた。

中庭に集まるよう告げたスケルトンの真意は、マウには分からなかったが、師が弟子に求めるものは一つしかなかったから、将軍が取るべき行動は決まっていた。

黒騎士という権能を（しかも自分から望んで）与えられておきながら、将軍は模擬戦等で師に勝てた試しがない。

黒騎士が弱い訳ではない。

将軍の指揮が拙いという訳でもない。

スケルトンの技量が、それらを凌駕しているのだ。

将軍は、スケルトンに戦術のイロハを叩き込まれ、如何なる戦況にも即応できるよう鍛え上げられている。

だから、トップクラスの魔霊であるエメスを共に加え、お伽話の住人であった魔術師が傘下に降った、この機を逃す道理はなかった。

両膝を揃えてしゃがみ込んだ将軍が、地面に描いた庭園の簡単な見取り図にばんぽんと小石を配置していく。

…ついでに、さも真剣な面持ちで話を聞いているような風情でこち

らの膝小僧を注視しているエロ魔術師に、如何に自分が優秀な指揮官であるかを知らしめるチャンスだった。

他者に厳しく自分に甘い將軍は、自己顯示欲の強い少女だ。

何だか、普段、微妙に上から目線というか、子供扱いされているような気がしているから尚更だった。

何者かに呼ばれて振り返り、虚空に向けて「なら、僕の傍に居ろ」と独りごちた哀れな男の袖を引っ張り、座らせる。

將軍は念押しした。

「いいか。まず、わたしとエメスで足止めをする」

言われて、マウは幾許か思案したものの、やがて頷いた。

「…そうだな。おれとエメス、あるいは君とじゃあ、連携は難しい」

マウは認めた。情情的には自分が足止めを買って出たいところだったが、あの老剣士は疾すぎる。

魔眼で追えないということは、意識の間隙を突かれているということだ。

どれほどの死線を潜れば、あの境地に達することができるのか、それすら想像の範疇を超えている。

小石の配置にさっと目を通し、微かに眉をしかめたマウに、將軍はこほんとひとつ咳払いした。

この手の話になると、マウは食い付きがいい。趣味が合うのだとしたら、少し照れくさかった。

引つ張られて伸びた袖を腕まくりをするマウに、彼女は続ける。

「それ、癖か？ 見苦しいからやめろ。…で、続ける。師匠は、たぶん奇襲してくる。正面からかどうかは分からない。だから…」

將軍は、マウの癖をあまり好ましく思っていない。

身の丈に合う、という言葉があるように、装具には気を遣うべきだと考えているからだ。？

言われて初めて気付いたというように、マウの視線が宙を泳ぎ、行き場をなくした手が空を掻いた。

そして結局、腕まくりした。

將軍はかちんと来た。

「馬鹿にしてるのか？ やめろと言ったぞ」

「いきなり言われても、すぐには治せないよ。据わりが悪くて」

「ぶかぶかの服を着てるからだ。お前、わたしと大して背が違わないだろ」

「これから伸びるよ。まだ十五なんだ」

マウは、さり気なくサバを読んだ。

將軍の年齢を聞き知っていたから、年下だとバレたら何を言われるか分からないと思ったのだ。

こういう下らない嘘を、マウはよく吐く。

しかし將軍は、彼の年齢に頓着しなかった。
育った環境が違うのだ。当然、価値観も異なる。

「いいや、伸びない。お前は、ちびのままだ。そういう顔をしてる」

「顔!？」

容貌と身長に関連性について、彼女は一家言を持っているらしかった。

マウはショックを受けた。

のちに成人男性の平均程度までは成長するのだが、この遣り取りがなければ、平均を多少は上回ったかもしれない。

「……」

傍らで二人の問答を眺めていたエメスの視線が痛かったから、將軍は慌てて居住まいを正した。

「と、とにかく…奇襲に対応できるよう、エメスはわたしのカバーに回ってもらう。師匠は、気配を読むことに長けているから、蛇の陣で行くぞ」

「何だそれ」

尋ねたのは、マウではなくエメスだった。

將軍は、その場の気分で気に入った戦術に命名しておきながら、あとで勝手に名称を変更するから、本人にしか分からないのだ。

何となくニュアンスは伝わるものの、念のためにエメスは尋ねた。

將軍は、傷付いたような表情をした。

「知らないのか？」

「…いや、分かるけど。あたしが、あんたに引っ付くやつでしょ。変装までしたのに、雨が降ってきて、はわわってなったやつ」

「…うむ。綿密な調査と情報操作が、通り雨ひとつでおじやんだ。あれは…そう、はわわだったな…」

はわわだったらしい。

マウは、上空を覆いつつある分厚い雲を眺めた。

同じ惨劇が繰り返されなければいいが。それだけが気掛かりだった。

「…二人が足止めしてる間に、おれは遠距離から狙撃すればいいのか？」

將軍は何故か得意げだった。

「そう。そこが肝だ。師匠の剣技は桁が違う。だが、やはり剣士だ。剣士が嫌がることは、師匠にとっても厄介なんだ。

当たり前のことだから、まったくの不意打ちにはならないだろうが、

基本は押さえておきたい」

將軍の戦術は、基本に忠実だ。

人間で言うところの、歴史に名を残すタイプの軍師ではない。

だが、魔霊という、人間よりも強大な兵士を運用する上では、複雑にして緻密な奸計よりも、余計な支枝を削ぎ落とした策謀が有効なのかもしれない。

「期待しているぞ、じゅちゅし」

そう言つて、將軍は締め括った。

最後に「術士」と言おうとして噛んだが、辛うじて言い切ったから、体裁は保てた筈だと信じたかった。

マウは気付いていないようなので、ほっとした。

だが、もちろんマウは気付いていたし、名前で呼ぶのに抵抗があるのなら、何故「魔術師」ではいけないのかと、わざわざ言いにくい呼び名を使わなくてもいいのと思ったものの、口には出さずに頷いた。

代わりに、指を三本立てて突き出した。

「...?」

それが何を意味するのか分からなかったから、將軍はとりあえずマウの中指を指先でつまんだ。

「...いや、そうじゃなくて...」

マウは言い淀んだが、今回に関して言えば察しろという方が無理だ。彼は反省した。

長年の習性で、マウは女の子に対して甘い面がある。悪い言い方をすれば、子供扱いをしてしまうくらいがあった。

その彼が、將軍に対して謎掛けのような、はつきりしない態度をとった。

心の中でアプリカが、「彼女を信頼するな」と主張していたからだ。

マウは、魔術師の社会において異端の存在だった。

魔力の優劣を絶対的な価値観とする魔術師たちに対して懐疑的だったし、使い魔を道具としてしか扱わない者には嫌悪感すら抱いていた。

自分を正当化することに慣れきった魔術師は、己の非を決して認めようとはしないから、マウが自分を曲げない限りは必然的に衝突が起こる。

その頃、マウは進学クラスに在籍していた。

進学クラスと言うだけあり、クラスメイトたちは高等魔術師の卵ばかりだ。

彼女たちは将来を約束された人間だったから、マウを変なやつだとは認めても、彼と決定的な対立を迎えることはなかった。

だからマウは、同年代の魔術師と戦っても負けたことがない。

彼の使い魔が、やはり飛び抜けた存在だったからだ。

近距離戦では誰も敵わないとすら噂されていたから、彼を利用しようとする者も居た。

そのたびにアプリカは、主人に信じるなと警告した。

言ってみればエリートの一員で、しかも使い魔の助けなしでは平凡な素質しか持たないマウを妬む者は多い。

望んで苦境に立とうとする人間は少ない。

アプリカの言うことは、いつだって正しかった。

それなのにマウは、アプリカの提言を無視し続けた。

魔力の優劣に拘ることは虚しいことだと、支え合って生きることが恥ではないと叫び続けていた、当の本人だったからだ。

今、このときもそうだ。

將軍の指先の体温に絆されて、というのはアプリカの推測だが、マウは密かに打ち明けた。

「三度だ」

「…？」

マウの指をつまんだまま、將軍は首を傾げた。
それに合わせて、幼女のような癖っ毛を残す金髪が、肩を滑ってさ

らりと揺れた。

マウは頷いた。何に対して納得したのか、はたまた同意したのかは彼自身にしか分からないだろう。

しかし使い魔は術者の分身だから、きっとアプリカには筒抜けだった。

確固とした信念を持ち、人間の外面よりも内面を重視している筈の主人は、それなのに異性に甘いし、女の子のちょっとした仕草を見て癒されるのだ。

「使い魔は、術者の魔力を限界まで解放する」

マウは繰り返した。

「限界までだ。」

だから、使い魔を発現したばかりの…訓練を十分に積んでいない魔術師は、最大威力の魔力を一度しか撃てない」

逆に言えば、一定以上の訓練を積んだ魔術師なら、自分自身で制御できる魔力の割合が増えるため、二度は撃てる。

「魔力は体力を食う。短期間で、魔術師が連発できる最大魔力は二度が限度なんだ」

マウにしても、条件は同じ筈だった。

どれだけ魔力を精密にコントロールできても、人間が不随意筋を自分の意思で止めることができないように、制御し得る総量には限界がある。

だが、何事にも例外はある。

マウだ。

「何故なのか？ おれにも分からない。おれより優秀な魔術師は幾らでもいる。でも、おれだけなんだよな、

…三度撃てるの」

第五十九話、魔獣

狭い所が好い。

適度な湿気が必要だ。

暗所であれば尚好い。

しかし、偶には日の光を浴びねば立ち行かぬ。
気分も滅入るし、日干しがてら庭へ出てみた。

おや、と思った。

普段、庭で暴れている影どもの姿が見えない。
元帥に召喚でもされたか。

まだ幼年ということもあり、彼女の権能には謎が多い。

魔霊の専売である権能を人間が持つなど、当然だが、かつて無かつたことだからだ。

一時の安寧を得た面樹どもが、寄り集まって情報の共有に励んでいた。

彼ら人面樹は、結果的にはあるが、黒騎士の雛形になった魔霊だ。

「根」とは別に「本体」が存在し、本体を叩かれない限り、根が枯れることはない。

木々を変質せしめ分身と成すため、古きより王城を守護してきた樹海は、今や人面樹どもの巣窟と化していた。

枝で土壌を削って下達の文書を遣り取りするので、覗き込んで確認することもできた。

魔術師が、元帥のために魔剣をひと振り鍛えて贈るのだという。

好いことだと思った。

今、元帥が用いている剣は、軽いが切れないのだと聞いたことがある。

それでは自衛には心許ないと常々思っていた。

結構なことだ。

しかし、まだ赤子だった彼女を一人で歩けるまで育てたのは、面樹どもである。

どう思つかと尋ねると、面樹どもは、影どもが無能だから剣が必要になったのではないかと迂遠な表現で伝えてきた。

…此奴らは、一向に仲違いを正そうとしない。

同じ魔霊なのだから仲良くしろと何度か言い渡したのだが、諍いの原因が元帥の親権とあって、なかなか解消の兆しが見えないのだ。

魔術師も骨を折ってくれているようだが…

同意を求めてくる面樹どもを振り払い、重い身体をずりずりと引き摺って進む。

庭の中央には優美なこしらえの噴水が設けてあり、一帯は樹々が刈

り取られているため、日当たりが良いのだ。

支道を抜けた先、石畳が敷き詰められた広場では、姫君らが珍しく姉妹揃って、噴水の縁に腰掛けていた。

何せこの巨体だ、こちらに気付いた姉姫が、長い睫毛を瞬かせて振り向き、口許を綻ばせると、軽やかに片手を振った。

以前は仏頂面ばかりだった少女が、美しく成長したものだ感慨深くなる。

その傍らで、姉に遅れてぺこりと会釈した妹姫は、やはり昔の姉姫と似ていると気付くも、当時の彼女ほど鬱屈したものは感じない。

姉姫が、守っているからだ。

自分もそう在りたいと思う。

魔霊たちは、自分にとって弟妹のようなものだ。

あまり近付いて傷付けでもしたらと思うとぞっとするから、少し離れた位置で身体を休める。

姉姫は察しが良い。

「もう少し寄ったら？ あなた、溶かさないことだって出来るんだから」

つまり、溶かすことも出来る。それが厭なのだ。

お構いなくと手文字で伝えると、姉姫は仕方ないといった様子で苦

笑し、けれど直ぐに何かを思い付いて悪戯のように笑った。

「おやつさんは、骨つ子と仲が良かったよね」

スケルトンのことだ。

仲が良い…と言うより、戦友だ。

女王陛下に仕えて、長い…本当に長い歳月を共に過ごしてきた。

先に逝ってしまった戦友たちのことを想う。

人間が憎いと思ったこともある。

だが、憎しみは際限の無い迷路のようなものだ。

死に行く者たちの気持ちを考えるなら、敵は尊敬できた方がいい。
そう考えるようになった。

姉姫が、目を細めて手招きをする。

「そこからじゃ見えないよ。おいで」

王族は、魔霊を生み出し支配する力を持っている。

彼女たちの声には、魔霊を縛り従わせる、抗い難い霊力がある。

渋谷と姉姫の脇を陣取ると、妹姫が小さな手を伸ばして自分に触れようとしてきた。

びびった。

しかし、寸での所で姉姫が制止してくれたので事なきを得る。

「まあ待て、妹よ。おやつさんは接触恐怖症なんだ。人の嫌がることをやってはいかん」

が、妹姫は強情だった。

「そんなこと言ったら、いつまで経っても治らないでしょ。大人なんだから、自分の身体のことくらい、自分できちんとしないと駄目でしょ」

しかも正論だった。姉に似て利発な少女である。

ぐうの音も出ない。

結局の所、自身を完璧に制御できたなら何ら問題無い筈だからだ。

しかし姉姫には、また別の見解があるようだった。

「絶対ということとは、この世にはない。どうしてもと言っなら、マウに頼みなさい」

「どうして？」と首を傾げる妹に、姉姫は告げた。

「絶対に許可しないからだ」

……。

広場の向奥では、盟友のスケルトンが黒騎士たちに剣の手解きをしているようだった。

…元帥も居るのだろうか？　ここからでは見えないが、黒騎士たちの陣形から、そうと窺える。

「隠れて見えないけど、エメスもいるよ」

じっと見詰めていると、姉姫が補足してくれた。

「エメスで自分を覆って、初撃をいなしてから、至近距離から黒騎士で包囲襲撃。エメスは待機。

包囲したのは、たぶんマウの狙撃を待ってるからかな。だとすれば、マウは罠で本命はエメス…」

戦術のことは、よく分らない。

自分が考えるべきことではないからだ。

進むも退くも億劫なこの身では、下手な考え休むに似たりだ。

だから、姉姫の予見に反論するのは自分ではなく、その妹で良い。

「でも姉様。マウは、近くからでないと力を発揮できなくってよ」

その声が、どこか誇らしげであった。

きつと姉に褒めて貰いたいのだろう。

しかし妹の背伸びは、姉にとって面白くないのが、この姉妹の悲劇である。

「…というのは見せ掛けで、実は近くに潜んでいて魔力で姿を消してるんだ。これ、わたしの発案ね。おちびは他のにしなさい」

実に大人げない対応である。

褒めて貰えなかった妹姫は、頬を膨らませて、そっぽを向いた。

「知らないなら知らないって言えばいいのに……」

幼稚な挑発に、姉姫はしたり顔で鼻を鳴らした。

「お姉ちゃんは、何でも知ってます」

元来、姉姫は賢い少女である。

……が、あちらで剣を振っている友人によれば、それも虚栄であるという。

魔霊たちの総意は、友人に味方している。

元帥と手を組んで、奇行に花を咲かせるからだ。

つまり元帥も、姉妹で言うなら、それも失礼な話だろうが、姉寄りの人間だと思われる。

悲しいが、それは事実だ。

元帥は、あまり物事を深く考えないし、ときどき魂消るような失策をやらかす。

この国に魔術師が来て安堵しているのは、自分だけではない筈だ。

魔術師というのは便利な生き物で、大抵の厄介事を片付けてくれる。

特に今代の魔術師は、言われずとも勝手にてきぱきと働くので、非常に重宝されていた。

友人も…喜んでいた。

「魔術師」が帝国の軍門に降った…これが何を意味するのか…果たして人間たちは気付いているのだろうか？

女王陛下は…どう、だろうか…

第六十話、対峙

最大魔力の解放は二度までだ。

「固有結界」もしくは「固定魔法」と呼ばれる例外を除けば、これは絶対と言っている。

だから、もしもアプリカが諾々と従っていたなら、マウの勝ちだった。

百戦錬磨だからこそ、スケルトンは無意識の内に「ありえない選択肢」を除外する。

だが、例えば遠くから、高精度の魔力を撃つというなら、これは予想の圏内だ。

五感を歪めて、遠くのを近いと誤認する…そうした技の持ち主と、かつて敵対したことがあるからだ。

もしかしたら…程度の考えだった。

何しろマウは、スケルトンの目の前で、既に二度、使い魔を行使している。

幾許か体力が回復していたとしても、不得手な遠距離狙撃を達成するだけの余裕は無いと踏んでいた。

手足に重い枷を嵌められたような感覚に愕然としたのは、それが完全な不意打ちだったから…だけではない。

現代の魔術師に、本来あつてはならない技術だからだ。

これは、かつて存在した、「魔術師ではない人間が」「魔術師を倒すため」の技だ。

目まぐるしく動いていた師が、途端に失速したのを、将軍は見逃さなかった。

だが、事前の打ち合わせ通りであつたにも拘らず、彼女は呆氣に取られて逡巡した。

戦う術をスケルトンに教わって育つた将軍は、師の強さを心のどこかで神聖視していた。

本当に魔力が通じるとは思っていなかったのだ。

ぞくりとした。

「今日の勝利」と「明日の敗北」は紙一重だった。

将軍は魔霊に育てられた人間だから、「人間」という定義に誰よりも拘る。

マウは人間だ。

人間だから…

いつか、帝国に牙を剥くかもしれない。

一度は結論を出した筈なのに、目の前で進行する現実には、何度でも問い掛けてくる。試されているかのようだ。

それでも信じようと思ったから、反駁を瞬時に押しやることができた。

戦局は常に流動的だ。

一度は取りこぼした勝機を、二度目も拾うことだってある。

もちろん、逆もある。

スケルトンは、歴戦の剣士だ。

その戦歴は凄まじく、光弾を全包围に音速で撃ち出す魔獣にさえ打ち勝ったことがある。

討伐を命じたのは、女王だ。

大した権能を持たない筈の量産型の魔獣が、戯れに作った「最強を目指して設計された魔獣」を打ち倒したから、どこまでやれるのかと興味を抱いた。

負ければそれまでだと、ただ剣を上手く振れるだけの魔霊など不要であると考えたのだ。

…積み上げたブロックを何本まで抜いても倒さずにいられるだろうか？

そんなスリルを愉しんだ。

…同胞が一人帰らなくなり、また一人、また一人…

積み木のように

倒れていく

女王が憎くないのかと…とある魔獣は言った。

憎くはないと答えた。

それが騎士だと。

そして今、スケルトンと呼ばれる魔霊の最後の生き残りが、魔力を斬るのを、マウは見た。

（あるのか！？ そんな魔力の捉え方が…）

あるのだ。

先刻、スケルトンは魔力を「扉」に例えた。

一方通行ではない…

マウの魔力は幻術を基にしている。

だから、もしもスケルトンが魔力を「斬れる」という意思に基づき行動し、それをマウが否定しきれなかったなら、マウの魔力は斬れる。

「影踏みの瑕」と原理は同じだ。

だが、それすら、マウは半信半疑だった。

無意識の領域を完全にコントロールできる生物など、本来存在しな

いからだ。

だが、これではつきりした。
自らの肉体を骨格や筋力ではなく、イメージで支える魔霊には、それが出来るのだ。

人間と同じように考えていては勝てない。

乱暴な言い方になるし、正確でもないだろうが、こう考えるべきだった。

魔霊は「女王の魔力」だ。

だから、魔力の存在を肯定する魔術師では、魔霊に決定的なダメージを与えられない。

魔術、という単語が頭の奥に浮かんた。

使い魔は術者の分身だから、内心で遣り取りしていると、気付かない内に自分との対話になる。

魔術師が、自分たちの力を「魔力」と呼ぶのは、「力」と「術」を分離して考えなければならぬからだ。

だが、「魔力」を制御する理屈を「魔術」とは呼ばない。

何故なら、「魔術」と呼ぶべきものが、他にあるからではないのか？
後戻りできない道を歩んでいるような感覚があった。

実際問題として、やたらと「よく見え」る。

魔力を断ち切ったスケルトンが、一拍遅れて殺到した黒騎士たちを剣一つでいなしているのも、片膝を付いた將軍が地面に手を当てていて太ももが、いや少し離れたところで何故か悔しそうな顔をしている姉姫のスカートが際どい角度を、

「くっ…！」

マウは、眉をしかめて片目をまぶたの上から押さえた。

彼は今更ながら気付いたのだ。

調子がいいどころの話ではない。

…絶好調だった。

「普段と変わらない様子」の魔眼が、自分の意思に反してぎよろぎよろと動く。

エメスはともかくとして、妹姫に反応を示したなら、これから先どうやって生きていけばいいのか分からなくなる気がした。

無言で見詰めてくる人面樹たちに責められているような気がして、訳もなく申し訳なくなる。

魔眼を仕舞えばいいと思い付いたのに、その思い付きの方を大切に仕舞い込んでしまったから、尚更だった。

だから、今は戦うべきだった。

將軍のことが心配だったから、影を踏めば彼女の傍らに立てる。

マウは、影踏みをほぼ完璧に制御できる。

戦っている女の子がいて、その近くに自分が居ないという選択肢は、マウにはない。

彼の参戦に、將軍は渋い顔をした。

傍目にも、マウの魔眼が気持ち悪いことになっていたからだ。

（歯車が回転し、滑車が上下するたびに）魔眼が血走り、瞳孔が収縮を繰り返している。

視線を忙しく左右に往復しているのもマイナスポイントに挙げられるだろう。

「…お前、それ仕舞え」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ！」

マウは一喝した。今の魔眼なら、スケルトンの動きを追えると思い付いたからだ。

將軍の隣にはエメスが控えており、その本性が巨大な泥人形だとしても、今は將軍の姿を模しているから、ひと粒で二度おいしかった。

意識せずとも、姉姫の隣にスライムが佇んでいるのが見えた。

厚い雲が頭上で渦を巻いている。

雨でも降るうものなら、もう立ち上がれないかもしれないと、自分の中の冷静な部分が告げた。
白い衣装は水に濡れると透けるからだ。

マウは、鋭く舌打ちした。

「時間との戦いになるな」

「…ん？」

意味が分からなかったので、將軍は首を傾げた。

マウは、スケルトンの動きをじっと観察している。

背後で、エメスが將軍と同じ仕草で首を傾げていた。
お前らは何が目的なんだと叫びたかった。

「突破されるのも時間の問題だろ。何か策でも？」

「ある」

將軍は断言した。

だが、マウは適当に誤魔化しただけなので、直前の自分の台詞さえ記憶からこぼれ落ちて、即答されても何のことか分からなかった。

「…え？」

「…ん？」

とっさに振り返ると、將軍とエメスが揃って同じタイミングで首を傾げた。

マウは、まぶたの上から片目を揉みほぐした。

「…いや、うん…続けて」

もう話を合わせるしかなかった。

なのに將軍は無情にも首を振る。

「説明している時間はない」

現実には非情で、常にマウを追い立てるかのようだった。

何が「ある」のだろうか…マウは模索しながら戦わねばならない。

《相談は済んだか？》

最後まで立っていた黒騎士を打ち倒したスケルトンが、調子を確認するように虚空をひとなぎして、訊いてきた。

マウは、いつでも一人で戦ってきた。

弱みを見せたら負けだと自分に言い聞かせてきたから、こんなときでも強がる。

「随分と余裕だな。それ、あんたら魔霊の悪い癖だぜ？」

《ほざけ。ろくに魔力も使えないのだろう》

魔術師としてのマウに疑念を抱いているスケルトンは、解釈次第で核心を突くかもしれない言葉で探りを入れた。

だが、マウに自覚はないため、それは空振りに終わる。

「どうかな？　もしかしたら、あんたはおれが魔力を使ったのを見たかもしれないな」

はったりだ。さすがに通用するとは思えないが、どちらにせよ言うてみて損はない。

思ったよりも消耗はしていないし、思考もクリアだが、他者に魔力で干渉できるほどの余力はなさそうだった。

体力の回復に要する時間は、その日の体調によって変わる。

感情が高ぶると疲労に対して鈍感になるから、はつきりしたところからは分らなかった。

最大魔力の解放は三度が限度で、本当なら先程の魔力で昏倒していてもおかしくはないのだ。

術者であるマウは、アプリカの内部工作に違和感を覚えない。

内々で処理されるため、記憶は混同するし、あとは時間が解決してくれる。

埒が明かないと感じたスケルトンは、単刀直入に言う。

《魔力が変質したな。何をした？》

「あとで、こっそり教えてあげる」

他者に指摘されるとぼろが出るから、アプリカがせつせと記憶を抽送し、魔眼を強化したのだとマウに自覚させる。

もちろん、わざわざここで言う必要はなかった。

自覚が芽生えれば、制御も出来るようになる。

魔眼の活動を鎮めて、一部の駆動系は認識できないため、アプリカに託した。

この新技をスーパー魔眼とアプリカは名付けたようだった。とても他人には聞かせられないネーミングセンスだった。

ちなみに、空間指定の物理干渉を、アプリカは「マジカルハンマー」と呼ぶ。どうしよう。

…いや、おかしいのは自分のセンスなのかもしれない。

使い魔を溺愛しているマウは、ときどき無謀な挑戦をして「今時」の調整を図るのだ。

「…まあ、スーパー魔眼ってとこだな」

「ねーよ」

エメスが即答してくれたので、自分は間違っていないと再認識できた。

何事も経験である。

第六十一話、本質

「来い！」

氣勢を上げてスケルトンの前に立ちはだかるマウだが、実は無意味な行動だった。

彼の役割はスケルトンの注意を一瞬でも逸らすことにあり、それ以上の働きは求められていないからだ。

將軍が立案した作戦の要になるのは、やはりエメスであり、計画の全貌をマウは知らない。

エメスの正体を見抜ける筈の彼を、どこまで欺けるか。問題はそこだ。

にわかに怪しくなってきた雲行きを、エメスは険しい表情で眺める。

彼女の弱点は「水」だ。

雨が降り始める前に決着を付けたかった。

「…おい、魔術師。邪魔だ。お前、見学してろ」

マウは無視した。

彼女は自分に不利益しか齎さない。
命令を聞く義理はなかった。

でも邪魔者扱いされて不安になったから、ちらりと肩越しに將軍の顔を窺った。

彼女は地面に片膝を付いたまま、師の動向を見逃すまいと集中していた。

マウの視線に気付き、「ん？」と首を傾げる。

マウは、勝ち誇った顔でエメスを一瞥して、鼻を鳴らした。

学生時代はクラスメイトたちに蔑ろにされていたから、マウの主張にも熱が入る。

「將軍は、そんなことないって言ってるぞ」

「いいように解釈すんな！ 雨が降ったら、あたしは力が出ないんだ。どけ！」

「……」

マウは、縋るような目を將軍に向ける。

新天地での生活に全く不安を覚えないほど鈍感な人間ではないのだ。

何かの役に立ちたかった。

誰かの助けになれる人間になりたいと、マウはずっと願っている。

努力は報われると信じたい。

將軍が、こくりと頷き、端的に告げた。

「退場」

「え？ なに？ 聞こえなかった、もう一度」

見苦しい抵抗を続けるマウを、將軍は見えていなかった。

気まずそうに視線を逸らされて、駄々をこねるほど、マウは自分に自信を持てない。

向奥の観客たちに視線を転じると、妹姫が駄目押しをするように手招きしていた。

「……」

とぼとぼと戦列を離れたマウを、スライムが出迎えて労う。

一層みじめになった。

マウはスライムを撫でてやってから、妹姫の隣に座った。

すると妹姫が、呆然と呟いた。

「触った」

「え！？」

過敏な反応を示したマウに、姉姫が「ああ……」と納得の声を上げた。

「ときどき、普通に女の子の頭を撫でたりするよね……」

「そんなことないよ！」

マウは否定した。

だが、事実だった。

説得力に欠けていることを自覚していたから、本当に必要なのは弁明の機会だった。

「…その言い方だと、誤解を招くでしょ？ 女の子だからって訳じゃないから」

マウは必死だった。

「子供はね、大切にしてあげないと。大人がちゃんと手を握っててあげないと…」

瞳を覗き込んでくるマウを、妹姫はざっくりと切り捨てた。

「そんな話してない。なんでそっちに持って行こうとするの」

何故かと問われれば、疚しいことがあるからだった。

「でも、おれ触ってないよね？」

彼は、どうしてもそこをはっきりさせたいようだった。

妹姫は…

「……」

彼の勘違いを正す義務は、自分には無いのだと気付いてしまった。

すっと目を細めた妹姫の雰囲気が変わった。

そこに拭い難い女王の面影を見て、マウは心なし身を引く。

「あの…」

妹姫は、今年で七つになる。

まだ幼い姫君の将来に期待しているから、マウは彼女と接するとき、本音を語ってしまうことが多い。

狭いコミュニティの中で育ち、自分を曲げずに生きてきたから、マウの「怒り」は方向性にぶれがなく、質量ともに申し分がない。

人間の絶望を糧とする王族から見ると、それはとてもとても美味しそうなものだ。

だからマウは、迂闊に信念めいたことを口にすると、妹姫から無言で見詰められる。

「……」

そこに姉姫も無言で加わってくると、マウは家畜たちの気持ちがかかるような気がした。

スライムの横に座ると心が和むのは、きっと自己保存の本能が満たされるからだった。

この魔霊の長老種は、触れたものを瞬時に融解してしまう、世にも恐ろしい特性をしているが、マウにはあまり関係がなかった。

スライムは多者との接触を恐れるが、心の奥底では触れ合いを求めているから、うっかり溶かしてしまっても影を畳めばそれで済む魔術師なら、側にいても緊張せずにいられる。

地べたに座り込んだ二人は、肩を寄せ合って將軍の奮闘を見守るのだ。

將軍には、秘策があった。

今日この日のために、ずっと練習してきたのだ。

ずっと、ずっと考えてきた。

人間の…自分の「本質」とは何であろうかと。

魔霊の権能は発展させることができる。

だが、それは自分の特性を、本質を理解していることが大前提だ。

例えば、エメスは完成した権能を持つ稀有な存在だ。

そんな彼女でも、「渴き」という属性から離れた権能を振りかざすことは叶わない。

人間である將軍には、「属性」という概念が、おそらく無い。

黒騎士たちの権能が一向に発展しないのは、属性を持たない本体に影響されている所為でもある。

では、どうするか。

マウという「人間」と出会ったことで、将軍はその答えを得た気がした。

人間の本質を決めるのは、自分自身だ。

第六十二話、決着

そして。

「どうしてこうなった…」

自室にて、マウがうめいた。

ベッドに座り、片腕を包帯で肩から吊っていた。
軽度の捻挫らしい。

よりによって利き腕だったため、スライムが手ずから食事の世話をしてくれている。

個人的には姉姫にお願いしたいところだったが、將軍の許可が降りなかった。

將軍に頼まなかったのは、夕飯のメニューが熱々のシチューで、わざわざ火傷の危険を冒すこともあるまいと考えたからである。

責任を感じているらしい將軍は、小刻みに震える手でスプーンを差し出しているスライムと、雛鳥のようについでにマウを見比べてはそわそわしている。

拳動が不審な彼女に、妹姫がずばりと言い放つ。

「謝ったら？」

「う…」

痛いところを突かれて、将軍が気まずそうに身じろぎした。

隣に座っている姉姪が、急ぎ立てるように将軍の脇腹を肘で突ついた。

「謝っちゃえ、謝っちゃえ」

「うっっ…」

幼馴染みにまで囃し立てられた将軍は、唇を尖らせて恨めしげにマウを見る。

こうまで彼女が洩るのは、マウが怪我をしたのは彼が手抜きをした所為でもあると思っているからだ。

影踏みという魔力を簡単に言い表すなら、「あとだしじゃんけん」に近い。

たとえ怪我をしたとしても、影を畳んでしまえば「なかったこと」に出来るからだ。

ところが実は、マウの影踏みには、本人も自覚している致命的な弱点があった。

それは、他者を庇った場合には連続して影を踏めないという点である。

情に脆く、感情に正直なマウは、主張がはっきりしていることもあり影踏みに迷いがない。

迷いが無いから、出たとこ勝負で退路を失うのだ。

相手がチョコキを出して、グーを出せば勝てると分かっている、後ろで見ているちよつと間抜けな女の子が救われるなら、パーを出して自分の負けでいい。

それがマウの生き方だ。

だが、そんなことをわざわざここで打ち明ける必要はないし、何かと格好付けたい年頃だったから、マウは憚然と言う。

「…悪かったな。魔力を連発して疲れてたんだよ。大体…」

と言つて、ちらりと姉妹に視線を遣る。

視線とは別に、將軍に向けて言う。溜息混じりに、

「…君、剣を使えないって。騎士なのに…」

そのことを意図的に隠していた姉妹が、「にこっ」と笑って誤魔化した。

同罪の妹姫も姉に習つて、ふんわりと意味なく微笑んだ。

…ここで許してしまうから駄目なのだと、マウはこれまでの半生を振り返って自戒した。

心の中でアプリカが応援してくれていた。

だが、速やかに鎮火された怒りを再燃するためには、何かしらの火種が必要だった。

「……」

何だか期待の眼差しを寄せられて、将軍がぎょっとした。

少年の魔眼が前触れなく発現していたからだ。

とっさに片目を押さえたマウが、部屋の出入り口に目を向けると、ちょうどドアが閉まったところだった。

去り際にスケルトンが微かに笑っていた気がした。

久方振りの敗戦に思うところがあったのだろうか。

…そう、結果から言うと、マウたちは勝利を収めた。

具体的な経緯は、こうだ。

まず跪いた将軍が、複数の黒騎士を顕現した。かに見えた。

が、実はそれはエメスが作り出した砂の彫像だった。

スケルトンは騙された振りをした。

彼は、黒騎士の本体である少女が応戦せざるを得ない極限状態を作り上げようとしていたからだ。

マウの魔力に囚われた一瞬の隙に、将軍とエメスは入れ替わったに違いない。

だが、そうではなかった。

將軍が真に欲したのは、「入れ替わることも出来たという状況」だった。

斬り伏せた「黒騎士」が砂と化して崩れ落ちた瞬間、スケルトンは驚いた振りをした。

將軍に名を呼ばれて、待つてましたとばかりにエメスが飛び出した。迫り来る「將軍」と、足元を取り巻く砂、そして様々な要素から、スケルトンは畏に嵌められたと察した。

先行して殺到した「黒騎士」が内面から爆ぜて更なる異形と化した。複数の端末を並行して操るといふ面に関してさえ、分隊規模であれば、完成された権能を持つエメスは將軍の上に行く。

このとき、スケルトンは初めて「本気」を出した。

動きの緩急で敵を惑わせるのがスケルトンの本領であると、マウは考えていた。

だが、そうではなかった。

極限まで無駄を省き、最低限の手数で最大の効率を叩き出すのが、スケルトンの本来のスタイルだった。

瞬く間に殲滅された砂人形に、それを為した老騎士に、魔神の本性を顕にしたエメスが哄笑を上げた。

愚かな…とスケルトンは囁いた。

どの魔霊にも共通して言えることだが、魔霊が全霊を振るえるのは本来の姿を成したときだけだ。

だから、魔霊を本当の意味で打破しようとしたなら、彼らの全霊が凝り固まった「本性」を打ち倒すしかない。

咆哮を放ったエメスが、巨腕を大地に叩き付けた。

砕け散り舞い上がった石畳が、瞬時に砂の槍と化してスケルトンに襲い掛かった。

初撃を回避したスケルトンが、それらを剣で迎撃しつつ、エメスの腕を駆け上げる。

足を砂に囚われる前に、彼は大きく跳躍し、エメスの肩口から脇腹にかけてを剣でなぞった。

それは、おそらく特別な一撃だった。

剣というものは、極めれば極めるほど枝葉が削ぎ落とされてシンプルになる…それが剣聖と称される老剣士の持論だった。

骨格も筋肉も、血流もない筈のエメスだが、スケルトンには他の…何かが見えていた。

剣でなぞられた傷は決して深いものではない。

にも拘らず、エメスの身体は両断された。

彼女の巨体が、大量の土砂を巻き散らして崩壊する。

スケルトンの貫禄勝ちといったところだったが、代償は大きかった。着地の衝撃で踵骨を破損し、立ち上がることも難しくなってしまった。

すぐ後ろに愛弟子が立っていた。

そうなるよう、調整して跳んだのだ。

黒騎士を召喚するという選択肢も残されている筈だった。

しかし將軍は、相手が師であるということも作用してか、最後の最後で選択を誤った。

勢いよく抜剣し、

…これにはスケルトンもびびった。

將軍の手から、黒塗りの剣がすっぱ抜けた。

砂塵に覆われる中、なおも鈍く光った、くるくる回る剣を、姉姫と妹姫が切なさうに見詰めていた。

焦ったのはマウだ。

剣とは、つまり鉄塊である。

指先で刃をなぞれば、それだけで出血するのだ。

そこに重量が加われば、骨も無事では済まない。

とっさに影を踏み、師弟に割り込んだマウが、飛び上がって剣の柄を掴み取った。

そこまでは良かった。

が、首尾よくキャッチした將軍の剣は、異様に軽かった。

どういふことなの…と呟いたマウは、空中で重心を崩して着地に失敗した。

愛弟子のあまりの不甲斐なさに呆然としていたスケルトンは、辛うじて再構成したエメスの巨大な手で驚掴みにされた。

それが、事の顛末である。

文字通り勝利を掴み取ったエメスは、喜び勇んで宣伝に出掛けた。無理な体勢で着地して悶絶しているマウのことなど眼中にないようだった。

マウの部屋に集った一同の注目を浴びて、將軍はもじもじしている。

「…今日は、ちょっと調子が悪かったんだ」

いじけたように人差し指を突き合わせる彼女に、マウは「仕方ないなあ…」とぼやく。

「出た！」と余計な茶々を入れる姉姫を軽く睨んで、怪我をしていない方の手を將軍に差し出した。

「？」と首を傾げる將軍に、マウは微妙に視線を逸らして告げた。

「剣、貸して。魔剣、欲しいんだろ？ 約束は守る」？

第六十三話、魔剣誕生

何もない部屋だな、と妹姫は思った。

マウの具合が気になって何となく着いてきたものの、ひと段落してみると、「魔術師の部屋」というものに俄然として興味がわいてきた。

しかし絵本によく登場する、人間一人煮込めるくらいの大きな鍋とか、奇天烈な魔導書とかは見当たらない。

少し残念だ。

唯一興味を惹かれるのが、天井から吊り下がっている止まり木だった。

あとは最低限の家具があるくらいで、きちんと掃除しているらしい点は評価できると思った。

ベッドの上に座ってきよろきよろと身をよじっているものだから、そのたびに長い髪が布団の上で跳ねて衣擦れの音を立てている。

お尻の下敷きにならないよう、マウがちよいちよいと魔力で軽く浮遊させていた。

止まり木を指差した妹姫が、博識な姉に尋ねる。

「姉様、あれは何ですか？」

魔術師の少年が城で暮らすようになって以来、何故か姉と一緒に居

る機会が多くなった。

椅子に腰掛けて成り行きを見守っていた姉姫が、妹の指差した先を目線で追って首を傾げた。

「間取りの中心にあるから、おそらく前の住人が使っていたんだろう。以前、わたしも尋ねてみたが、先生も詳しくは知らないようだ。相当初期の魔霊なんだろう」

「魔獣かしら？」

姉と同様に首を傾げる妹姫に、姉姫は「どうかな？」と懐疑的な意見を述べる。

「伯爵が生まれて、次にベフィモスが生まれた。一見、無理がない流れのように思えるけど、わたしには少し唐突に思える」

ベフィモスというのはレヴィアタンの直兄に当たる魔霊で、魔獣と魔霊、両方の特徴を備え持っている。

雷と風を操る、強力な魔霊だ。

今は、女王に付き添って城にいない。

妹姫の理解が追い付くのを待って、姉姫が続ける。

「たぶん母様は、魔獣を量産する傍ら、実験的に魔霊型を生み出していたんじゃないかな」

その魔霊？魔獣？が、かつて羽を休めていただろう止まり木に、今はマウの使い魔が我が物顔で居座っている。

物憂げな表情で止まり木を見詰める姉に、妹姫は心の中で嘆息した。

（真面目にしてれば、立派なのに）

どうして普段はあんなのかしら、と妹姫が姉の将来を案じている最中、マウと將軍は無言の応酬を続けていた。

「……」

「……」

「……いや、さつさと寄越せよ」

痺れを切らせたマウが、片手を差し出したままの体勢で言った。

將軍は、マウ所望の剣を剣帯から鞘ごと引き抜いたはいいものの、先ほどから落ち着きなく身体を揺らすばかりで一向に手渡そうとしない。

「……でも、お前は姫様たちにやたらと馴れ馴れしいし……」

「あ？」

マウは、いい加減イライラしてきた。

彼女が何を躊躇っているのか、さっぱり理解できないし、魔力を連発した所為で疲れているのは事実だからだ。

とはいえ、女の子に苛立ちをぶつけるのは「優しい人」の定義から著しく外れている気がした。

マウは、努めて冷静さを保ち、將軍の手から彼女の愛剣をぶんどった。

「面倒くせえな…いいから、とつとと寄越すんだよ！」

インドア派とは思えない俊敏さで手元の武器を浚われた將軍が、何やら熱っぽい視線を向けてくるが、もはや知ったことではなかった。

將軍の剣は、やはり軽い。

見たところ、金属製には違いないようだが、純粹な鉄製とも思えない。

(…アルミか？　ちょっと違うかもしれないな)

試しに鞘から引き抜き、刀身をまじまじと見詰める。

こうして改めて見ると…マウは思った…

(いい剣だよ、これ)

武器の良し悪しなど、マウには分からない。だが…

將軍は、そもそも知らないか、すっかり忘れているかのどちらかだろう。

將軍の剣には、幾層もの「運ぶものたち」が取り巻いていた。

剣にこめられた魔霊たちの真摯な「願い」に惹かれて取り憑いたのだろう。

魔術師であるマウには、そうした…目に見えない筈の怪しげな生き物が視える。

魔術師は魔力を制御するために自分を騙す必要があるから、己が五感のカスタマイズに熱心だ。

「魔眼」は、その究極形の一つで、先人たちが長い年月を掛けて磨き上げた、魔力の基礎となる秘術だ。

魅入られたように刀身を眺めて、マウがそつと呟いた。

「決まりだな…」

少し興奮してきた。

將軍は剣を新調したがっていたが、これを手放すなんてとんでもない話だ。

マウは、抜き身の剣を肩で器用に固定すると、捻挫した方の手の包帯をするりと解く。

鈍い痛みを発し続ける手に視線を落とし、じっと凝視すると、やがて手のひらに糸ほどの裂傷が走った。

ぷくりと浮かんだ血球に、いつの間にか顔を寄せていた將軍が「あつ」と小さな驚声を上げた。

マウは、いつになく厳しい口調でたしなめた。

「騒ぐな。この程度、魔術師なら誰でも出来る」

魔力ですらない。単なる自己暗示だ。

痛覚を遮断しようとして、…やめた。

この痛みには意味がある気がした。

無傷の手で再び剣の柄を握る。

握りを調節して、出血した箇所には剣先を押し当てた。

粛々とした雰囲気吞まれて、將軍は「何をしているのか」とは問えない。

「…い、痛くない？」

「そりゃあ痛いよ」

剣先を伝った血液が、す、と刀身に滴る。

…だが、きっと必要なことだった。

マウの魔力は、彼自身に対して最大の効果を発揮する特性を備えている。

だからマウの血液は、彼自身が望むなら、魔力を付与するに当たってこの上ない純度を帯びている筈だった。

アプリカに手伝って貰えば手間を省けるだろうかと、ちらりと思っただが、すぐに考え直した。

愛しの使い魔は、將軍に対して少しばかり手厳しい。

最初の頃はそうでもなかったのだが、ここ数日ですっかりへそを曲げてしまったようである。

何が悪かったのか…

ああ、僕の所為かとマウは思い至った。

アプリカはマウの使い魔で、使い魔は術者の心を映し出す鏡だ。

（そうだよな。そう…）

マウは、考えを改めた。

自分一人でやろうとしたのは間違いだった。

止まり木で翅を休めているアプリカを見上げる。

「アプリカ」

彼の使い魔は、積極的には反対しなかった。

ただ、あまり気乗りしない様子で主人を見詰めた。

「アプリカ」

マウは、繰り返し使い魔の名を呼んだ。

「おいで。僕にはお前の助けが必要だ。これまで、ずっとそうだった。これからも」

そうして、じっと見詰め合う。

アプリカは何を思うのか。マウには分からない。

使い魔は、術者の分身だ。

彼らの意識は、魔術師が与えた仮初のものでしかない。
理屈ではそうなる。

それでも大切にしたいと願う「心」はきっとあるんだと、マウは思っている。

ややあつて、アプリカは如何にも仕方ないと言うように、翅を広げて舞い上がった。

ぱたぱたと宙空を横切り、將軍の肩にとまる。

「え、そっち!？」

使い魔は、術者の分身なのである。

將軍の華奢な肩を足場に踏ん張ったアプリカが、バイオリンと弓を構えた。

「…何かごめんなさいね」

とりあえず謝ったマウが、將軍の剣を掲げ持つ。

くすぐったそうに身をよじった將軍が、びっくりして言った。

「わたしの剣が魔剣に!？」

「遅いよ気付くの!？　そういう流れだったでしょ!」

とにかく、かくして、將軍の剣は新たに生まれ変わったのである。

効果のほどは、また後日。

第六十四話、雪女の恋

全治二日と診断された手首の捻挫が、三日目の朝になっても鈍痛を訴えるのは、きつとろくに眠っていないからだった。

寝台の上でのそりと上半身を起こしたマウは、夢の世界に半身を浸したままベッドから降りると、足取りも臃に部屋を出て、洗顔と歯磨きを済ませて戻ってくる。

のろのろと服を着替え、ベッドに腰を沈めて一息吐く間もなく、

「じゅっしい」

と将軍が半泣きで部屋に転がり込んで来た。

「……」

マウは、両手で顔を覆った。

何か悲しいことがあったとき、彼はそうやって現実から逃避するのだ。

「…マウです。どうしたの」

前に居たところでは彼自身の意思に反してユーティユーティと呼ばれていたのに、朝一番には自己紹介する癖があった。

「あれ、起きてる…」

せつかくの寝起きドッキリが初手で失敗に終わり、将軍は残念そう

だった。

しかし嘘泣きではなかったらしい。

彼女は涙を噉りながらマウににじり寄ると、無抵抗な彼の腕を手に取り、袖で涙を拭った。

舟を漕ぎながら「うんうん…」と適当に相槌を打つマウに、将軍が涙ながらに訴えた。

「め、メディアがいじめるんだ」

マウは、速やかに布団に入りたかった。

将軍の後を追ってやって来た氷雪の魔霊が、室内の温度を急激に下げ始めたからだ。

《小僧、その女を寄越せ。カチカチに凍らせて死海に沈めてやる》

肌も髪も、着物に至るまで雪のように白い童女が、赤眼を怒りに染めていた。

厄介事に巻き込まれたことは明白だった。

しかしここで逃げても結局は同じことだと分かっていたから、マウは項垂れて未練を惜しんだ。

「何だよもう…朝から穏やかじゃないなあ。…メディア？」

事情を聞こうと水を差し向けると、裸足の童女がぺたぺたと歩み寄ってきて、マウに泣き縋っている将軍へと無言で手を伸ばそうとする。

「メディア」

今度は少し語気を強めて、マウが言った。

魔術師の言葉だから、魔力とは無縁ではられない。

見えない力が働いて、メディアの小さな手がぴたりと止まった。

激情に燃える視線で射抜かれて、マウは少し鬱になる。

《…小僧。わたしに逆らうのか？》

メディアは、マウを「小僧」と呼ぶ。

大半の魔霊が、マウとは比較にならないほど長く生きているのだ。

それでも、人間は老いから逃れることができないから、不老長寿の魔霊と比べて精神年齢が低いということにはならない。

マウは、たしなめるように言った。

「逆らうも何も。君、上司に何する気なのさ」

將軍は、魔霊たちの指揮権を持つ、この世で唯一の人間だ。
メディアの一存でどうこうしていい存在ではない。

侮蔑の目で見られた。

《尽く尽く…小僧…貴様は女に甘いな》

「待つて？ おれ、そういうイメージなの？ 違うからね？ 彼女はあなたの上司で、あなたは彼女の部下でしょ？ おれ、ちゃんとそう言ったよね？」

一気に喋って目眩がした。

すつと顔を上げた將軍が、ぼそりと言う。

「…もしもわたしが男だったら味方してくれない癖に」

「そりやそうだろ！ 野郎が泣いてるの見て、どうして親身になれるよ！？」

マウは認めた。

氷雪の魔霊メディアは、戦うことにも帝国の行く末にも関心がない。そんな彼女だから、エメスよりも古い魔霊であるにも拘らず、メディアは彼女自身の権能を鎮める術を知らない。

メディアの周囲では、凝固した空気中の水分が塵と結び付き、自然と雪が降り始めていた。

將軍の長い睫毛に舞い降りた粉雪が、瞬きするたびにはらはらと散っている。

彼女の頭に積もった雪を片手で払い落としてやりながら、マウは思いついて言った。

「男女を平等に尊重することと、同じ扱いするのは違うだろ。それじゃあ単なる乱暴者だ…」

「そうやって誤魔化すんだ」

《見苦しい言い訳を…》

間髪入れずに女の子たちにツッコまれた。

お前ら喧嘩してたんじゃないのかよ…とマウは胸中で吐き捨てる。

「気付けばおれが悪役だよ。本当に、どうなってるんだよ、おれの人生…」

止まり木の上で喧騒を見守っていたアプリカが、いつものパターンだと…何事も諦めが肝心だと慰めてくれた。

それもそうだなと納得して、改めて事情を問い質す。

姉姫ですら六時間は眠らせてくれるのに、夜間警備の仕事を押し付けてくれた将軍が三時間の睡眠時間を強要するというなら、それ相応の理由がある筈だと信じたかったのだ。

聞けば、事の発端は三日前にマウが将軍に与えた魔剣であるという。

それほど大それた魔力を付加した訳でもないのだが、魔剣を手にした将軍は何だか自分でも驚くほど嬉しくなって、女王不在で引きこもっている魔霊たちを訪ねては見せびらかしていたらしい。

もちろんメディアにもだ。そこまでは良かった。

自室で天井から氷柱を生やしては固めた雪玉を投げ付けて折る作業を延々と繰り返していたメディアは、珍しく將軍の魔剣に関心を示した。

將軍の剣に付与された魔力は、振れば薄紅の残光が軌跡を描くという、まるで実用性に欠けるものだった。

マウが、將軍の剣に宿る精霊たちに働きかけて、自分の魔力を定期的に補充することを条件に、心の力を糧に発光してくれるよう交渉したのだ。

交渉は滞りなく締結された。

精霊たちは、魔術師に対して好意的だ。

精霊の捕食者である「妖精」を古き盟約で従え、また新たに生み出しもする魔術師は、憎まれてもおかしくない筈だった。

しかし精霊に死という概念はないから、魔力という、カテゴリーは違えど「心の力」を操る魔術師は、精霊たちからすれば「同属」とまでは行かなくとも「同僚」程度には思われているらしい。

その辺りの説明を、マウは魔剣の保持者である將軍に一切していない。

面倒だったからだ。

ただ、魔力を補充する必要があるから、光が弱くなってきたら自分のところに来いとは伝えてある。

頻繁に魔力を与えすぎると、精霊たちは本来の職務を忘れて墮落してしまう。

それを避けるための処置だ。

普段、自分をあまり快く思っていないらしいメディアも、將軍の魔劍には興味津々の様子だった。

しめしめと思った將軍は、ここぞとばかりに魔劍誕生の経緯を披露したのだという。

いわく…

あの魔術師は女の子に甘いから、おねだりすれば頼みを聞いてくれる。赤子の手をひねるようなものである…

「おい」

得意気に武勇伝（？）を語る將軍は、マウの呼び掛けを無視して続けた。

メディアの好感度を獲得し、すっかり気分を良くした將軍は、やがて本日の早朝、魔劍自慢ツアーの第二周目に突入した。

「…何でそういうことするの？」

無意味だとツツコむマウを、將軍はまた無視した。

魔霊訪問を再開した將軍。

そこで、事件は起こったのである。

一人目の標的は、もちろんスライムだ。

魔霊の長老であり、また自分を強く支持してくれている最古参の重鎮であるから、將軍は何事かあると大抵の場合はスライムに優先権があると考ええる。

今回もそうだった。

一回目とは趣向を変えて、黒騎士との殺陣を披露する將軍に、スライムは（雰囲気的に）目を細めて褒めちぎってくれた。

そこで、奇遇にもスライムの部屋を訪ねてきたメディアと鉢合わせた。

手文字で將軍を応援しているスライムを見て、何故だろう…今もって將軍には理解できない…

メディアは、血も凍るような、冷たい微笑を浮かべた。

…聞くに耐えない。

マウは、再び両手で顔を覆った。

朝から叩き起こされて、自分は被害者だと思いがついていた。

そうではなかった。

この一件での最大の被害者は、疑う余地なく、あの哀れなスライムだった。

マウは、修羅場に追いやられたスライムの末路を偲びつつ、辛うじ

て声を絞り出した。

「…それは怒るだろ。自分の好きな相手が、他の女の子を褒めちぎってたら、それは怒るだろ…嫉妬もするだろ」

「…え!？」

ひと呼吸置いてから、將軍はびつくりして目を見開いた。
素早く振り返り、メディアを見る。

「メディア…あなた、スライムのこと好きなの!？」

メディアは、將軍を無視してマウに詰め寄った。
気炎を上げて、

《…変な言い方をするな! それだと、まるでわたしが…あれに恋をしているようではないか。わたしは魔霊だぞ、貴様ら人間と同じ物差しで計るな!》

彼女に自覚はないようだった。

あるいは自覚しようとしていないのか。

いよいよ面倒くさい事態になってきて、マウは普段着であるカット
ーシャツの袖をまくろうとし、直前で止めた。

行き場をなくした手を頭に持っていき、付いてもいない寝癖を直す
ような素振りをして、言う。

「君たちは、怒りと憎しみの具現だろ。だから愛情とは無縁だって
? 馬鹿言っちゃいけない」

何か言い掛けるメディアを遮って、マウは畳み掛ける。

「メディア。何かを憎もうとするなら、その比較になるものは何だ？ 愛しいものがないなら、そもそも憎しみは生まれない」

怒りと憎しみの具現だからこそ、愛情とは無縁ではいられないのだ。スライムが限りなく不死に近い存在だから、メディアは安心して自分の気持ちに向き合おうとはしていない。

だが、スライムにとってはどうだろうかと、マウは思うのだ。

メディアは、熱に弱い。

そして人間は、この先、さしてそう遠くない未来で、魔霊たちに対抗して火器を開発するかもしれない。なかった。

そのとき、自分が寿命を迎えていない保障など何一つとしてない。

マウは真剣だった。

それなのにメディアは、（雰囲気的に）顔を真っ赤にして、言うのだ。

《あれを苛めていいのは、わたしだけだ。わたしだけが、やつの弱点を突ける。それが愉快でならない。それだけだ、勘違いするな》

マウは、少し自信がなくなってきた。

スライムの幸せを願うなら。

第六十五話、心の声

「ねえ、メディア。ねえねえ、ねえったら」

きらきらとした瞳で詰め寄ってくる將軍に、メディアは心底からうざったそうな視線で応じるのであった。

未発達な権能だから、感情に引きずられて、室内がガンガン冷却されていく。

「……」

己の寝室に降り積もっていく雪を眺めて悲しさと虚しさを感じているマウと違って、將軍はホットなニユースに興奮を隠し切れない様子だった。

自分は先ほどから「寒さ」を訴える生理的な機能と「寒い」と感じる気持ちを自己暗示で切り離そうとしているというのに、彼女は宝鎧に護られてぬくぬくとしている。

理不尽だと思った。

將軍がマントの下に着込んでいる黒皮の鎧は、「最強」と称される魔霊から授かった、この世に二つとない霊鎧だ。

柔軟性に富み、軽く、剛い。

防具としても一級品であるのに加え、装着者の体温を調節し、体力の消耗を軽減してくれるという夢のようなアイテムだった。

將軍は、しつこくメディアに食い下がる。

「ねえ、本当なの？ スライムのこと好きなんだ。わたし、応援するから！」

興奮のあまり、口調が変わっていた。

《……》

メディアは、無言でマウに視線を投げた。
極寒の眼差しだった。

これを何とかしろということだ。

マウにとっても誤算だったのは、メディアがスライムに対して抱いている気持ち（本人は否定しているが）を、将軍が知らなかったということだ。

魔霊の《声》を聞き取れるのは魔術師だけだ。

しかし、スライム以外には懐かない、それでいて嫌がらせのようなことを繰り返して気を惹こうとしている（ようにしか見えない）メディアの想いは一目瞭然ではないのか。
そうでもないのだろうか。

帝国に来て日が浅いマウには、領内での常識に疎い面がある。
断言は出来なかった。

姉妹あたりなら、とうに承知していそうなものだが…

と、そこまで考えて、マウは思い付いた。

「そうだ、姉姫に相談しよう」

持つべきものは友達である。

すかさずメディアが反論した。

《あのうつけに相談してどうなる》

それが、城内での姉姫に対する一般的な評価である。

友達のことを悪く言われて、マウがむっとした。

けれど、この場には魔霊の声が聞こえない將軍もいて、おまけに何やら期待の面持ちでマウの通訳を待ちわびているから、下手なことは言えない。

言葉を選ぶべきだった。

「…彼女は物知りだからな」

些細な食い違いを、メディアは気にも留めない。

《よしんばそれを認めたとしても、何を尋ねるといふのだ。貴様、わたしの話を聞いていたか？》

彼女は、スライムのことを単なる楽しい玩具だと主張しているから、姉姫に助言を貰うメリットはないと言う。

そして思い付いたように、こう付け加えた。

《…小僧、貴様には貸しがあったな。わたしの名誉を回復しろ、今

すぐにだ』

一方的な要求だったが、マウは頷いた。
しかし、「名誉」とは？ 彼は言った。

「あのととき、僕は君に協力すると言ったな。君はその条件を呑んだ。
本当にそれでいいのか？」

歓迎会での一幕だ。

マウには、自分が「魔法」を使ったという自覚がない。
そもそも、「魔法」という概念を知らない。

魔術師たちの社会では魔力が全てだから、自分たちの利益になる魔
術師は育てても、脅威になる存在を育てようとはしない。

それでも、一度は「魔法」に触れたマウだから、はっきりと言える
ことがあった。

「心を操れる魔力は存在する」

メディアが息を飲んだ。

マウは、無表情だった。

「君が本当に望むなら、君の気持ちかを否定してあげる」

はったりだ。

感覚的に分かる。再現できるかどうかすら怪しいが、仮に再現でき
たとしても、以前と同様の効果が働くことになるだろう。

あれ以上はない。

他者の心を操ることは唾棄すべき所業か？ そんなことはない。

マウの本音だ。

世界は、どうしようもなく病んでいる。

ままならないことばかりだ。

理性は否定する。そんな遣り方で得たものに、どれだけの価値があるのかと。

もしも他の魔術師が似たようなことをしたなら、真っ向から批判するだろう。

お前は間違っていると声高に叫ぶだろう。

それなのに、自分が使うぶんには構わないらしい。

自分という人間の深淵に横たわるものと直面した気分だった。

数多くの魔術師を倒してきた。

どれだけ蔑まれようと、誇り高く生きてきたつもりだった。

道路の果てが、ここだ。

…将軍の鎧姿は、失うにはあまりに惜しい。

並行して思考を展開していた、将軍の普段着に関しての考察が、結論を導き出していた。

「違うだろ！」

唐突に叫んだマウに、メディアがびくつとした。

もう何を話していたかすら覚えていなかったから、勢いで誤魔化すしかなかった。

「正しいとか間違ってるとか、そうじゃないだろ。願っただけじゃ駄目なんだよ。期待して、失敗したら恨むのか？ 違うだろ。生きるんだよ。生きてるなら、今だろ…」

当たり障りのないことを口にするマウだが、そんな彼自身の「今」が一番不安定だった。

けれど、中身のない言葉でも、ときとして人を動かすことはあるのだ。？

《わ、わたしは…》

メディアが揺れていた。

マウは焦った。ハリボテの信念に心を動かされても困る。

(…！)

とっさに心の中で使い魔に救援要請を送る。

止まり木の上で我関せずとばかりにバイオリンの調律をしていたアブリカは、マウと目が合うと、白々しくも首を傾げて、すっ…と朝靄に溶け込むが如くフェードアウトしていった。

…これは試練だと、マウは思った。

（僕は試されてる）

自分の気持ちを身詰め直して沈黙するメディアと、方向性も定かない決意を固めるマウ。

混沌とし始めた場で、將軍の甲高い嬌声が響いた。

「あ、姫様！ うん、おはよ。あのね、今…！」

「……」

將軍や姉妹がアクセサリのようにして持ち歩いている懐中時計には、サイレンという歌音の魔霊が封じ込められている。

見た目は等身の低い小人であり、周囲の…おもに所持者の「声」を吸収して自らの形とすることができた。

また、分身と情報を共有できるという特性を利用し、ちょうど今、將軍がやらしてくれたように、遠く離れた所持者同士で連絡を取ることも可能だ。

フラスコの中で小さな將軍がくるりと回って、白いドレスを着た銀髪緑眼の少女に変わる。

ああ、そう。マウ、やつちゃったね…。聞いてるかな？　こら、

マウ。やいマウ。お口が軽いんだよ、まったくもう

デフォルメ版の姉妹が、短い手足を精いっぱい動かして、マウを叱責していた。

マウは、何だかひどく満たされた気持ちになった。

第六十六話、反目

情報の漏洩にご立腹のメディアは、何故か張本人の將軍ではなくマウに当り散らすのであった。

《…！》

彼女の細腕でぺちぺちと往復ビンタされたマウは、何ら痛痒を感じていなかったため、気の済むままにされた。

身体の震えは一向に止まらなかったが、感情を切り離すことに成功した彼にとって、もはや寒さは他人事でしかなかった。

「ははは、こいつめ…」

メディアは、妹姫よりも背の低い小さな女の子の姿をしている。

彼女たち魔霊を生み出すのは帝国の女王であり、女王は人間で言うところの絶世の美女であるから、彼女の力で生み出された魔霊は、大抵が見目美しい女性の姿をしている。

「わ、わたしも混ぜろ！」

姉姫との通話を終えた將軍が、自ら進んでメディアの平手を受けて恍惚としていた。

「……」

その様子を見て、マウは心なし身を引く。

前々から、ちょっと変な女の子だとは思っていたが…

マウは、少し離れたところで用心深く二人を見守る。

その時だ、止まり木で翅を休めていたアプリカが、ぱっと飛び上がった。

マウの使い魔への愛情は深い。

滑空するアプリカを目で追うと、開きつ放しになっていた扉の先、廊下に小さな人影が立っていた。

人間には有り得ない、純粋な銀の色彩を持つ髪が、さらりと揺れる。

魔霊たちを統べる王族の第二王女、小さい方とかよく言われる妹姫だった。

魔術師でもない彼女が前触れもなく現れたということは、つまりマウが影を踏んで連れてきたということだ。

ならば当然、マウは妹姫の隣に立っていることになる。

外出する時、アプリカの定位置はマウの肩の上だから、滑るように舞い降りてきた使い魔がマウの肩にとまった。

マウの魔力は一通りアプリカの監視下にあり、またアプリカが行使する魔力はしばしばマウの理解を超えるため、こうした時間軸上の矛盾が起こるのはさして珍しいことではない。

魔力を使えない者からしてみると影踏みは瞬間移動としか思えない

から、空間跳躍を体感した妹姫は「おお……！」と緑色の大きな瞳を輝かせたのだが……

「……………」

マウの部屋でじゃれ合っている帝国軍元帥と氷雪の魔霊を視界に捉えて、急に無言になった。

メディアのビンタを甘んじて受け入れていた將軍が、妹姫の平坦な視線に気付いてはっとした。

彼女は普段には見られない俊敏な動作で妹姫に駆け寄ると、恐れ多くも帝国の第二王女と手を繋いでいる不埒者に天誅を下そうとし、あっさりと避けられて悔しそうな顔をした。

それから改めて妹姫にひしっと抱きつく。

「姫様……！」

妹姫は無抵抗だった。

傍らのマウを見上げて、

「わたし、授業中だったんだけど……何なの？　これ」

「いやあ……」

マウは眉根を寄せて困ったように微笑んだ。

「……姉姫は何て？」

事情を知らない妹姫がここに居るということは、姉姫から情報のリークがあつたということだ。

おそらく先ほど将軍がそうしたように、サイレンを介しての通話があつたのだろう。

「行けば分かるって。自分は今、手が離せないから代わりにお願いって言われた」

「そうなの？ 何してるんだろ」

友人の余暇の過ごし方にマウは興味を抱いた。

しかし、その妹は断言した。

「どうせ下らないことよ。あの人、ちょっと目を離すと自分ルールでおかしなことし始めるから」

「そうなんだ」

意外な、という風に目を丸くするマウに、妹姫はふと思った。

(…ああ、姉様はマウの前だと猫を被ってるのね)

マウは知らないのだ。

…姉は、決して優しくなどない。

マウが毛嫌いする女王の性質を色濃く受け継いでいるのは、力に秀でる妹姫ではなく、むしろ非力な姉姫なのだ。

とはいえ、姉とマウの交友に自分が口出しをしても仕方ない。

妹姫の興味は、すぐに別のことに移った。

すりすり頬を寄せてくる將軍を無視したまま、

「メディア、あなたいつの間にこれと仲良しになったの？」

権能の関係上、筆談を不得手とするメディアは、意思の疎通が難しい魔霊だ。

だが、今は便利なのが横にいる。

メディアも心得たもので、第二王女の質問を無視してマウに詰め寄った。

《おい小僧。何故、小さいのがここに居る？ 中くらいのはどうした》

思わずマウは吹き出してしまった。

姉妹は女王を雛形としているため、三人が並ぶと成長の過程を見ているような感じになる。

だから不遜な魔霊は、彼女たちをサイズで区別して簡潔に呼ぶことがままある。

反射的に妹姫を見て、笑いを噛み殺しきれずに「ふっふっ」と奇妙な吐息を漏らしたマウに、当の本人である妹姫が形の良い眉を跳ね

上げる。

「…なに？ 通訳なさい」

マウは魔術師だから、言葉を持たない魔霊と意思の疎通が出来る。

そうと知っている筈の魔霊は、だのに実際に通訳するとマウが八つ当たりされそうなことを平気で言う。

当然、マウは自分の言葉で上手く誤魔化さねばならない。

「いや、姉姫に相談したいことがあったんだよ。プライベートなことでだから…でも妹姫はお願いされて来たんだよね」

さて、姉姫は何を考えて妹を寄越したのか。それが問題だ。

マウはしゃがみ込んで、妹姫と視線の高さを合わせた。

「妹姫は、好きな子っているのかな？」

「…？」

唐突な質問に、妹姫は首を傾げようとして失敗した。将軍にがちりとホールドされていた。

「好きというか…母様のことは尊敬してるけど」

試すような口振りで言う。

マウは、妹姫の母でもある女王を忌み嫌っている。

母が留守にしている今だから、マウの方から歩み寄って欲しいと期待していた。

その期待には応えられないと知っていたから、マウは純真な子供には真似できない卑怯さで気付かないふりをした。

「そつかあ。まだ七歳だもんな」

よしよしと妹姫の頭を撫でる。

子供扱いされていると感じて、妹姫はご機嫌斜めだ。

「そうやってすぐ触る。本当に見境なしなのね」

ちょっとした反撃のつもりだったのだが、マウは目に見えて狼狽した。

「触る」という単語に敏感な今日この頃なのである。

彼は素早く視線を逸らして、ぼそぼそと独りごちた。

「まずいな…まずい流れだ…」

案の定、三人に責められた。

第六十七話、暗躍

マウが女の子たちに言葉責めされている頃、姉姫は自らの使命を懸命に果たそうとしていた。

「がおー」

「…舐めてるんですか？」

就寝中、トカゲの着ぐるみに襲撃されるという事態に遭っても、エメスの対応は冷静だった。

王族に忠誠を誓っている彼女だから、最低限の礼儀を守って敬語だ。

エメスの寝室は、彼女のくつろぎ空間であるから、床一面にきめ細やかな砂が敷き詰められている。

黒騎士に夜なべして作ってもらった着ぐるみで歩くと、体重のぶん足が砂に沈むため、背びれのついた尻尾の先が蛇行して浅い軌跡を描いていた。

エメスに憐れみの目で見られて、今はトカゲの姉姫はこほんと軽く咳払いした。

「まあ座れ」

「色々と手遅れですけど…はあ…」

躊躇いがちに頷いて、エメスは砂の上で胡座を掻いた。

「こら、下着が見えてる」

「いや、殿下に言われても…」

普通の姉姫は、丈の短いドレスを好んで着用するため、けっこうな頻度で下着が見えるのだ。

マウに言わせてみれば「いや、そんなことはない」と真剣に否定するだろうが、それは姉姫なりに彼の前では男性の視線を意識して振る舞っているからだ。

居住まいを正してきちんと正座したエメスに、姉姫は鷹揚に腕を組んで小刻みに頷いた。

エメスは、ふと疑問に思っただけで尋ねた。

「暑くないスか？」

「暑い」

姉姫は即答した。

將軍には外気温をほとんど無視できる魔法みたいな鎧があるが、姉姫はそうもいかない。

いついかなる時も、帝国の王族は武装しない。

武装した人間たちを、優雅なドレス姿で見下すのが好きだからだ。

だが、今の姉姫は立派な着ぐるみで、しかも彼女は帝位の正統な跡継ぎと目されているから、正直エメスはこの国の先行きが不安になる。

「えつとお…」

とりあえず気の利いたことでも言うべきかと口を開くも、姉姫に「まあ待て」と機先を制される。

「お前の言いたいことは分かる」

差し出した片腕の先端には、猛禽類のそれを思わせる見事な鉤爪が具わっていたものの、きつちりと内部にまで布が詰まっているらしく、暖かみのある曲線を描いていた。

「あらかじめ黒騎士に注文しておいたのだが…どうもわたしのイメージが上手く伝わっていなかったらしい。どうしてこうなった…」

途方に暮れた姉姫が、如何にも無念というように天を仰ぐ。

…だが、千載一遇のチャンスであることは確かだった。

歩行速度から逆算して、今頃マウは妹姫と合流している筈だ。

スケルトンの証言を鑑みるに、魔術師がよく使う「影踏み」とやらは瞬間移動ではない。

姉姫は魔術師ではないから魔霊の《声》を聞くことは叶わないが、言伝を依頼することはできる。

利害が一致したなら、マウは複数名の影を同時に踏める。
魔術師としても稀有な能力だ。

マウ本人からしてあまり意識していないようだが、それは条件さえ
整えば、彼の魔力を第三者が利用することも可能であるということ
だ。

影踏みは瞬間移動ではない。

だから今なら、神出鬼没の少年魔術師が姉姫の前に現れることはな
い。

姉姫は溜息を吐いた。

最強の魔霊に命を狙われるかもしれないと知っても、彼は自分たち
の傍に居てくれるのだろうか？

…母は、「彼女」を上手く説得できるだろうか。
おそらく難しいと、姉姫は見ている。

「…エメス、あなた…」

口調を正した姉姫に、エメスはぎょつとした。

幼馴染みの人間の少女と同じ姿をした魔霊に、姉姫は言う。

「あなた、ドラクルに勝てる？」

無理よね…と頂垂れる第一王女に、エメスは身を乗り出して犬歯を

剥き出しにした。

「負けませんよ！ あんなやつに！」

「そう？ ……そうかしら。本当に？」

「もちろん！」

勢いで言ってしまったエメスは、少し後悔した。姉姫が、にやりと微笑んだからだ。

「よろしい。ならば教育だ」

掛かって来なさいと怪鳥の構えをとる姉姫に、エメスは途方に暮れた。

少し遅れて、ああ、これドラ公のコスプレなのかと腑に落ちた。

（頭悪いなあ……）

失礼だけど、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5724m/>

魔法日和

2011年1月26日23時42分発行